

BLACK/MATRIX REACT

suiru

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

善と悪の概念が逆転した世界で、愛を口にした黒い羽を持つ青年ゼロは七つの大罪を
犯した罪人として異端審問官に何処かへと連れ去られてしまう。愛するゼロと引き離
された白い羽を持つ者、ディーナは、彼の救出を決意し旅立つ。旅路には他の七つの大罪
を背負う者たちが加わり、過酷な運命との戦いが幕を開けた。

【コメント】

原作のゲームソフトは1998年にセガサターン用として発売されました（後にドリ
キヤス版とPS版も発売）。

今更ながら作品の世界観（善惡の概念が逆転、七つの大罪等厨二心をくすぐる設定）、

ストーリー（少年漫画のような熱い展開も続く中、ラストで待つどんでん返し）、キヤラクター（声優さんも豪華！）に魅了され、衝動的に執筆を始めたものです。

自己満足の稚拙な文章ですし更新頻度も未知数ですが、一人でも多くの方が原作に興味を持つてください幸いです。

原作の主人公は男性で、女性（場合によつては男性）の御主人様を救う為に旅立つという設定ですが、この作品ではオリジナルの女性主人公と原作の男性の御主人様を採用しています。

目

次

序章	
第一章 パンドラの箱庭	
第二章 ゴルゴダの牢獄	
第三章 太陽の神殿	
第四章 襲いくる郷愁	
第五章 強欲の街	
第六章 暴食の街カナン	

222 163 112 61 22 4 1

序章

「この世界が創造されて間もない頃。偽善者の大悪神ゴッドは、天界の黒き羽の者達を欺瞞していました。愛などという彼らの妄言によつて、黒き羽の者達は耐え難い苦しみを受け続けていたのです」

壇場に立つ神官が厳かに両腕を天に掲げ、講説を始めた。その神官は、両側頭部には闘牛が持つものに似た巻き角を、背中にはコウモリのような黒い羽を生やした初老の男である。

「その惨状に胸を痛めていたのが、世界の救世主、偉大なる大天使メフィスト様でいらっしゃいます。ある時メフィスト様は、父なる大神サタン様の旗の下、大惡神ゴッドとの配下である白き羽の邪神達の虐政に決起し、勇敢に戦いを挑きました。創世記戦争の開戦です」

神官が立つのは、大聖堂の中。ドーム状の天井は高く、陽が落ちきつた今、燭台の薄暗い灯りだけでは最上部分は闇に包まれている。

その天井を支える無数の柱には、神官と同じく二本の角と黒い羽を生やした、異形の獣達の彫像が飾られている。三叉槍を構え、下卑た笑いを浮かべながら地上にひしめく

信者の群れを見下ろしていた。

「天界を二分し、六百六十六日間にも渡り続いた激しい戦は、ゴッドの戦死により遂に幕を閉じました。そしてメフィスト様達は、残りの邪神達をこの魔法都市リニアの地下深くの地獄に封じ込めることに成功したのです。世界の秩序はあるべき姿に書き換えられ、黒き羽の者達は愛や平等などという詭弁に踊らされる恐怖から解放されました」

同一のローブをまとつた黒い羽の信者達は息を凝らして神官の口から紡がれる言葉に聴き入つてゐる。中には感極まつてむせび泣く者もいる。

「我々には、他者の幸不幸や生き死にのために余計な体力や気力を消耗する必要は一切ありません。ただ己の欲望を満たすために、ありとあらゆる手段を用いて邁進することこそが、尊い生き方なのです。我々がこうして健やかな日々を送ることができるのは全て、完全無欠の大天使メフィスト様の御力によるものです」

神官の教えに疑問を持つ者はいなかつた。それこそが、現在の満たされた自らの境遇を担保する真理であつた。

「我々がこの背中に持つ高貴な黒き羽は、我々が救世主メフィスト・フェレス様の直系の子孫であることと示しています！ そしてここにいるあなた方は、己の野心のために他人を蹴落とし、あるいは利用しながら激しい闘争を勝ち残つた選ばれし強者なのです！」

淀みなく泰然としていた神官の調子が、激情を帯びたものへと変わった。紅潮し、掲げた両腕を震わせる。

そして彼が振り向き視線を移した先の祭壇には、『生け贋』が横たわっていた。「一方で、白き羽を持つ者達は、世界を混沌に陥れていた邪神の末裔です。白き羽の者達は未来永劫、我々に隸属し、その罪を償い続けなければなりません」

いつの間にか神官の右手には抜き身の短剣が握られていた。ちょうど狩猟で仕留めた鹿や猪を解体するのに手頃の大きさである。

神官は重々しい足取りで祭壇の側まで近づき、『生け贋』を眼前にして逆手に持ち直した短剣を振り上げた。そして身のうちに秘めた凶悪性を凝縮したような笑顔で信者達を見渡す。

「だからこそ白き羽の者共は、我々黒き羽の繁栄を存続させるための生け贋として、その身を捧げる必要があるのだ!!」

『生け贋』の処刑という至高の娯楽の開幕に、信者達の気の高ぶりは最高潮となつた。神官の邪念と信者達の欲望が一体となり、大聖堂は異様な熱気に包まれた。

その時だつた。大聖堂の正面扉が勢いよく開け放たれ、一人の男が飛び込んで來た。「やめろ！ 今すぐ儀式をやめさせろ——!!」

男の絶叫と同時に、『生け贋』の心臓へ短剣が突き立てられた。

第一章 パンドラの箱庭

一

その人物が闇の中で最初に感じたものは、激しい痛みと閉塞感だつた。痛みが身体のどこからくるか探つてみれば、身体中からだつた。全身のいたる所の骨が軋んでいる。棺桶に閉じ込められ、そのまま押し潰されていくようを感じた。

そして苦痛を伴う暗黒は恐怖を生み出した。自分は永遠にこのままなのではないかと。逃れる術を思案しても、何も思い浮かばない。果てしない不安に駆られ、息が詰まりだす。

すると、闇の中に何者かの声が響き始めた。聞き取ることはできなかつたが、その声が現実と悪夢の境をさまよう自分へ覚醒を促す呼び声だということはわかつた。無我夢中で全神経を呼び声へと傾ける。

重い瞼がゆつくりと開いた。

「ディーナ！　目が覚めたんだな！　本当によかつた！」

責苦のような夢から解放されたその人物の顔を、男が覗きこんでいる。呼び声の主

だ。

「お前、十ヶ月以上も眠つたままだつたんだぜ！ 心配させやがつて……」

暗く渋い紫色の髪が後頭部に丸みを帯びながら首元まで伸びており、整つた輪郭を作つてゐる。切れ長な深紅の瞳の中には安堵の光が輝いていた。

デイーナと呼ばれた人物は、口を開かずただ呆けた様子で彼を見つめ返してゐる。「まだ意識がはつきりしてないな……。水と、何か食えるもんを持つてくるから、ちよつと待つてな」

男はデイーナが横になつてゐる寝台の側から軽快に立ち上がり、家の外へ出て行つた。男がこちらに背を向けた時、デイーナは彼の背中にコウモリのような黒い羽が生えていることに気づいた。男が出て行つた後は、寝台から視線だけを動かし家の中をぼんやりと眺め始めた。

簡素な木造の平屋である。目についた家具は、男が使つてゐると思われる寝台と、石造りの暖炉と、本が数冊仕舞われてゐる書棚、そして丸太脚のテーブルと椅子くらいだ。部屋の景色が見慣れてくると今度は、自分の身体をどうにか動かしたいと考えた。長きにわたる眠りは驚くほど身体から筋力を奪つており、思うように力が入らない。慎重に右向きに寝返りを打ち、左手に力を入れて起きあがろうとする。すると左手が柔らかい羽毛に触れた。白い鳥類の翼である。しばらく呆然とその翼を触つていたが、それが

先程の男と同じように自らの背中に生えている羽だということに気づいた。

それから小さな呻き声をあげて、やつとの思いで上体を起こした。正面を向くと、白い羽の生えた一人の女と目が合った。瞳を凝らすと、そこに立っていたのは人ではなく姿見だった。

鏡の中の女は、腰まで真っ直ぐに伸びた栗色の髪と新緑の様な鮮やかな瞳を持つている。実年齢よりもあどけなさを感じさせる風貌だ。

昏睡状態から目覚めたばかりの彼女の佇まいはひどく弱々しく、顔面からは血の気が失われている。そしてデイーナは鏡に映るものが自分自身だと確信することができなかつた。単に、長い間臥せつていたため変わり果てた自らの容姿に落胆したからではない。自分の顔を覚えていないからだつた。顔だけではなく、自らに関する全ての記憶が彼女から欠如していた。

二

「おい、勝手に動いて大丈夫なのか？ 無理するなよ」

黒い羽を持つ男が水飲みと食事の皿を両手に持ちデイーナの側へ舞い戻つた。デイーナは男から水飲みを手渡され、喉を潤した。そして男の顔色を窺いながら消え入

るような声で尋ねた。

「デイーナというのは…私の名前なの？ あなたは……誰？」

予想どおり男の顔が凍りつく。

「まさか自分のことまで…。本当に俺の名前すら言えないのか……!?」

男の問いにデイーナは頷くことしかできなかつた。男と自分の過去の関係は把握できなが、自分を悪夢から呼び起こし、懸命に世話をしてくれる彼を傷つけたことを心苦しく思つた。

男はうなだれ歯を食いしばつたように見えたが、すぐに顔を上げた。

「とりあえず、食え！」

男は匙で食事をすくい、デイーナの眼前へ突き出した。デイーナは言われるがままに食事を口に含む。茹でた芋を潰して調味料を加え作られた料理は、彼女の身体に染み渡つた。久方ぶりの食の喜びにデイーナの顔が綻びると、男も微笑んだ。

食事が終わると、男は話し始めた。

「お前はデイーナで、俺はゼロ。ここはお前と俺が二人で暮らしてゐる家。そう、ここは…俺達だけの箱庭だ」

「箱庭…」

「俺達はまあ…兄妹みたいなやつだな！ 事故で大怪我をして眠つたままのお前を、俺

が今日まで甲斐甲斐しく看病してたつて訳」

空になつた食器を片しながら、ゼロは努めて明るく当時を振り返つた。

ディーナは失つた記憶を取り戻す手がかりを少しでも掴もうとゼロに問い合わせかけた。

「私はどうして事故に遭つてしまつたの…？」

「ある日、俺は高熱を出して寝込んでしまつたんだ。俺の様子を見兼ねたお前は山へ薬草を取りに行くと言つて家を出て行つた。その日は酷い嵐で…雷も鳴つていた。お前は山の中で落雷に巻き込まれたんだと思う」

「病気のあなたを一人残して山へ薬草を取りに行つたなんて…お医者様を呼べなかつたの？」

ゼロは決まりが悪そうに笑つた。

「それは…見てのとおり俺達は慎ましい暮らしをしてたから…つまり、医者にかかる金がなかつたんだ。そして、嵐が去つて、俺が山の中へ入つて行くと、お前が血まみれで倒れているのが見つかつた」

ゼロの瞳の奥に虚ろな陰が浮かんだ。事故現場の様子を思い返して、その凄惨さがもたらした衝撃が蘇つたのだろうとディーナは思つた。

「まあいいさ。とにかくこうしてお前が目を覚ましてくれたんだからな！　そのうち俺

達のこととも思い出せるだろ」

ゼロの表情に明るさが戻る。

「今日はもう休め。ずっと眠つたままだつたんだ、あんまり長く話してるとくたびれちまうぜ」

「あの…ゼロ、さん？ もう一つ聞きたいことが——」

「ゼロでいい。俺達は兄妹みたいなもんだつて言つたら。どうした？」

ディーナはゼロに残つていた疑問を問うた。

「俺達の背中の羽？ 本当に綺麗さっぱり忘れちまつたんだな…」

ディーナを寝台に寝かせ、毛布をかけ直してやりながら、ゼロは苦笑した。

「この世界の人間には誰にでも生えているものだ。飛ぶことはできないから、ただの飾りだと思つていればいい」

寝台の縁に腰掛けながら、ゼロはそつとディーナの頬を撫でた。一通りの謎が解け、食欲が満たされた彼女の元に心地よい疲労感と眠気が訪れた。ゼロに見守られる中、再び瞼を閉じると、あつという間に眠りの中へ落ちていった。闇の中で恐怖と苦痛を受けた夢を見ることのない、回復に向かうための安らかな眠りだつた。

デイーナが意識を取り戻してから一週間が経過した。彼女は寝台から足を降ろし、約十ヶ月ぶりに地面に立つ感触を味わった。初めは視界の高さが大きく変わった上に平衡感覚が保てず目眩がしたが、壁に手を突きながら呼吸を整え、着実に歩みを進めた。そして玄関先までたどり着き、水汲みから帰ってきたゼロを出迎えることができた。

「ゼロ、おかえりなさい」

「お前、もう歩けるのか…!?」

ゼロは慌てて水の入った桶を地面に置いた後、彼女の華奢な両肩を抱き抱え、椅子に座らせた。

「うん、自分でもびっくりするくらい気分もよくなってきたの。ゼロのおかげだね」

嬉々として自分の身体の状態を話すデイーナの顔色は血色がよく、一週間前に比べ強い生命力を感じさせた。そして表情が非常に豊かになつた。デイーナを包み始めた柔和な雰囲気は、生来彼女が持ち合っていたものだと窺い知れる。

「頼むから、無理はするなよ」

ゼロは安心してため息を吐き、もう一方の椅子へ座つた。

「それと…お前が歩けるようになつたら伝えようと思つていたことがある」

ゼロは今までになく深刻な面持ちでデイーナを見据えながら口を開いた。

「記憶喪失になつてゐるお前は、この世界のことも何もわからぬままだらう？ だから、お前の体力が完全に回復して、この世界の常識に慣れるまで、勝手に家の外には、出ないで欲しいんだ」

彼のただならぬ様子に押され、デイーナは思わず居住まいを正した。

「俺達の家があるこの丘の下には、街がある。街にいる連中の中で、羽の色が黒い人間には乱暴な奴が多いんだ。事情を知らないお前が街に出ると：危険な目にあうかもしない」

目の前にいる黒い羽の青年は、自分の健康の回復を願つて尽くしてくれているというのに、自分に危害を加える黒い羽の者もいるという話がデイーナには想像がつかなかつた。ただ、ゼロが自分を欺くための嘘を話している様子も感じられなかつた。

「しばらくの間、街への買い出しなんかは俺が一人で行つてくる。だから、約束してくれ。俺がいいと言うまで、絶対に外に出ないと……」

緊張で強張つたゼロの表情を少しでも和らげようと、デイーナは精一杯の笑顔で彼の懇願に答えた。

「わかつた、絶対に外に出ない。だから、そんなに心配そうな顔をしないで……」

張り詰めていた空気が和み、ゼロはふつと笑みを溢した。

「よつし、それじゃあこれからこの家でちゃんとリハビリしなくっちゃな！」

ディーナは力強く頷いた。

「はやく私の記憶が戻つて、一緒に街へ出かけられるようになるといいな」ゼロは微笑みを湛えるだけであつた。

四

箱庭での生活は穏やかに過ぎていった。ディーナの体力はみるみる回復していき、いつしか家の仕事もこなせるようになつた。二人で薪を割り、ささやかな烟から野菜を収穫し、近くの川で魚を釣り、隙間風や雨漏りが起くる家の中を修繕したりした。

ディーナは無断で家の外へ出ないというゼロとの約束を従順に守つた。そもそも、彼との生活が愉快でしようがなかつたため、外の世界には大して興味がわかななかつたというのが実情である。決して余裕のある生活ではなかつたが、ディーナにとつて箱庭での日々は満ち足りたものであつた。ただ一つ、失われた自身の記憶が彼女を苦しめていた。

そのうち、二人が暮らす家に冬が訪れた。家の周りの木立は葉を落とし、街から離れたわびしい場所も相まって物悲しい眺めを生み出していた。そしてある日、家の周囲が冬化粧に染まつた。

雪の降りしきる夜、デイーナが身を屈めて暖炉に薪をくべていると、ゼロが隣に座り、デイーナの肩に毛布をかけた。デイーナもゼロの肩へと毛布を回し、二人は一枚の毛布にくるまりながら、暖炉の火にあたつた。暖炉の火が爆ぜる音以外、二人の世界に音は無かつた。

二人はしばらく暖炉の火を眺めていたが、やがてデイーナが囁くようにゼロに語りかけた。

「私ね、あなたがいなければ今頃こうして生きていなかつたと思つて。あなたは私の命の恩人で、きっと記憶を無くす前の私にとつてもかけがえのない人だつたと思う」

ゼロは沈黙したまま炎の揺れを見つめている。

「だから、一日でもはやくあなたとの思い出を取り戻したいの。それなのに…どうしても思い出せない。事故にあつたという時のこと、思い出そうとすると、頭が割れそうになつて、酷い吐き気に襲われて…息ができなくなつてしまふ…。本当に…ごめんなさい」

感情が堰を切つたように溢れ出し、デイーナの声を震わせた。ゼロは首を横に振つた。

「無理に思い出そとしなくていいんだ。謝る必要もない。それに俺はむしろ…このままでもいいと思つてる」

「…どうして？」

「お前が事故にあう前もさ、俺達にはいろいろ：思い出したくもないようなしんどいことがあつたんだ。その時俺はお前に一番伝えたかったことを伝えきれなくて…そしたらお前は事故にあつて、大怪我を負つてしまつた。お前が眠り続けている間、ずっと後悔してたよ。どうしてもつとお前を大切にできなかつたんだろう、お前が側にいてくれれば、他には何もいらないのに：つて」

懺悔のようなゼロの言葉に、デイーナは互いが相手のために苦しみを背負つていたのだと知つた。

「だからお前が目を覚ましてくれた時、俺は誓つたんだ。たとえお前の記憶が戻らなくとも、俺はお前とのこれから的生活を守り抜こうつて。もう迷つたりしない。お前のためならどんなことでもできる。例え、それがどんな罪に問われようとも」

そして、デイーナへはにかんでみせた。

「悪りい、結局俺の独り善がりだな！ でもよ、記憶を取り戻すことが辛いなら、俺のために無理して思い出そうとしなくていいんだ。俺は今のお前とこの暮らしが続けばそれでいいと本気で思つてる。お前にどんなに嫌われようと、この気持ちだけは変わらない」

今、デイーナに向けられているゼロの眼差しや言動の一つ一つに、嘘偽りが無いこと

が彼女には分かつた。暖炉のせいばかりでなく、身体の奥がじんじんと温まつていくのを感じた。

「嫌いになんて……なるわけない」

デイーナは潤んだ両目尻を人差し指で拭い、ゼロへ微笑みかけた。そしてゼロは胸の中にデイーナを抱き留めた。乾いた音を立てて毛布が床に落ちる。

「ずっと……ずっと一緒にいような……」

ゼロの心臓の鼓動を聞きながら、デイーナは瞼を閉じた。暖炉の炎が一人の翼を照らし、背後の床に巨大な影を映し出していた。

五

デイーナが意識を取り戻してから、一年余りが経とうとしていた。水を汲みに来た川のほとりに咲き始めた花が、デイーナが目覚めたばかりの頃ゼロが枕元に飾ってくれたものと同じであった。薰風に吹かれ、デイーナは肺の中いっぱいに外気を吸い込み、水桶を持つて家路を急いだ。丘の下の街へ買い出しに出かけているゼロが間もなく帰宅するため、食事の準備を済ませる必要があつた。

デイーナが家に着いて間もなく、突然玄関の戸が荒々しく叩かれた。デイーナは身を

竦めて玄関を見やつた。

「我々は異端審問官です！ ゼロ殿、中にいらっしゃいますか？ 扉を開けてください！」

威圧的な男の声が、ゼロの名を連呼している。ディーナはゼロの不在を説明し早々に立ち去つてもらおうと、玄関に近づき鍵を開けた。すると、大きな音を立てて扉が開かれ、男が二人どかどかとディーナに一瞥もくれず部屋に踏み込んで来た。

漆黒の法衣と帽子に身を包み、背中に黒い羽を生やした壮年と中年の男達である。意識を取り戻してからゼロ以外の人間を見たことがなかつたディーナは、男達の姿と異様な雰囲気に動搖を隠せなかつた。

「家主は不在のようだ。戻るまでここで待機するとしよう」

「あの、家に何の御用で――」

ディーナが口を開くや否や、壮年の男が彼女の右頬に強烈な平手打ちを食らわせた。ディーナはよろめきその場に倒れ込む。口中が切れて、血の味が広がつた。

「家畜の分際で、気安く話しかけるな！」

「まつたく、奴隸に服まで着せるなんて……ここに住むのがオカルトマニアの変人だとう噂は本当だつたのか」

中年の男が嘆息した。ディーナは右頬を押さえたまま起き上がることができず放心

状態になつてゐる。

「どうせこの奴隸もそのうち殺されるんだ、主人が帰つてくるまでの暇つぶしに痛め付けてやろうか！ 白い羽にしては上玉だ」

壯年の男がディーナの身体になめるような視線を投げ、いやらしく笑いながら彼女の髪を乱暴につかみその顔を自らの顔に引き寄せた。

「お前の勤勉ぶりには頭が下がるよ」

ディーナは男達の話を微塵も理解できなかつたが、このままだと自分は殺されるかそれに類することをされるという推測をした。だが、恐怖で身体が凍りつき、悲鳴を上げることもできなかつた。

「彼女を離せ!!」

聞き慣れた声の方を向くと、ゼロが玄関口に立つていた。その表情は怒りで鬼神のように変貌している。

「ゼロ……！」

ディーナは持てる力の限りゼロを呼んだ。中年の男が仰々しくゼロを迎える。

「おつと、問題の飼い主様のお帰りですね？」

「貴様ら、人の家に押し入つて何をしているんだ！」

「暴れるなよ！ こいつの首が折れちまうぞ？」

ゼロが壮年の男に掴みかかるうとすると、男はディーナの髪を掴んでいた右腕を離し、今度はその腕で彼女の首を締め上げた。気道が圧迫され、ディーナが顔を歪める。

「やめろ！」

ゼロがその場に静止し、悲痛な叫び声をあげる。

「我々とて同じ黒い羽のあなたに手荒な真似などしたくはないのですよ。ただ、あなたに異端の疑いがかけられた以上、我々も動かないわけにはいかなくてね」

中年の男のゼロに対する態度は正に慇懃無礼を体現したようなものだつた。ゼロが吐き捨てるよう答える。

「異端だと？　俺達二人はこの家で静かに暮らしているだけだ……貴様らの世話にないわれはない！」

「ところがその暮らしぶりとやらが問題なのです。随分前から街の住民から通報がありますね。黒い羽の男が白い羽の奴隸も連れずに自ら買い物をして、果ては自分で釣った魚やつくつた野菜を売つてあくせく働いていると！　まあ、その程度なら物好きの道楽程度で済んだのでしようが——」

中年の男は挑発的な口調でどうとうと話し続ける。

「ある善良な市民が、いつもどおり街にやつて来て買い物を済ませたあなたを尾行したのです。すると、あなたは奴隸を首輪もつけず放し飼いにし、あろうことか同じテープ

ルで食事をとつたり、一緒に畠仕事をしていいたというではないですか。しかも、いくら奴隸を愛玩動物として可愛がるにしても、服まで着せるのはいかがなものでしよう？そういう訳で、あなたの奴隸への接し方に異端の疑いがかけられたのです」

ゼロは身をわなわなと震わせ、異端審問官達を睨みつけている。

「奴隸？ 愛玩動物？ ふざけた言い方をするな！」

「おいおい、どうして奴隸一匹にここまで怒ることができるんだ？」

壯年の男がデイーナの首に腕をかけたままひやかしを入れる。デイーナは酸素が薄れているせいで、段々と意識が遠のき始めていた。自分はここで死ぬかもしないとう諦めはあつた。しかし、理屈は未だにわからないがゼロが異端として捕まることは許せない。彼が異端審問官達の追及から逃げ切れるだけを願つた。

「ちがう！ 僕は…こいつのことを一人の人間として、ずっと…あ、愛…」

「お、お前!? 何を!?!」

ゼロが言い淀んだ言葉に、壯年の男の顔が引きつった。

「ゼロ殿、落ち着いてください！ それは恋と呼ばれる、单なる人間の発情期の勘違いです！ あなたのように若く、活力がみなぎっている年頃の人間は陥りやすいものなのですよ」

中年の男は訳知り顔でゼロを諭そうとする。

「あなたはこの奴隸に欲情していただけです。なに、恥ずかしがることはありません。欲情とは、この世界の美德の一つであり、高貴なる黒い羽の子孫を繁栄させるために必要不可欠な原動力なのですから!」

ゼロは拳を握りしめ、俯いている。

「愛などという人心を惑わすまやかしを口にすることが、自らの身を滅ぼすということくらい、あなたも御存知でしょう? さあ、自分の行いを認めなさい!」

中年の男は自らの教えを一息にまくしたて、ゼロの反応を窺っている。

ディーナも薄れ行く意識の中、ゼロを見守っていた。自分のことなどどう貶めた言中方をしてもいいから、とにかくこの場を言い逃れて欲しかつた。

ゼロが俯きながら口を開き、沈黙を破つた。

「貴様達の言うように俺の想いは…一方的なものかもしれない……」

顔を上げたゼロの瞳には、怯まぬ決意の色が刻まれていた。そして、ディーナから最後まで目を逸らさずその言葉を口にした。

「だが、それがどんなに罪深い行為でも、俺はこいつのことを愛しているんだ」

音も無く静かにゼロの頬を零が伝い、細い顎から滴り落ちる。その涙には一点の後悔もない。込められたものは、ディーナに捧げられた痛々しいまでにひたむきな真心だけだつた。

「な、なんと邪悪な……！ ゼロ、貴様を連行する——！」
異端審問官達の慌てふためく声を最後に、デイーナの意識は闇に溶けていった。
箱庭は蹂躪され、跡形も無く崩れ去った。

第二章 ゴルゴダの牢獄

一

デイーナは一人、闇の中にいる。それは紛れも無い現実の中であつた。目隠しと猿ぐつわを着けられ、囚人護送用の馬車に押し込められたのだ。馬車は不規則なリズムで揺れ続け、彼女を何処とも知らぬ場所へと運んで行く。

異端審問官によつて意識を奪われた後、目を覚ますと、デイーナは手足を縛られた状態で家の床に倒れていた。ゼロの姿は何処にも無い。しばらくすると異端審問官達が再びデイーナの前に現れた。彼らはデイーナの足の拘束だけを解き、護送の馬車を停めている、丘の下の街まで彼女を歩かせた。街への道中、ゼロの行方を問うデイーナの声に異端審問官達は誰も耳を貸さなかつた。

街へ着くと、そこに住む人間達にデイーナは目を疑つた。街には黒い羽の人間も白い羽の人間もいた。だが、彼らの立場にはあまりにも大きな隔たりがあつた。白い羽の者達には首輪がはめられていた。首輪は鎖に繋がれ、黒い羽の者達がその鎖を握り彼らを犬のように連れ回している。そして白い羽達は男も女も関係無く一糸纏わぬ姿であつ

た。対照的に黒い羽達は、目がチカチカするような色の布や宝石で自らを着飾り、街を闊歩していた。中には黒い羽の物理的な束縛から離れ、街の清掃や物売りに従事している白い羽もいたが、彼らは皆何かに怯えるように周りを気にしながら常に落ち着かない様子だった。

ディーナが馬車に乗る寸前、目の前を白い羽の男を連れた黒い羽の男が通りかかった。その黒い羽は、四足歩行の白い羽をうすのろと罵り、彼の腹を蹴り飛ばした。白い羽が仰向けに倒れ込み、その視線が瞠目しているディーナと合わさつた。白い羽の瞳からは何の感情も読み取ることができず、ただ奈落の底のような虚無が広がっていた。

その瞳を思い出し、ディーナは馬車の中で身震いした。相次いで起こる惨事に混乱し、身体を馬車の揺れに預けるばかりだった。異端審問官に打たれた右頬の痛みだけが、彼女を現実に繋ぎ止めていた。

二

馬車が停止し、ディーナは外に引きずり出された。平地をしばらく歩き、地下へ続く階段を降りたかと思うと、拘束具が外され、背中を突き飛ばされた。ディーナは冷たい石の床の牢屋の中へ膝をついた。

看守が牢に鍵をかけ、その足音が遠ざかっていくと、獄舎内は静けさに浸つた。デイーナは床にへたり込んだまま俯き、動くことができない。

「ゼロ……」

咳きが虚しく石の壁に反射し、消えた。

「こいつは驚いた！ 新入りは女だと聞いてたもんだから、どんないかつい化け物がやつて来るかと思つていたが……」

背後で男の声が響いた。驚いて振り向くと、デイーナがいる部屋から廊下を挟んだ正面の牢屋の中で、白い羽の男が寝台に腰掛け、物珍しげに彼女を眺めている。たくましい身体付きの大男だ。剥き出しの上半身の筋肉が力強く隆起している。金髪を赤いバンダナで無造作に束ね、右目を黒の眼帯が覆つており、残された左目は鋭い光を放つていた。

大男は威勢よくデイーナに話し掛ける。

「よお、ねーちゃん。お前は何をしでかしたんだ？ ここに連れて来られたってことはお前も俺と同じ、七つの大罪を犯した死刑囚なんだろう？」

「死刑囚！？ 私達が！？」

デイーナは飛び上がり、両手で鉄格子を掴んだ。

「なんだ、知らなかつたのか？」

ディーナは何も知らない。彼女は箱庭の中でゼロに庇護され、自分にとつて綺麗なものにだけ囲まれて生きていた。そして自分の世界そのものであつたゼロは、背中の羽の真実を告げないまま彼女の前から消え去つた。彼が異端審問官達に連れ去られた理由すらも定かではない。

自分を打つた異端審問官の笑みが、ゼロの涙が、腹を蹴られて倒れた白い羽の男の瞳が、ディーナの脳裏をよぎる。

「教えてください、私は記憶を失つていてこの世界のことを何も知らないんです」

「私は黒い羽の男性と二人で暮らしていました。そこへ異端審問官と呼ばれる人達が現

れて、彼と私が同じように服を着て、一緒に畑を耕して、食事をしていたことが、異端だと言いました。そして彼が私を愛していると言つた途端、彼は連れ去られたんです。どうしてゼロは、捕まらなければならなかつたのですか…？」お願いです、教えて――

鉄格子を握る手に力を込め、ディーナは大男に答えを請うた。

「お前の主人は随分と…邪悪な奴だな…！」

大男はディーナの身の上に愕然としながら、異端審問官も発していた邪悪という単語を口にした。

「俺の名はレブロブス。：殺される理由もわからないまま死ぬお前があまりにも無様だから教えてやる。俺達白い羽を持つ人間は皆、黒い羽の奴らの奴隸として支配されているんだ。生まれてから死ぬまで牛馬のようにこき使われ、死ねば道端に打ち捨てられる！ 街によつて白い羽の扱いに多少の差はあるみたいだが、連中は俺達が同じ人間だとは思つてねえ」

レブロブスが苦々しく世界の理を語り始めた。

「それからもう一つ、この世には七つの大罪つてもんがある。自由、偽善、人権、弱者、友情、愛、平等。これに関わる罪を犯した奴は羽の色を問わず裁かれるつて訳だ。一方で七つの大罪と真逆のことをすりや、周りからは立派な奴だと持て囃されるのさ。詐欺師も盜賊も人殺しも英雄だ。ま、白い羽が黒い羽に逆らおうとすりや、即刻殺されるがな」

「それじゃあ：私の御主人様にあたる人は、奴隸として接しなければならない私に愛を告げたことで七つの大罪を犯してしまった：？」

「そういうことだ！ 当の本人が何処に連れて行かれたかは知らねえが、大罪人が所有していた反抗奴隸としてお前も同罪になつたんだろう。ここはゴルゴダの牢獄の、生け贋の待合室と呼ばれる死刑囚の吹き溜まりだ」

レブロブスの話は、ディーナが世界に抱いていた疑念を振り払つた。しかしそれは、

彼女のの中に新たな苦悶を生んだ。

「…愛なんてのは大昔の暇人どもが退屈しのぎに編み出した空想だ。主人の空想のせい
で死ぬことになるとは、お前は気の毒な奴だな」

「空想…ゼロの言葉が…？」

ディーナの視界が狭まり、レブロブスの姿が遠ざかる。そして、ゼロの言葉が頭の中
で蘇つた。

『お前のためならどんなことでもできる。例え、それがどんな罪に問われようとも』

『それがどんなに罪深い行為でも、俺はこいつのことを愛しているんだ』

ゼロは知っていたのだ。愛を口にすれば自分の身がどうなるのかを。ディーナを見
捨て、異端審問官達に従えば助かる道はあつた。けれども彼はそれをしなかつた。誰も
が妄想、空想と口を揃えて嘲るもののために、自らの命を投げ打つ価値はあつたのか。

耳元で金属音が響き、ディーナは我に返つた。床を転がつて来た赤い球が彼女の部屋
の鉄格子に当たつたのだ。よく見るとそれは赤く熟れた林檎の実だつた。
「俺もお前に同情するぜ。隣にいる、事情通を気取つたデカブツのせいで、知らなくとも
いい真実を聞かされる羽目になつたんだからな」

ディーナが林檎を拾い上げると同時に、彼女から向かつてレブロブスの部屋の右隣に
ある牢屋の奥で男の声がした。

「知らぬが仮、見ぬが秘事、つてな…」

林檎を右手に持った若い白い羽の男が、牢の薄暗がりから現れた。艶のある黒髪を肩まで伸ばし、調和のとれた目鼻立ちをしている。体格はレブロブスと比べれば格段瘦躯に見えてしそうが、彼の瞳にはこの場の誰よりも剛直さと自尊心の色が籠っていた。自負に満ちた表情は彼から形容しがたい氣品を漂わせ、身に付けていたる粗末な麻の囚人服と不釣り合いであつた。

「あなたは…？」

ディーナが鉄格子の向こうにいるもう一人の男が何者か問うた。

「俺の名はガイウス。白き羽の義賊」

ガイウスと名乗つたその男は壁に背をもたれさせ、手にしていた林檎に齧りつく。レプロブスは隻眼を見開いた。

「ほお！　金持ちの黒い羽の家ばかり襲つていた盗賊、疾風のガイ様か！　大層な二つな名が付いたもんだぜ。実のところは、そいつらを殺して奪つた金を貧乏人共に配つて悦に入つていただけの、偽善者だつてのによ！」

「今し方、お前も話していただろう。本来、竊盜も殺人も黒き羽の連中が礼賛している偉業さ。俺が牢に入れられた理由は、羽の色という先天的事象によるものだ。俺は生まれてから一度も自分の行いを恥じたことはねえ」

ガイウスは眉一つ動かさず、芯だけになつた林檎を床に放りながら言葉を続けた。

「そういえば、俺も聞いたことがあるぜ。パンデモニウムの闘技場で、最強の白き羽なんのを自称し天狗になつた剣闘士が、この世には初めからありもしない自由とか言うもの追い求めて闘技場を脱走し、あつけなく捕まつたという話を。その世間知らずの名前は、筋肉馬鹿のレブロブス、とかいったな」

「てめえ、もういつぺん言つてみろ！」

寝台から立ち上がつたレブロブスが威嚇するように拳で鉄格子を殴打すると、けたたましい反響音が獄舎内に広がつた。

二人の死刑囚の気迫にのまれ、ディーナは林檎を両手で抱えたまま呆然と彼らを眺めていた。

三

「貴様ら、何を騒いでいやがるんだ！」

レブロブスとガイウスの間に不穏な空気が流れ始めると、騒ぎを聞きつけた黒い羽の三人の看守達が現れた。ディーナ達の牢屋の前で立ち止まると、一人の看守が辺りを見回した。

「見張りのピリポはどこにいる！」

「ぼ、僕は……ここにいます！」

頓狂な声と共に、ディーナ達の眼前の、藁の筵が被せてあつた小山が動き出し、その中で身体を丸めていた黒い羽の少年が身を起こした。今まで気配を殺し微動だにしていなかつた少年の隠密のような業にディーナは呆気にとられ、ピリポと呼ばれたその少年を凝視した。

年の頃はディーナと同じか、わずかに下である。小柄な体躯と、奔放に跳ねた黄土色の髪と、困り果てたように下がつた眉尻が、母親とはぐれて孤独に震える子犬を彷彿とさせた。風貌に悲哀を感じさせる理由はそれだけでなく、彼の服がつぎはぎだらけのボロであり、黒い羽の者であるにも関わらず奴隸と見紛うような姿であつたからだ。

ピリポは他の看守達の前に直立し、遙かに体格のいい彼らをおずおずと見上げている。

「ピリポ！　てめえはまた毛虫みたいに丸まつて隠れてやがつたのか！　警備も満足にできない木偶の坊が！」

看守の一人が怒号を飛ばし、鉄拳がピリポの顔面を歪ませた。それが合図であつたかのように、他の看守達も次々とピリポを痛めつけ始めた。看守達は加減と言うものを知らない。ピリポはその場に蹲り、急所である頭に両腕を回した。彼は看守達の怒氣が治

まるのをひたすら黙つて耐えている。

「や、やめて……」

突如始まつたリンチを目の当たりにして、ディーナは悲鳴を漏らした。自身が異端審問官に悪意を剥き出しにされ、暴力を振るわれた時の光景がまざまざと頭の中に浮かび、身体が強張つた。

「まーた始まつたか。このもやし野郎はよ、監獄一の臆病な看守で、他の看守共から毎日焼きを入れられてんだ。さんざ殴られても一言も言い返さねえでいやがる腰抜けだ！」

レブロブスがピリポを見下ろしながら忌々しそうに舌打ちをした。
「黒い羽の社会の中で、罪深い弱者が淘汰されるのは自然の摂理。こんな惨めな姿を晒し続けるくらいなら、俺だったらとっくに首を吊つてるがな」

ガイウスは冷ややかな嘲笑を浮かべている。

「待合室の居心地はどうかね？」
諸君！」

すると、老獣さの滲む笑い声と共に一人の黒い羽の男がディーナ達の牢屋の前へやって来た。身の丈はディーナとさほど変わらない小男だが、見事な口髭がこの牢獄での彼の威光を示すかのようであり、顔に刻まれた皺の中で獲物を狙う猛禽類のような目がぎょろぎょろと動いていた。

ピリポを取り囮み暴行していた看守達は機敏な動きでその男の前に整列した。

「てめえが獄長のカロンか。こんな辛氣くせえ所に押し込めやがつて…殺すならさつさと殺せ！」

レブロブスが怒りを露にして場の空氣を震わせたが、カロンと呼ばれた男はそれを一笑に付した。

「笑止！ 七つの大罪を犯しておいて、簡単に死ねると思つてゐるとは！ 諸君らには、大惡神を封じ込める生け贊という身に余る大役を用意してある！」

「大惡神の生け贊？ 俺達をどうするつもりだ」

今度はガイウスが顔をしかめると、カロンは自慢の口髭を弄びながら牢の死刑囚達をせせら笑う。

「焦らずとも、もうじき身を以つて知ることになる。愛や自由などと戯言を語る愚かな罪人共！ これから始まる無限地獄に、心を入れ替え我に泣いて感謝するがいい！」

豪快な高笑いを残し、カロンは待合室を後にした。三人の看守達もそれに続く。最後の一人が置き土産とばかりに倒れているピリポを蹴飛ばし、ディーナ達を睨み付けた。
 「生け贊共、よく聞け！ この牢の奥には、お前達では到底謁見することが適わない、やんごとなき身分のお方がいらっしゃるのだ！ これ以上その方の御気分を害さないよう、大人しくしていろ！」

カロン達が立ち去った後、ディーナは横向きに倒れたままのピリポが死んでしまったのではないかと息を止めて見守っていた。彼の背中が微かに動いているのを確かめ、僅かながら気が休まつた。

「やんごとなきお方だあ？ どうしてそんな奴がとつ捕まつてるんだよ」

レブロブスが看守の言葉を怪しんでいると、ガイウスが記憶を呼び起こしながら口を開いた。

「そういやあ…宗教都市リベイラを治めていた大神官が、権力争いに敗れて数年前に投獄されたって話を聞いたことがある。そいつもここの中の牢の中にいるんだな」

「神官は街の支配者になれる程強い権力を持つていての？」

世界の常識を得ることに貪欲になつてているディーナは必死にガイウスの言葉に耳を澄ましてゐる。

「黒き羽の奴らは、白き羽達を支配する大義名分として、自分達が創世記戦争という御伽噺の中に出でてくる偉大な神の子孫だと信じ込んでやがる。その中でも大神官と呼ばれる黒き羽は、神に匹敵する力を持つ者として畏れ敬われてるのさ」

レブロブスは怪訝な表情を隠さずガイウスの話を聞いている。

「大神官は、頭に牛みてえな角が生えている上に、海を真つ二つに割つたりする魔導の力が使えるって話だ」

「お前、正気か？　すかした調子でよくそんな与太話ができるな」

一通りの説明をガイウスが終えると、レブロブスは大きく鼻を鳴らした。

「そんなにすげえ力を持つてる奴が、ここから逃げ出さずに何年も牢屋の中で縮こまつてる訳あるか！　自分が牢獄で過ごしやすくなるために看守共を騙して、ただの悪賢いじじいに決まつてら！」

その時、聞き慣れない老人の笑い声が獄舎内にこだました。それはカロンのものに比べ、落ち着きと寛容さを含んでいた。

「お褒めいただき、光榮じやよ」

「なっ！　どこから話してやがる!?」

レブロブスは鉄格子越しに廊下を見渡した。謎の声は再び彼らに語り掛ける。

「こんな牢屋など、出たければいつでも出られるんじやが…。時々ここにやって来る、お主達のような活きのよい生け贋を観察するのが興味深くての、つい腰を据えてしまつたわい」

「頭の中に声が直接響いてくるみたい…」

出くわした怪異に、ディーナは知らず知らず心中を呟いた。彼女達の牢から声の主の

居場所を見つけることはできなかつたが、牢の者達を諭すその声は明瞭に伝わつていた。

「へえ、噂をすれば影つてやつか。やんざとなき大神官様よ！ その有り難い力で俺達を助けてはくれないか？」

ガイウスが皮肉めいた口調で声に問い合わせると、声は屈託の無い笑い声と共に答えた。

「力には力の使いどころというものがある。悪いが、今はその時では無いのじや。それに今日のところは、お主達もそろそろ床に就いた方がよいのではないか？ これ以上騒げば：そこで半死半生になつてゐる哀れな看守が、いよいよ殺されそうで見るに耐えん。それともお主達は、弱い者虐めをいつまでも見物し続けるという高尚な趣味を持ち合わせておるのかね？」

年の功だけあり、話術では声の主が一枚上手のようだつた。

「嫌味しか言わねえ偽善者にも、手品師のじじいにもうんざりだ。俺はもう寝る！」

レブロブスは悪態をつくと早々に寝台へと身体を預け、腕を枕に瞼を閉じた。

獄舎内に再び静寂が訪れた。夜が更けてもディーナは眠ることができず、寝台の上で膝を抱えていた。

つい数日前まで、ディーナは側にいるゼロの安らかな寝顔を眺めながら、平穏な眠りに就いていたのだ。たとえ世界の仕組みが彼女の中で明らかになつたと言つても、気持ちの整理ができるはずはなかつた。

獄舎の廊下で物音が聞こえたため、ディーナは寝台から降りて鉄格子から外の様子を窺つた。すると、見張りをしていたピリポが先程受けた怪我の痛みに耐えかねてよろめき、片膝を立ててしやがんでいる姿が見えた。

「大丈夫……？」

恐る恐るディーナが声を掛けると、ピリポはぎよつとして顔を上げ、ディーナを見つめた。殴られた彼の右目は大きく腫れ上がり、まともにものが見えていないようだつた。口元や頬には治りかけている古い痣があり、彼がこの牢獄で日常的に暴力を受けていることを物語つていた。

「私はディーナ。あつ、えつと……この林檎、食べる？　さつきガイウスさんがくれたの。食べたらきつと元気が出るよ」

ディーナは鉄格子の間から林檎を持つた右腕を伸ばした。痛ましいピリポの姿を見ていると、彼のために何かをしたいという感情が湧いた。

「君は…変わった奴だね」

ピリポは目の前に差し出された赤い実を眺めながら、ぽつりと言葉をこぼした。

「さつき、僕がみんなに虐められていたとき…君だけが僕を馬鹿にしなかつた。それに今だつてこんな…偽善と疑われてもおかしくない行為を平気でやつてのける」

「虐められている人を見て、馬鹿にすることなんてできないよ！ 殴られるのも、酷い言葉を浴びせられるのも、辛いもの…」

デイーナは、虐げられた経験がある者だけが知る痛みを既にわかつっていた。その痛みを知ることが、他者への共感となるか、更に弱い者を隸属させることへの野心になるかは、それを知る人間の意志次第であり、彼女は前者であった。

「それに今はね、あなたが悲しそうな顔をしているから、少しでも楽しいことを考えて欲しいって、ただ、そう思つただけ」

「…そんなこと言われたの、初めてだ」

ピリポは、自らへ真つ直ぐに向けられた誠意に面食らつていたが、痛みに歪んでいた表情は幾らか和やかになつていた。そして身体を引き摺るようにしてデイーナの牢屋の前へ向き直つた。

「僕は、君とレブさんの会話を隠れながらずつと聞いていたんだ。君の御主人様は大罪人かもしれないけれど…物凄く勇氣のある人だね。鬼みたいに恐い異端審問官の前で

愛を口にしちゃうなんて：僕は考えただけで気が遠くなるよ…

ピリポは虚空を見つめながら俯いている。

「愛って本当に、この世にあるのかな？ それって、発情期の思い違いや、相手を自分の言うとおりにさせたいって思う気持ちとは別の感情なのかな？」

「それは…」

ディーナは、異端審問官達がゼロへの説得を試みた際に使っていた野卑な愛の言い換えを思い出し、口籠もつた。

「親が子供を外敵から守つたりすることがそれに似た感情から来るものらしいんだけど、それだって、子供が死ねば自分の血を絶やしてしまってから、種の保存のため本能的に身体が動いてるだけなんだって。それに、僕の家族の場合は……ごめん、こんな話、つまらないよね」

「ううん。あなたのお話、聞かせて欲しい」

ピリポは一瞬口をつぐんだが、彼の話を聴き漏らすまいとしているディーナの健気な瞳に触発され、胸のうちに抑圧されていた真情を吐露した。

「僕は生まれつき、身体が弱いんだ。だから本当なら弱者の罪に問われて捕まるところだつたんだけど、僕の家は比較的裕福だったから、両親は周りの人達に賄賂を渡して、僕のことを異端審問会へ通報しないように取り計らつてた。：七つの大罪を犯した人間

が一族から出れば、その家は没落するから」

ピリポの声は儂く、牢獄の暗闇の中へ吸い込まれていきそうだつた。

「でも、僕が成長して、両親は僕の存在を隠し通すことができなくなつたんだと思う。それで両親は、僕を世間から遠ざけるために、僕をこの地下牢の看守にしたんだ。仕方のないことだつて納得したつもりだつたけど……やつぱり何だか……悲しかつた」

もちろん今のディーナに、自分の家族についての記憶は微塵も残されていない。それでも、両親から見放されたと思つてゐるピリポが、計り知れない絶望を抱えて生きていたと想像することは容易だつた。

「だから、僕みたいに血を分けた親からも疎まれて迫害される人間だつているのに……白き羽に愛を口にする黒き羽がいるなんて、本当に驚いたんだ」

そしてピリポは不均衡な両目でディーナを見据えた。

「ねえ、ディーナ。一つだけ僕に教えて欲しい。君の御主人様は君に愛を告げた。レブさんはその愛を妄想だつて言つてた。君は？　君は御主人様のことを、どう思つているの……？」

その質問に、ディーナは自らの鼓動が速まることを感じた。それは、ゼロがディーナに愛を口にした瞬間から今に至るまで彼女の頭の中を巡り続けていた問いかけだつた。

ディーナはピリポからの問い合わせ、つまり自分の心に向き合うため呼吸を整え、言葉を紡

ぎ始めた。

「ずっと考えてた。私がゼロに抱いてる感情はなんだろうつて。あの人は記憶を失つた私が目を覚ましてから、ずっと側にいてくれた。もしかしたら私は、卵から孵つた雛が親鳥の跡をついて回るみたいに：保護されることを求めて彼に依存していただけなかもしれない。記憶の無い私には生きていく術が無かつたから、彼を利用していくだけかもしれない……」

ディーナは言葉に詰まり、俯いた。ピリポは静かにディーナを見守っている。

「でも、幸せだった。あの人は、私一人では一生得られなかつた喜びを、たつた一年間の中でくれたの……！」

顔を上げたディーナの瞳から熱い涙が溢れた。

「どんな苦しい思いもして欲しくないの。私は側にいなくともいいから、生きていて欲しい。ゼロの無事が確認できたら、私はどうなつてもいい！　だからもう一度だけ、会いたい……！」

それがディーナの答えだつた。彼女はその場に膝をつき、嗚咽した。

ピリポはしばらくディーナを見つめていたが、おもむろに立ち上がりつたかと思うと、懷から鍵の束を取り出した。

そしてディーナの牢の扉を開け、小声で彼女に呼び掛けた。

「早く、ここから出なよ！」

ディーナは両頬に光の筋を残したまま、ピリポを啞然と見上げている。

「僕が君を牢獄の外まで連れて行くよ。この牢獄の看守は怠惰な人が多いから…こつそり行けば逃げ切れるはず」

「そんな…そんなことしたらあなたが殺されてしまう！」

ディーナは立ち上がりピリポを制止したが、彼の決意は揺るがない。

「僕のことはいいんだ。僕は何の力も無い臆病者だから、皆になぶり殺されるのもきっと時間の問題だし…。この牢獄でも誰も僕のことを相手にしなかつたのに、君だけが僕を元気づけようとしてくれて、そして、真剣に僕の話を聞いてくれた。君が生け贋になつてしまつたら僕は…後悔し続けると思うから」

ピリポは自らの末路を憂えい、一瞬苦渋の色を浮かべたが、すぐにディーナに笑い掛けた。彼女と出会つてから、初めて見せる笑顔だつた。

「僕にはまだ愛つてものがよくわからないけど…君の話を聞いて、羨ましいって思った。もしも僕がここで死んでしまつたら…次は、君みたいな白き羽に生まれ変わりたい。健康な身体があつて、それで、大好きな御主人様が現れて、その人も僕のことを大好きだつて言つてくれたら、きっとそれは…泣いちゃうくらい幸せなんだどうな」

ピリポは微笑んだまま、か細い手をディーナへ差し伸べる。

「君は…御主人様に会いに行かなくちゃ駄目だ。さあ、行こう…！」

その腕にも多くの傷跡があつた。痣だけではなく、中には刃物による切り傷や火傷によるものもあつた。

ディーナの頬を再び涙が伝つた。自らに羨望の眼差しを向けるこの少年は、傷だらけの小さな身体から無謀とも言える勇気を奮い起こし、身を挺して自分を救おうとしている。

「こんなに…ぼろぼろになつて…。ひどい……！」

ディーナが思わずピリポの手を取つた途端のことだつた。陽光や月明かりや、燭台の炎とも異質の眩い白い光がディーナから解き放され、二人を包み込んだ。同時に、何処からともなく突風が巻き起こり、二人の羽を吹き飛ばさんばかりの勢いで揺らした。開いていた牢屋の扉が石の壁に当たり、激しい音を立てる。光輝は衰える気配を見せず、目を灼かれそうになつたディーナは瞼を閉じ、両手で目を覆つた。そして光はディーナ達がいる地下内部に満ちていった。

時を同じくして、ある独房内でローブに身を包んだ老人が立ち尽くしていた。

「まさか……」このようない地の果てで、救世主の復活の瞬間に立ち会うことになろうとは…！」

彼は神光に照らされながら、感嘆の声を上げた。

「おい、どうなつてやがる！ 爆薬でも落とされたのか!?」

焦燥するレブロブスの声がディーナの耳に届いた。すると、光と突風は搔き消え、獄舎内には元の薄闇が戻った。

「何が起こつたの…？」 ピリポ君、大丈夫!?

ディーナは瞼を開け、目の前で両手と両膝をつき倒れているピリポの側にしゃがみ込む。

「僕にもわからない…突然、君が光だして…」

顔を上げたピリポを見て、ディーナは息を呑んだ。

「ピリポ君…顔の怪我が…！」

ピリポの視野を狭めていた右目の腫れは完全に引いており、人懐こい犬のような二つの瞳がディーナの姿を捉えていた。口元や頬にあつた痣も、影も形もない。

「ど、どうして…!? 身体がどこも痛くない…怪我が全部治つてる！」

ピリポは無数の傷が刻まれていたはずの両腕を、自分のものではないかのように驚異の目で見つめている。

彼に舞い降りた奇跡はそれだけでは無かつた。

「ピ、ピリポ…お前！ 気づいていないのか…!?」

今まで感情の起伏を表に出していなかつたガイウスが、余りの動搖に絶句していた。

「背中の羽の色が真っ白になつちまつてるぞ！」

ピリポの背中には、今にも空へ飛び上がる程大きく広がつた純白の鳥類の翼が生えていた。その白さは、ピリポの無垢な心をそのまま映し出しているかのようだつた。

「ぼ、僕…本当に一度死んで、白き羽に生まれ変わつちゃつたのかな…？」

ピリポの周囲にいる者達は皆状況が飲み込めず呆然としている。

「何をしておるのじや！ 早く逃げ出さんと、今の騒ぎを聞いて集まつてくる看守共に捕まつてしまふぞ！」

ディーナ達の頭の中へ再び謎の声が語りかけ、脱出を急き立てた。ピリポは困惑したまま立ち上がる。

「訳がわからぬよ…僕はどうすればいいの？」

「そんなこと決まつてんだろが」

牢の中のレブロブスは落ち着きを取り戻し、大胆にピリポへ言い放つた。

「お前はこれから俺達と一緒に脱獄すんだよ！ 理由もわからず白い羽に変わつちまつ

たお前が、このままだで済むと思つてんのか！ いいから早く、俺と偽善野郎の牢も開けろ！ 騒ぎが知られた以上、お前とこの女だけじや逃げ切れねえ!!」

「だけど…僕には…！」

ディーナの脱獄のために命を賭すことができたピリポであつたが、自分自身が犯罪者となり世界を敵に回すことについては戸惑いが残るようであつた。

「…お前も俺と一緒にこいつの御主人様とやらの、邪悪な顔を拝みに行きたいとは思わねえのか？」

レブロブスはピリポに不敵な笑みを投げ掛けた。彼の思いもよらない発言にディーナとピリポは目を見開いた。

「お前、ディーナとか言つたな。俺は今も愛なんてこの世にはねえと思つてる。だがお前は、黒い羽と暮らした時間を幸せだつたと断言し、挙げ句にそいつのためなら自分はどうなつても構わないと泣きやがる。俺は…不思議とお前の気が狂つてゐるだけだとも思えねえ。お前をそこまでさせるものが何なのか、知りたくなつたんだよ」

レブロブスの言葉に、ピリポの表情から迷いの色が消えた。

「気をつけよ！ 看守共がやつて来るぞ！」

謎の声が警鐘を鳴らすと同時に、見覚えのある黒い羽の看守達がディーナ達の牢まで向かつて来るのが見えた。ピリポを痛め付けていた三人の看守である。

ピリポがレブロブスの牢を開けると、レブロブスは廊下へ躍り出て、獣のような雄叫びを上げた。彼の闘志に怯んだ一番手前の看守のみぞおちに巨大な拳を打ち込み、その顔面を石の柱に叩きつけた。地面に倒れ痙攣していた看守はすぐに動かなくなつた。

「ピリポ、その剣をよこせ！」

牢から解放されたガイウスはピリポが携えていた細身の剣を受け取ると、二つ名に恥じぬ敏捷な身のこなしで廊下を駆け抜けた。矢を番えようとしていた看守との間合いを一気に詰めたかと思うと、一太刀のもとに斬り伏せる。そのまま足を止めることが無く、増援を呼ぼうと退却しかけた看守の喉元へ剣先を突き刺した。

「レブロブス。お前、さすがに脳味噌まで筋肉にはなつてねえようだな」
ガイウスが剣の血を払いながらレブロブスを見遣つた。

「わかりやいいんだ！ わかりやあつて：何だと、てめえ！！」

「すごいなあ：レブさんもガイさんも、人を殺すことを全く躊躇してないやあ：」

軽口を叩き合う二人を眺めながら、ピリポが間の抜けた声で彼らを称えている。

ピリポの隣にいるディーナは黙つたまま、レブロブスが仕留めた看守の死体から広がる血溜まりを見つめていた。戦いの間、彼女は身動き一つ取ることができなかつた。余りにも呆気なく命が奪われる瞬間が目に焼き付いた。

しかし、これがディーナの選んだ道だつた。ゼロに再会するために辿る道には、これ

から夥しい量の血が流れるという予感がした。

彼女には覚悟と犠牲が必要だつた。

「ピリポ！ ぼーつとしてねえでさつさと俺達を出口まで案内しやがれ！」

レブロブスがピリポを呼びつける。

「う、うん！ ディーナ、僕達も行こう」

ピリポがレブロブス達の元へ駆け出し、ディーナもそれに続く。ピリポが弓使いの看守の死体を通り過ぎようとした時、彼は立ち止まり、死体の側に落ちていた弓を拾つた。

「お前、弓なんか使えるのか？」

ガイウスが意外そうに問い合わせると、ピリポは遠慮がちに答えた。

「ここに来る前、弟と一緒によく狩りに行つてたんだ。だから……」

「おいおい、兎や鹿を獲るのとは訳が違うんだぜ。本当に大丈夫かよ？」

レブロブスが呆れ返り、ピリポはますます萎縮した。

「役に立つかわらないけど：僕、剣術とかはからきし駄目だから：丸腰でいるよりましだと思う……」

そう言うと哀愁に満ちた表情で矢筒を背負つた。

ディーナ達が地下牢から地上へ続く階段を登ろうとした時、彼女達を呼び止める声があつた。

「おーい、ついでにわしの牢も開けてもらえんか！」

「この声は…大神官さんの…」

ディーナが立ち止まり辺りを見回した。

「こつちじや、こつち」

その声の調子は、脱獄犯達の足止めをするにしては随分と呑気だつた。

ピリポがその声を頼りに該当する部屋を探し当て鍵を開けると、全身を漆黒のローブに包んだ人物が廊下へ姿を見せた。背中にはそのローブと同じ色の羽が生えている。

「すまんな、手間をかけた」

顔を隠していたフードが脱がされると、澄み渡つた湖面のように穏やかな瞳を持ち、口元に悠然と笑みを湛えた好々爺が現れた。そして何よりディーナ達の目を引いたのは、ガイウスの話にもあつた、彼の両側頭部に生える二本の巻き角であつた。

「わしの名はヨハネ。黒き羽の神官にして、ネクロマンサーの魔道士である」

「本物の魔導士だつてんなら、お前の力の使いどころとやらはいつなんだ？」

ガイウスが鋭い目つきでヨハネを問いただすと、彼は闊達な笑い声を上げた。

「いやはや、当然の疑問じやな！ 実はの、魔術を使うには触媒として生け贋の血液、つまり死体が必要なのじや。先刻は見栄を張つてはみたものの、文字どおり手も足も出ない状態じやつた！ お主達が通り掛かつてくれて幸運だつたわい」

「こいつ、やっぱりただのボケじじいじやねえのか？」

レブロブスが腕を組みながらいぶかしがつた。

「細かいことを気にしてはいかん。今は脱出が先決じや！」

ヨハネの鷹揚さにガイウスは小さく嘆息した。

「筋肉馬鹿とじいさんとガキ二人か：錚々たる顔触れだな」

レブロブス、ガイウス、ピリポが階段を登り始め、ディーナも段差に足をかけようとすると、ヨハネの視線を強く感じ、思わず彼の方を振り向いた。

「あの、どうかしましたか？」

ヨハネは無邪気ないたずらを考えた子どものように笑つた。

「やはり…かなり邪悪な面構えをしておる」

ディーナはきよとんとして目を瞬かせた。

一行が牢獄内を進むと、警備をしていた数人の看守達の襲撃に遭つたが、先陣を切るレブロブスとガイウスによつて皆悉く返り討ちとなつた。看守達の中に戦い慣れている者は少ないようだつた。

ピリポ曰く、ゴルゴダの牢獄の看守は、財力のある身内がカロンに袖の下を握らせたことによつて就任した者ばかりであり、世界の美德の一つである怠惰を極めている彼らの士気は押し並べて低いといふ。

「この先が外に続く玄関ホールだよ。多分、そこにも看守達がいると思うけど…」

ピリポの誘導に従い、ディーナ達は薄暗い通路を駆ける。すると彼女達の視界が開け、目の前に広間が出現した。壁に施された得体の知れない生物のレリーフと、地面の至る所に空いた窪みの中で燃え盛る業火がおどろおどろしい雰囲気を醸し出している。窪みの真上には手枷の付いた鎖が伸び、地上には巻き上げ機が設置されている。炎は囚人を火責めにするためのもののようにあつた。

「ヨハネ様！　お供を連れてお出かけですか！」

広間にある巨大な扉を背に、槍を手にしたカロンと武装した二十人近くの看守がディーナ達を待ち構えていた。

カロンは変わらず不気味な笑みを浮かべている。

「後生ですから、牢に戻つてはいただけませんか？　あなた様を力尽くで従わせるよう

なことはしたくないのです」

「カロンよ、世話になつた。牢獄暮らしは十分満喫したのでな。所用もできたので、ちよ
いと外出させてもらうよ」

カロンの要求をヨハネは飄々とかわした。

「まあ、出世欲の権化のようなお主が、金の生る木であるわしを簡単に見逃してくれると
は思わんが」

「よおくわかつてゐるじゃねえか！」

カロンの語調が突如として粗野になり、張り付いていた笑顔は憤怒の形相へと変わつ
た。

「てめえが牢屋にいるだけで、教皇厅から世話代として莫大な予算がもらえるんだ！
むざむざ逃がしてたまるものか！」

カロンは槍を掲げ、看守達に指示を出す。

「看守兵、ヨハネは生け捕りにしろ！ 他の奴らは殺して構わん！」

武器を構えた看守達が一斉にディーナ達に向かつて走り出した。

「レブロブスにガイウスよ。わしが魔術を使うためには血の生け贅が必要だということ
はもう知つておるな？ そうじやな…あと五、六人ばかり殺してくれれば残りはわしが
引き受けよう」

「ああっ!?　じじいの指図なんか聞いてられつか!」

「お前らはすつこんでろ!」

「二人はヨハネの話を歯牙にもかけず、看守達を迎え撃つために前進する。

「やれやれ、最近の若者は血氣にはやるばかりでいかん」

「ヨハネさん：ぼ、僕はどうすればいいのかな…?」

大仰に落胆した素振りを見せるヨハネに、ピリポが恐怖で顔を青ざめさせながら尋ねた。

「遠方から敵の意表を突き、仲間を助け勝利をもたらすのが射手の役目じや。そこの鎖を伝つて高所に移れんか?　あやつらを援護してやつてくれ」

ヨハネは壁の側にある巻き上げ機から天井に伸びている鎖を指した。巨大なレリーフの上縁は堀のような足場になつており、鎖を登れば乗り移ることができた。ピリポは不安げに鎖を見上げ、弱々しく頷いた。

「う、うん：やつてみるよ…」

「無理、しないでね…」

ディーナが鎖に手をかけたピリポの背を見守つていると、ヨハネがディーナへ避難を促した。

「ディーナ、お主は事が済むまで元来た通路で隠れておるのじや。術の詠唱中は無防備

になるので、わしもお主を守れぬのでな」

「はい…ヨハネさんも気をつけて」

ディーナは自らの歯痒さに顔をしかめたが、今の彼女はヨハネの言うとおり身を隠すことしかできなかつた。

レブロブス達と看守達の戦いは既に始まつてゐる。看守の一人が棍棒を振りかざし、レブロブスを殴りつけた。

「効かねえなあ…！」

レブロブスは前腕で棍棒を受け止めながら、冷ややかに笑つた。

「強さこそがこの世で唯一の真理だ。俺は強い奴しか生き残れない世界で、誰よりも力を求めて戦つてきた…！　囚人を痛め付けてふんぞり返つてただけのお前らが、俺に敵う訳ねえだろうが!!」

もう一方の腕で看守を炎の中に殴り飛ばし、奪い取つた棍棒で側にいた看守の頭部を粉碎した。

「いちいち吠えねえと戦えねえのか、この筋肉馬鹿は…」

ガイウスは看守の斬撃を軽々と避けながら相手の背後を取り、その背中を斬り裂いた。そのまま身を屈め、後方から別の看守が水平に繰り出した凶刃を躱す。そして地面に突いた片腕を軸に身体を反転させ、その勢いで看守の足首を斬り落とした。看守は鼓

膜を突き刺すような悲惨な叫び声を上げて倒れる。

「そうか…そこまでして邪神の生け贋となるよりも我が手にかかる死にたいか！」

業を煮やしたカロンが槍を構えると、善戦している二人の元へ猛烈に突進した。二人はカロンの一撃を避けたが、その隙に看守達に取り囲まれ退路を断たれている。

「…さあ、退くのじや、ディーナよ」

ヨハネに急かされ、ディーナはレブロブスとガイウスを心配そうに見遣りながら後退した。

すると、ディーナ達が通つて来た通路の奥から広間に向かつて来る人影が見えた。頭から血を流した看守である。レブロブス達が討ち取つた者の中に、まだ息がある者がいたのだ。

広間に足を踏み入れたその看守は怪我のせいでの意識が朦朧としているのか、茫然と辺りを見回していた。しかし眼前にいるヨハネの姿を視野に入れた途端、瞳の中に憎悪を宿させた。

「囚人ごときが…逆らいやがつて……！」

看守は剣を片手に向かつて突き進んだ。

「ヨハネさん!!」

魔術の詠唱を始め、精神を統一しているヨハネにディーナの声は届かない。考える間

もなく、ディーナはヨハネと看守の間に割り入り、ヨハネの背を守るように両手を広げ立
ち塞がつた。

看守の剣がまさにディーナへ振り下ろされようとした時。
風を切る音と共に一本の矢が看守の首を貫通した。看守は剣を取り落とし、そのまま
床に倒れ伏した。

「あ、当たつた…！」
ディーナは矢が飛んで来た方向を仰ぎ見た。

矢の命中に誰よりも驚いていたのはその矢を放ったピリポ自身であった。

鎖を登りきり高所に立つたピリポは、見事に気配を悟られぬまま敵を討つた。彼は敵
を撃破した感動の余韻に浸ることなくすかさず二の矢を番え、レブロブス達を取り囲ん
でいた看守の一人の背を射抜いた。

「やるじやねえか、ピリポ！」

態勢を崩された看守達の隙を突いたガイウスが斬り込みをかけ、レブロブスと共に包
囲を脱した。

「みんなの者、よくやつてくれた！」

その時、詠唱を終えたヨハネの声が広間中に凜と響いた。

「血は満ちた…！ 古より伝わる聖なる力をその身に受け、土へと還るがよい！」

ヨハネの頭上に光輪が浮かび上がつた。その形が球となつて凝縮されると、白かつた球の色が紫紺に濁り、数多の光弾となつて看守達の身体に降り注ぎ爆発した。

光弾は爆発だけではなく毒氣にもよつて彼らの身体を害した。生き残つていた看守達の皮膚は瞬く間にただれ、その肉は腐敗し、崩れ落ちた。

獄長のカロンもその例外では無かつた。

「ここから…逃げおおせたところで……貴様らに安住の地など…無い……!!」

呪詛のような断末魔の叫びを上げて、カロンの身体は朽ち果てた。

「す、すげえ！」

レブロブスは目の前の汚泥の海を眺めて息を呑んだ。

ヨハネは笑みを浮かべ泰然と佇んでいる。

「年寄りの話には耳を貸すものじや」

九

牢獄の外に出て、ディーナは初めてゴルゴダの牢獄が山岳地帯に位置しており、社会から隔絶されたように薄寂しく建てられていたことを知つた。脱獄に成功した一行は牢獄から十分に離れた崖の上で小休止することとし、そこで夜明けを迎えた。

朝日が残雪のある山肌を輝かせ、眼前に限りなく広がる山稜には清涼な空気が流れ込んでいる。

「お主には悪いことをした」

ヨハネがピリポに憐憫の情を以つて語り掛けた。

「不測の事態だつたとは言え、脱獄の手引きをさせた上に、かつての同僚を手にかけさせつてしまつたからのう」

崖の上に立ち尽くし俯くピリポの頬は濡れていた。

「違うんだ」

ピリポは瞳を潤ませたまま、手の甲で頬を拭つた。

「健康な身体でいられる」とつて…こんなに凄いことなんだね。それに僕は…弱虫なのにあんな風に戦うことができて…まだ、信じられなくて！」

「俺達の中に弱虫なんていねえんじやないか？」

ピリポの言葉を、レブロブスがあつさりと打ち消した。

「そうだよ、ピリポ君は弱虫じやない」

ディーナがピリポに笑い掛ける。

「あなたは自分のことを顧みずに私を牢屋から逃そうとしてくれた。それから、私の命を救つてくれた。ピリポ君の勇気が、私をあの牢獄から脱出させてくれたんだよ。本当

に、ありがとう！」

ピリポはレブロブスとディーナを見つめながら、再び瞳から大粒の涙を溢した。

「義を見てせざるは勇無きなりつてな。自分で中で正しいことだとわかつていながら、それを実践できない奴を弱虫と言うんだ」

岩に腰掛けているガイウスは、見繕つたばかりの武器の手入れをしながら口を開いた。それはカロンから無断で頂戴した槍である。

「こんな言葉もあるぜ。恐れを知つて——」

「恐れを知つて、しかもそれを恐れざる者こそ、眞の勇者なり！ 古くから伝わる邪教の教えではないか！ わしも気に入つておるぞ」

ガイウスの言葉にヨハネの朗らかな声が重なつた。

泣き止んだピリポは頬を濡らしたままヨハネの話に聴き入つており、セリフを奪われたガイウスは不服な顔でヨハネを睨み付けた。

「ガイの言うとおり、お主は既に勇氣とは何かを知つておつたから、それを実行することができたのじや。その勇氣こそが、お主の中に眠つていた力を引き出したのかもしけん。自分に自信を持つことじや」

レブロブスが愉快そうに隻眼を光らせた。

「おもしろくなつてきたな！ 脱走犯の俺達には、その内追つ手が差し向けられるはず

だ。バラバラに逃げても戦力が分散して、何の得にもならねえ。しばらくは一蓮托生と行こうじゃねえか！」

「筋肉馬鹿の割に難しい言葉を知ってるな」

「ガイ、そろそろてめえの舌を引っこ抜くぞ！」

レブロブスとガイウスの間を流れる空気が牢獄内で出会つた頃よりも柔らかくなつてゐることに気付き、デイーナは微笑ましさを感じた。異端審問官達が現れた時からずっと張り詰めていた緊張の糸が、初めて緩んだ瞬間だつた。

「しつかし、これからどうするよ？　お前の主人を探すと言つても、何の手がかりもねえんだろう？」

「うん、ゼロが連れ去られている間、私は氣を失つてしまつっていたから…」

当惑する様子のレブロブスの言葉にデイーナは目を伏した。

「探す当てが無いと言うならば、お主達を案内したい場所がある」

ヨハネがディーナを見つめながらある発案をした。

「わしが昔、統治していたリベイラの街じや。そこには古い知人もおるので、何かしらの力になつてくれるかもしだれん。幸い、ここから距離もそう遠くない」

「少なくともここに長居するよりはまじやないか？　そうと決まりやあ、さつさと出発しようぜ」

ガイウスが槍を仕舞い、岩から立ち上がった。

男達は崖から背を向けて歩き始める。

ディーナは出立の前に、崖の上から広がる壯観な光景を眺めていた。吹き抜けの風が彼女の髪と背中の白い羽を揺らす。

この果てしない世界の何処かにいるゼロと再会すること。それは途方も無い願いであり、ゴルゴダの牢獄で囚われの身のままの彼女であれば、成し遂げることは不可能だつた。

しかし、牢獄で出会つた者達の導きにより、彼女の可能性は切り開かれた。その可能性に賭けてディーナは旅立つ。ゼロにもう一度会い、伝えなければならぬ言葉があつた。

「ディーナ！」

先行するピリポがディーナを呼ぶ声がする。

ディーナは仲間たちの方へ振り返り、歩き出した。

第三章 太陽の神殿

—

「やっぱり、ピリポ君はそういう服が似合つてゐる！ 名家の御子息つて感じだね」「か、からかわないで欲しいな…」

ディーナの心からの称賛の言葉に、着替えを終えたピリポは微かに顔を赤らめた。辿り着いた聖地リベイラの宿の一室で、脱獄したばかりのディーナ達は貧相な身なりを整えていた。

「ヨハネさんに出会えて、運がよかつたよ。あの人がいなかつたら、僕達は街に入ることすらできなかつたよね」

ディーナ達白き羽の者達は、ヨハネが使役している奴隸ということで示し合わせ、街へと入つた。白き羽の者は、例外なく黒き羽の者に仕えることを義務付けられている。自身で活動している白き羽の者は、見つかれば直ぐ様逃亡奴隸として捕らえられ、牢獄か競売場へ送られてしまうのだつた。

宿の主人はディーナ達のみすぼらしい姿を見るなり彼女達を追い返そうとしたが、ヨ

ハネが金貨の詰まつた小袋をちらつかせると、態度を豹変させ、特上の部屋を貸し与えた。

囚人の身であつたヨハネが潤沢な路銀を持つてゐる理由は謎のままである。

「こうやって、綺麗な服にも着替えることができたし……。でも、レブさんは上着を着ない今まで大丈夫なのかな?」

ピリポは寝台で気持ちよさそうにいびきをかいているレブロブスを見つめた。

「見せびらかしたいんだろ、無駄についてる筋肉を」

装いを正したガイウスがディーナ達の部屋に入るなり、レブロブスへ皮肉を浴びせた。皺一つ無い、下ろしたての服が彼の精悍さを引き立てている。

「おい、何か言つたか?」

レブロブスは瞬時に目を開きガイウスを睨み付けると、上半身を起こし、二階の窓から氣怠げに街の様子を眺めた。

「それにしてもよお、牢獄から出られたかと思えば、また随分と息苦しい所に着いたもんだな! そこら中から神官共の説法が聞こえるぜ」

宗教都市の名に相応しく、リベイラには至る所に教会が建てられており、早朝から信者達が引つ切り無しに中を出入りしている。

そして数々の宗教的建造物の中でも一際存在感と厳肅さを放つてゐるのが、街の中央

に位置するゴシック様式の大聖堂だつた。かつてヨハネが街に君臨していた際に居を構えていたという、太陽の神殿である。

宿に入る前、太陽の神殿の入り口付近を通り掛けた時、ディーナは敬虔な信徒達が全員を地面に投げ伏すようにして祈りを捧げる姿を目にしていた。

「ここはいつもいろんな国の信者や神官達が行き交つてゐるから、私達が追つ手から身を紛らすには打つて付けだつてヨハネさんは話していたけれど……。人通りは激しいのに、活気を感じさせない街だね」

ディーナは窓辺に立ち、殺伐とした街並みを眼下に見ていた。

「わしの次にこの街を支配することとなつた大神官のユダは、その嫉妬深さで有名での。下手に注目を集めれば奴に難癖を付けられて殺されてしまうので、街にいる者達は目立たぬよう、つづまやかにしておるようじや」

街での聞き込みから戻つたヨハネがディーナ達の前に現れ、身に付けていた仮面を外した。リベイラの住人に素顔を知られているヨハネは、街に滞在する間その正体を隠す必要があつた。

「皆、旅の疲れは癒せたか？ 街の庶民達からは有益な情報を得られなかつた。身支度が済んだら、太陽の神殿へ赴くとしよう」

「容易く話してゐるが、物見遊山で讃美歌を聴きに行く訳でもあるめえし……。じいさんには

縁のある神殿なら、神殿の奴らも今頃俺達の脱走の知らせを聞いて、警備を厳重にしてるんじゃないか？」

神殿で待ち受ける危機を察知し、ガイウスがヨハネに猜疑の眼差しを向けた。脱走犯が助けを求めて自らの出自に関する場所へ逃げ込もうとする心理を推察し、追つ手がその場で待ち伏せをしていることは想像するに難くない。

「神殿の内部には、上層部の限られた者しか知らない緊急避難用の隠し通路があり、街の外れへ続いている。その通路を逆に辿り、神殿へ潜入するのじや」

ヨハネは落ち着き払って言葉を続ける。

「多少の小競り合いが生じたところで、我々の戦力なら神官兵ごとき十分に打ち負かすことができる。まずはそこで、我々の協力者となり得る知人と合流せねばならん」

「じゃあ、危ないから、ディーナはここで待っていた方がいいよね」

ディーナの身を気遣うピリポを、ヨハネは物腰は柔らかいままに毅然と戒める。

「それはいかん！　このリベイラの街は、別名背徳の街と呼ばれる程、凶事と陰謀の渦巻く街じや。宿の中とはいえ、ディーナのようなら若い娘が一人でおつては、その身に何が降り懸かるかわからん。我々と行動を共にした方が安全じやろう」

「そ、そうなの？　本当に大丈夫かなあ？」

困惑するピリポを安心させるように、ディーナは語り掛ける。

「ピリポ君、心配してくれてありがとう。でも私、皆に付いて行きたい。ゼロを見つけるための手がかりがあるのかどうか、自分の目で確かめたいの……！」

ディーナの必死の形相に、ピリポはそれ以上何も言わなかつた。

「戦えねえ奴を連れて行くのは俺も反対だが、この際しようがねえ。とつとと用事を片付けちまおうぜ」

首の関節を鳴らしながらレブロブスが寝台から降り、部屋から出て行つた。皆もそれに続く。

〔ディーナ〕

部屋から最後に退出したディーナを、廊下に一人立ち止まつていたガイウスが呼び止めた。

「お前は人を疑うこととは無縁そうな愚鈍な奴だから、言つておく」

ガイウスの眼光に射竦められ、ディーナはその場に立つたまま石のように固まつた。「ヨハネのじいさんに気をつけろ。あのじじいは恐らく神殿で何かしようと企んでやがる。それも、お前を利用してな」

〔ヨハネさんが?〕

思わぬ人物について注意を喚起され、ディーナは耳を疑つた。

「ガイウスさん達と違つて私には戦う力も無いし、利用する価値なんて何も思い付かな

「いけど…。ヨハネさん、何を考えているの？」

ガイウスは片手を挙げ、肩を竦めてみせた。

「さあな、そこまでは俺にもわからねえ。ただ…あいつは気立てのよさそなじじいを装つてはいるが、今まで俺が殺してきた傲慢な野心家共と同じ目をする時がある。とんだ狸かもしけないぜ」

二

街中の石畳の上をディーナ達は進む。寒々しい灰色を単色で使い、画一的に建てられた民家や教会、伏し目がちに肅々と道を歩く人々の間を通り過ぎて行く。

歩を進めながら、ディーナは空を仰ぐ。淀んだ雲に覆われた空には、巨大な鎖が浮かんでいた。その鎖はリベイラの地を起点とし、はるか上空へと連なっている。

頭上に迫る鎖の超常的な重厚感には、畏怖の念を抱かざるを得ない。鎖が街に落とす影が、リベイラの陰々たる空気を形作っているかのようだつた。

雲の上にある鎖の終着点に何があるのかは、ディーナには計り知れない。

「ヨハネさん、この街にいる白い羽の人達は、皆服を着ることを許されているんですね」ディーナは視線を空の鎖から先頭を歩くヨハネへと移し、その背中へ話し掛けた。

「わしの治世に、黒き羽達へ、奴隸として飼つてゐる白き羽に服を着せ、四足歩行をさせないよう命じたのじや。白き羽の者達には、少しでも人間らしい生き方をして欲しくてな……」

「そんな邪悪極まりない優しさを振り撒いてたから、競争相手に足を掬われちまつたんじやないか？」

ガイウスがヨハネをからかうと、彼は自嘲めいた笑い声を上げた。

「保身のために他者の尊厳を踏み躡ることができることができる程、わしは有能な為政者ではなかつたかもしけん。だが、後悔はしとらんよ」

今に至るまで、ヨハネの言動の節々には弱者への惜しみない労りが感じられた。彼が奸計を巡らしているなど、ディーナは未だに信じることができなかつた。

やがて一行は市街地を抜けて、リベイラの外れへと行き着いた。人の往来は嘘のように途絶え、舗装されていない地面から砂塵が舞つている。

ある橋の袂に差し掛かると、ヨハネは川に向かつて土手を降つた。土手の斜面には水路の引かれた空洞があり、入り口部分が数枚の木片で粗雑に塞がれている。レブロブスがリベイラの武器屋で調達した戦斧で木片を打ち碎くと、ヨハネは用意した角灯に火を灯し、空洞の中へとディーナ達を誘つた。

「わしの牢獄送りが決定的となつたのは、禁忌とされていたある研究を続けていたこと

をユダに密告されたからじや」

水流とディーナ達の足音だけが聞こえる薄暗い空洞内部を進みながら、ヨハネが沈黙を破つた。

「太陽の神殿の宝物庫には、世界中から集められた希少価値の高い武具が保管されておる。その中に大邪神の鎧を見つけたわしは、その鎧の研究に没頭しておつた」「だいじやしんの…鎧？ 鎧の研究をすることの、何がいけなかつたの？」

ピリポが首を傾げた。

「大邪神の鎧は、ただの防具ではない。偉大な力を秘めた伝説の鎧なのじや。人の手の及ぶところではないと、その鎧に関わることは神殿内で禁じられていた。話せば長くなるが…」

迷宮のように入り組んでいる通路をヨハネは一度も立ち止まることなく歩き続ける。ディーナ達は耳を澄ましてヨハネの言葉を待つていた。

「黒き羽の者達の伝承によれば、かつて世界は愛や自由を信奉する大悪神ゴツドとその下部である白き羽の惡魔達の支配を受けていた。彼らに反旗をひるがえし、父なる大神サタン様の御加護のもと聖戦を始めたのが、黒き羽達の救世主である大天使、メフィスト様じや。黒き羽達を従えたメフィスト様は、ゴツド達との永きに渡る戦いの末、勝利を収めた」

「その聖戦というのが、ゴルゴダの牢獄でガイウスさんが話していた創世記戦争のことなんですね」

ディーナはガイウスとヨハネの話を結び付け、この世界についての理解をまた一つ深めていた。

「創世記戦争で命を落とした白き羽の悪魔達の中には、格別に強大な力を振るつた、七大邪神と呼ばれる者達がいた。その者達は、それぞれ万物の根源と、今の世界で言うところの七つの大罪を象徴する力を有していた。大地と正義を司る大邪神、ミカエル。生命と愛を司る大邪神、ガブリエル。太陽と人権を司る大邪神、ラファエル。炎と自由を司る大邪神、ウリエル。水と弱者への慈悲を司る大邪神、サリエル。大気と友情を司る大邪神、ラグエル。そして、謎多き大邪神、メタトロン。残された平等を司る大邪神だと言われておるが、その全貌は明らかにされていないままじや」

ディーナは心なしかヨハネの話し振りに熱がこもるのを感じた。

「大邪神達は戦の中で命尽きる寸前、自らの力を絶やさぬよう、その力を身に付けていた鎧に注ぎ込んだと言われておる。太陽の神殿には、大邪神メタトロンが創世記戦争で着用していたという鎧が封印されておるのだ！」

「じいさんよ、熱くなつてるところ水を差すが…まさかそんな昔話を信じて、危険を冒してまで鎧のために神殿に忍び込むつてえ訛じやねえよな？」

レブロブスが苛立ちを隠さぬまま声を荒げると、ヨハネはつと立ち止まり、後ろを歩いていた彼らへ振り返った。角灯に照らされるその表情は、無機質な仮面に隠され、窺いることはできない。

「お主達も実物の大邪神の鎧を見れば、その人智を越えた絶対的な力に慄くはずじゃ。鎧の力を手にすれば、追つ手の影に脅えることも無くなる。ディーナよ、お主の主人を救い出すという難関の多い目的を達するためには、必要不可欠なものだと思わんか？」

ヨハネの口調は穏やかだが、有無を言わせぬ気迫があった。

彼が立つ位置は行き止まりかと思いきや、目の前の壁には梯子が埋め込まれ、彼の頭上はるかに続いている。神殿内部への潜入の嚆矢だつた。

三

梯子を登り切り、天井の板に力を籠めると、板が外れ光が差し込んだ。梯子の上に身を乗り出し地面に足を着けると、そこは神殿内の祭事を執り行うような広間であつた。殺風景な部屋だが、磨かれた大理石の床や敷き詰められた赤い絨毯が静かに神殿の資力を称えていた。

「ここはまだ神殿の中程じや。宝物庫は神殿の最深部にある。わしは捕まる直前、鎧の

研究を行つてゐた弟子に宝物庫の鍵を預けてきた。ひとまずその弟子と落ち合いたいのじやが……」

「残念だつたな、じいさん。やはりそう簡単に宝探しはできないみたいだぜ」思案するヨハネを尻目に見ながら、ガイウスが槍を取り出し肩に担いだ。

一行の前に、法衣を纏い、巻き角を生やした黒い羽の神官達が一人立ちはだかつた。神官達は神殿の巡回中、突如現れたディーナ達に狼狽している様子だつた。

神官達の背後には、全身を濃紫の甲冑に身を包んだ騎士が控えている。顔の表面も兜に覆われ、禍々しい威圧感を周囲に与えていた。

「おい、あいつが着てるのが大邪神の鎧つて奴か!?」
レブロブスがヨハネに問い合わせる。

「いや、違う！ あれは、創世記戦争で名を残すことなく散つた下級の白き悪魔達が使用していた鎧を身に付けた、邪道騎士と呼ばれる者。悪魔の鎧の潜在能力は、大邪神の鎧に比べればはるかに劣ると言われておるが、手強い相手であることは確かじや。かような所で、邪道騎士と相見えるとは……！」

普段から冷静さを失わないヨハネが、少なからず動搖しながら騎士の正体を答えた。「あんなもん、ただの鉄の固まりじゃねえか！ 他の奴らと一緒に叩つ斬つてやる！」戦斧を構えたレブロブスの瞳に銳さが増した。

「邪道騎士って、見るからに強そうだなあ…。」ディーナは後ろの方に下がつてね…」

「…」
神官の一人が法衣の袖口から硝子の小瓶を抜き出し、中に入っていた紅血を床に滴らせた。そして錫杖をかざし呪文を唱えると、床に溢れた血は浮かび上がり弾丸の雨となつて、彼に接近し槍を振るおうとしていたガイウスを襲つた。

「こいつらも魔法を使うのか！」

ガイウスは辛うじて攻撃を避け、代わりに緋色の弾丸は大理石の床にいくつもの穿孔を作り出した。

ピリポは邪道騎士に狙いをつけて弓を引き絞り、渾身の一撃を放つた。しかし邪道騎士の鉄壁の鎧は矢を跳ね返し、矢は虚しく床に落ちた。

「駄目だ…！　僕の矢なんかじや歯が立たないよ…！」

「情けねえ声を出すんじゃねえ！」

打ちひしがれるピリポを叱咤しながら、レブロブスがもう一人の神官へ斬撃を繰り出した。神官はその一振りを躱したが、レブロブスはすかさず斧の石突で神官の後頭部を殴打し卒倒させた。

その場に倒れた神官に止めを刺すためレブロブスが斧を振り上げると、颯爽と剣を抜いた邪道騎士が彼に斬りかかつた。

迎え撃つレブロブスの戦斧と邪道騎士の剣が、激しい音を立てて衝突する。

「く、くそっ……」

レブロブスと邪道騎士の力は拮抗していた。邪道騎士の予想外の膂力に、レブロブスは焦慮の声を漏らした。

一方、ガイウスが神官の執拗な攻撃魔術の標的となつている間に、神官の背後に回り込んだピリポが彼の肩に矢を命中させた。攻撃の手が止んだ瞬間を見逃さず、神官との距離を詰めたガイウスは、突き出した槍で相手の腹部を貫いた。

「じいさん、こつちは片付いた！ 早くレブの野郎を援護しろ！」

「わかつておる！」

ガイウスが息の根を止めた神官の血液を触媒とし、ヨハネが魔術の詠唱を始めた。ヨハネが出現させた光弾は、レブロブスと武器を交えていた邪道騎士に直撃した。

爆風に煽られ、膠着状態から解放されたレブロブスは斧を手にしたまま後ずさつた。

「こいつ…… なんてえ馬鹿力だつ！」

ヨハネの魔術をその身に受けた邪道騎士は大きくよろめいたが、鎧の守護の力のためか、ゴルゴダの牢獄の看守達のように身体を溶解させることはなかつた。

そして、邪道騎士は侵入者達の前で初めて言葉を発した。

「……さすがは、大善神サタン様をも恐れぬ邪教徒達ですね」

邪道騎士の声を耳にして、ディーナは驚愕した。

「女の人の声！ レブロブスさんと互角に戦っていた人が…!?」

「ここまで追い詰められてしまえば、仕方ありません。相討ち覚悟でいかせてもらいます！」

邪道騎士は両手を掲げ、精神を集中し始めた。すると、彼女の頭上に燐然と輝く光の球が現れた。光球はさながら小太陽のように広間一帯を照らし出し、ただならぬ気配を生じさせた。

「その声、ルピルピであるな！ 攻撃を止めるのだ！」

ヨハネは邪道騎士に向かつて叫ぶと、仮面とフードを外し、自らの姿をさらけ出した。

「う、嘘…!? お師匠様!？」

邪道騎士は即座に魔法の詠唱を中止した。そして凄まじい速さでヨハネの元へ駆け寄つた。

「私つたら、お師匠様と気付けず何たる御無礼を！ お許しください…！」

ディーナは、ヨハネと邪道騎士が師弟関係にあると悟つた。

先刻まで敵対心に満ちていた邪道騎士の語調からは、すっかり警戒心が解かれていた。その声は澄み切つて、聞く者の耳に心地よく届いた。

ヨハネは申し訳なさそうに邪道騎士を見つめ、首を横に振つた。

「わしの方こそ、すまぬ。故意で無いとは言え、お主を傷付けてしまつた……。しかしルピルピよ。お主が何故、神官兵達とこのような場所におつたのじゃ？」

「ユダに命令されたのです。ゴルゴダの脱獄囚達が、宝物庫を狙つてこの神殿内に侵入するはづだから、見つけ次第殲滅するよう、と……」

邪道騎士は、自らが師と仰ぐヨハネを失脚させた人物の名を恨めしそうに告げ、うなだれた。

「そうか……お主は既にユダの配下の神官となつてしまつたか。我々は進む道を違えてしまつたのじゃな」

ヨハネが錫杖を握る手に力を込めると、邪道騎士は慌てて顔を上げた。

「ス、ストップ！　お師匠様つて、本当に私の弟子心をわかってくれないんだから！　私にはもうあなた方と戦う気は毛頭ありません！　わざわざここまで来られたということは、何か理由があるのでしよう？　私も協力いたします！」

「ル、ルピルピ殿……！　どういうおつもりですかっ！」

意識を取り戻した神官が上体を起こし、血相を変えて邪道騎士を問いただした。

邪道騎士はけろりとした様子で神官へ答える。

「どうもこうも、お師匠様が帰参されたので、私も弟子として御一緒させていただくだけです」

「ユダ様を裏切るのだな！ 許さん！」

神官は呪文を唱えて血の弾丸を飛ばしたが、邪道騎士は難無くその弾を剣で弾き返した。そして瞬く間に神官の側まで近寄り、彼の喉元を搔き切った。

「私が生涯お仕えすることを心から決めた方は、お師匠様ただ一人。ユダなんかの手下になつた覚えはありません」

剣を鞘に納めると、邪道騎士は兜を脱いだ。現れた薔薇色の美しい巻き毛を手櫛で整え、ディーナ達に向き直る。

「さあ、お師匠様。私に何なりとお申し付けください！」

邪道騎士はつぶらな瞳を輝かせ、笑顔を見せた。ルピルピと呼ばれているその邪道騎士の実態は、ディーナと同年程の、愛らしい姿容の女であつた。

四

「こうして、生きて再びお師匠様と巡り会える日がやつて来るなんて…夢のよう！ この感動を何时でも思い起こせるように、日記に書いておかなくちゃ！」

戦闘が行われた広間で一同は話を続けていた。

ルピルピは満面の笑みを湛えながら手帳を取り出し、忙しそうに筆を走らせていた。

「ルピルピ、わしはもうお主に師匠と呼ばれたり、お主の前に姿を見せたりするような資格も無いただのお尋ね者じや。だが、恥を忍んでわしはここに戻つて来た。我々はこれから大邪神の鎧の封印を解放するため、宝物庫へ向かおうと思つておる。どうかお主の力を貸して欲しい」

ヨハネの言葉にルピルピは手を止め、手帳に落としていた視線をヨハネに戻した。
「ということは、大邪神の鎧の適合者が見つかったのですか!? もしや、この中に……？」

ルピルピはヨハネ以外の男達の顔を順繰りに刮目していくた。

「うーん? やつぱり本命はこの筋肉ダルマかしら? でも、こつちのキザ男もなかなかいい動きをしていたわ。あつ、この男の子も射撃のセンスがあつたわ、磨けば光る原石だと思う!」

「筋肉ダルマか! そいつはいいな!」

ガイウスが堪え切れずに笑い出すと、レブロブスは顔を引きつらせた。

「じいさん、この女、一発ぶん殴つていいか?」

「冗談はさておき、じいさん! 今の話でようやくお前さんの魂胆が読めてきたぜ」

気の済むまで笑い終えたガイウスは、ヨハネを見ながら表情を引き締めた。

「じいさんが執着してゐる大邪神の鎧とやらは、何かしらの素質がある奴しか着られない

んじやないか？ そしてじいさんは、俺達の中に鎧の装備者の当たりを付けている。他の奴らはその大事な装備者を鎧の所まで送り届けるための、護衛役つて訳だ」

「ガイの勘の锐さには恐れ入るのう…」

ヨハネは観念したと言わんばかりに苦笑し、話し始めた。

「大邪神の鎧は、創世記戦争で戦死した大邪神達の力だけではなくその魂をも封じ込められた、生きた鎧。大邪神の鎧が着用者を認めなければ、その者は鎧に食い殺される…。わしは、鎧の適合者がいなくとも鎧の力を使いこなす術がないか、このルピルピと研究を続けておつた。しかし、研究の成果は実らぬまま、わしは捕らわれてしまった」

ルピルピは苦難に満ちた日々を思い出したのか、ヨハネの話を聞きながら悲しそうに目を伏せた。

「だが、獄中で死を待つばかりの身であつたわしに、僥倖が訪れた。ディーナ、お主に出会えたことじや。わしは、お主が大邪神メタトロンの力を受け継ぐ者だと確信している」

ヨハネは陰りの無い真っ直ぐな瞳でディーナを見据えた。

「わ、私が…ですか…？」

突然話題の中心に引き出され、ヨハネから衝撃的な告白を受けたディーナはうろたえた。

「よりによつて、こいつがかつ!?」

「そ、そうよ！　だつてこの子は、私みたいに可憐な、ただの女の子じやない！」
レブロブスとルピルピが口を揃えてヨハネの主張に異を唱えた。

「でも…僕はディーナに特別な力があるつていうの、わかる氣がするなあ。僕は目の前でディーナが光り輝くのを見たから。凄く眩しかつたけど…優しい光だつた。その直後に僕の怪我は治つて、健康な身体になつたんだ」

ピリポがディーナを見つめながら口を開くと、ヨハネは力強く頷いた。

「さよう！　ディーナが牢獄で放つた白き光は、大悪神ゴッドの再来を告げる、邪惡なる強者の証！　お主なら、命を奪われずにメタトロンの鎧を着こなすことができるはずじや。忌み嫌われる大邪神の力といえども、強い力を御する資格があるというならば、使わなければそれはこの世界を生き抜くうえで、大きな損失だと思わんか…！」

ヨハネの語り口には、鬼気迫るものがあつた。
次々とヨハネの思惑が明かされ、戸惑うディーナはしばらく俯いていたが、落ち着いた様子で話し始めた。

「ヨハネさん、ちよつと意地悪です…」

そして、ゆつくりと顔を上げてヨハネを見つめ返した。

「ゼロの手がかりが掴めるかもしれないと私達をこの街に導いてくれたけれど、それは、

大邪神の鎧の封印を解きたいという、ヨハネさん自身の願いのためでもあつたんですね

「真実を隠してお主を鎧の元まで連れて行こうとしたことは謝る。無論、鎧を着ることも強制はしない」

ヨハネもディーナから瞳を逸らさず、真摯に謝罪の言葉を返した。

「だが、よく考えて欲しい。お主が大切な主人を屈強な敵の手から救いたいと思うのならば、メタトロンの鎧の力を得ることこそが、最善の手段なのではないか？」

「私にそんなことができるなんて…思えないけれど…」

ディーナは拳を胸の前で握り締め、悲痛な面持ちで言葉を続ける。

彼女の脳裏には、今まで仲間達が繰り広げた戦いと、戦つた相手の息絶える瞬間の姿が蘇っていた。

「牢獄やこの神殿の中で、思い知らされました。ゼロと再会するためには、必ず誰かの血が流れる。戦う力が無いと、前に進めないと。私には何の力も無いから、皆がいなければここまで生きて来れませんでした。こんな私にでも、強くなれるきつかけが貰えるなら…試してみたいです」

ヨハネは真剣な表情を崩さないまま、ゆっくりと頷いた。

「よくぞ言ってくれた。さあ、それでは新手がやつて来る前に宝物庫へ急ごうではない

か！」

「こいつが鎧を着られるかどうかはともかく、鎧の力が本物だつてのはわかつた。鎧さえありやあ、こんな小娘でも俺と同じくらいの腕つ節が身に付くんだからな。俄然興味が湧いた！ 僕も付いて行くぜ」

レブロブスがルピルピの鎧を眺めながら腕を組む。

「あのう、お師匠様、申し上げにくいのですけど……」

ルピルピがためらいながらヨハネに語り掛けた。

「ついこの間、メタトロンの鎧はユダによつて宝物庫から持ち出されてしましました。鎧は今、ユダの執務室にあります……」

「なにつ!? ユダの奴、何を目論んでそんなことを……」

ヨハネが目を見開くと、ルピルピは頬を膨らませユダへの恨み節を炸裂させた。

「あんな奴の頭の中なんて、到底理解できません！ ユダの執務室だつて、元々はお師匠様が使つていた神聖な場所だつたのに、あいつはお師匠様が集めた貴重な書物を全部捨てさせちやつたんです！ おまけに部屋全体を、悪趣味な乱痴気騒ぎをするための宴会場みたいに改装してしまつて！ あいつが冒した暴挙の記録だけで、私の日記の大半は埋め尽くされています！」

「お前の日記つて、復讐日記なのかよ!?」

手帳のページを一心不乱にめくるルピルピに、ガイウスは呆気に取られていた。

「そうなると、鎧を手にするためにはユダとの衝突は免れんな。まあよい、街の支配者となつて権力を手にした現在のユダなら、ディーナの主人を連れ去つた異端審問官達についても何か知つているかもしけん。むしろ好都合だと捉えよう」

「悪いが、俺は先に宝物庫へ寄らせてもらう。俺にとつては、そんな物騒な鎧よりも、宝物庫にある他の武器の方が魅力的なんですね」

ユダの元に向かうため広間を出ようとしたヨハネの背中へ、ガイウスが言い放つた。レブロブスがガイウスに悪態をつく。

「盗賊の血が騒ぐってか？　がめつい奴だな、お前は！」

「強い武器が手に入れば手に入るだけ、俺達の戦いが有利になるつてこつた。単細胞のお前と違つて、俺は常に物事の先を見通してゐるのさ」

「わかつた。神殿内は迷いややすい。ルピルピ、ガイを宝物庫まで案内して鍵を開けてあげなさい」

ヨハネは振り返り、ルピルピへ指示した。

「ええーーー！　せつかくお師匠様と再会できたのに、別行動をしなきやなんて…。しかも、こんな皮肉屋のキザ男と…」

「俺もお前みたいな跳ねつ返りと連れ立つなんて御免だね。一人で十分だ。鍵だけよこ

しな

不満の声を上げるルピルピを睨み付けながら、ガイウスは彼女に片手を差し出した。

「えっと、夫婦喧嘩は犬も食わないって言うから、止めなくていいのかな？」

場の空気を取り持とうとしたピリポは、喧嘩の当事者達から敵意の籠つた目を向けられると、身を竦ませてディーナの羽根の後ろへ隠れた。

最終的にガイウスとルピルピはヨハネになだめられ、共に宝物庫へ赴くことになつた。

二人と別れた残りの者達は、ヨハネの先導に従い、ユダの執務室へ向かうため神殿内を進み始めた。

「無理しなくて…いいんだからね？ 鎧が無くたつてきつと、強いレブさん達が君の御主人様を見つけてくれるよ」

神殿の廊下を歩きながら、ピリポが心配そうにディーナの顔を覗き込んだ。

「ありがとう。それに、ピリポ君だつていってくれるもんね」

ディーナは自分の身を案じるピリポに顔の強張りを悟られないよう、精一杯笑つて見せた。

ユダの執務室に到着するまで、ディーナ達が他の神官兵達に遭遇することはなく、神殿内は異様な静けさに包まれていた。

ヨハネが荘厳な両開きの扉の前に立ち止まり、扉の持ち手に手をかけようとすると、扉は彼らを招き入れるかの如くひとりでに開いた。

中に足を踏み入れたディーナ達の目に飛び込んできた部屋は、執務室というよりも舞踏会場とでも呼ぶ方が相応しい、絢爛豪華な大広間だった。そして、開かれた扉の目前には、きらびやかな衣装を身に纏つた見目麗しいユダの部下達が、ディーナ達を出迎えるように左右に分かれて整然と居並んでいた。

広間の奥には中二階へと続く階段が線対称に二箇所建てられており、階段を上がった先はバルコニーとなっていた。そこには贅を尽くして作られたソファとローテーブルが置かれており、ソファには部下達と同じく自らを盛装し、奇抜な化粧を施した人物が悠々と足を組んで腰掛けていた。ヨハネと同じく、黒い羽と巻き角を生やしている。

その人物はワイングラスを片手に、ディーナ達をあざ笑いながら見下ろしている。そして、紫の紅を厚く塗った唇を開き、話し始めた。

「おかえりなさい、ヨハネ。久しぶりの故郷は楽しめていますか？　脱獄だなんて死に損ないのじじいが、随分と思い切ったじやないですか！」

一度耳にすれば忘れられない、特徴的な男の声だつた。
 その男が放つ独特のオーラに圧倒されることなく、ヨハネも彼に再会の挨拶を返した。

「久しいの、ユダよ。どうやら、お前の底なしの嫉妬深さも、その稀有な嗜好も健在のようじや」

「ちやらちやら女を侍らせやがつて、いーい御身分だぜ」

レブロブスが周りを見渡しながら、吐き捨てるように嫌味を放つた。

「ここにいるユダの部下達は全員、男じや。その身なりに反してかなりの手練れである。油断をするでないぞ」

ヨハネに耳打ちされたレブロブスは、驚きの余り言葉を失つていた。

「あなたの脱獄の一報を聞いて、私は直感しましたよ。あなたは必ず、この大邪神の鎧の元へ戻つて来るとね。だつてあなたは、この街の支配者だった時から、片時も鎧の側を離れなかつたんですもの」

そう話すと、ユダはグラスを持つ手を真横に伸ばした。その先には台座があり、台座の上には鎖が巻き付けられている一領の鎧が載つていた。

「あれが…大邪神の鎧…？」

バルコニーに置かれた鎧を見上げながら、ディーナは目を見張つた。

ディーナの位置から細部を確認することはできないが、それは、不思議な雰囲気を持つ白銀の鎧だった。天井に吊り下がっているシャンデリアの明かりを反射して輝いているのではなく、鎧そのものが淡く白い光を放っている。その光には、大邪神の名とは不釣り合いの気高さがあつた。

「鎧への執念を捨て切れず、のこのこと神殿へ戻つたあなたを私が捕まえて牢獄へ送り返せば・人々は、私の判断力と実行力を妬み、私の優れた能力を認めざるを得なくなる！」

ユダは高らかに笑い声を響かせた。

「だから、私の手柄のためにここまで来てくれたあなたには、褒美としてとつておきの話ををしてあげますよ。あなたが御執心の、大邪神の鎧に纏わる話をね」

ユダは空になつたグラスをテーブルに置き、傍らの部下に追加の酒を注がせた。そして酒の満ちたグラスを回しながら、楽しげに口を開いた。

「私が調べ上げたところによると、この世界には既に大邪神の鎧の封印を解いた者がいるんですつて！ その鎧の装備者は、青臭い坊やだそうですよ。その坊やは鎧を着てから一年以上経つた今も、心身に変調をきたさずにいるそうです。つまり、大邪神の鎧の適合者ならば、鎧に食い殺されずその力を思いのままにできる。あなたが立てた仮説は、検証されつつあるのです。よかつたですねえ」

ヨハネは押し黙つたまま、ユダの話を聞いている。

続けてユダは態とらしく眉尻を下げ、悲しそうな顔を作つた。

「ところが、特定の主人を選ばない、低俗な悪魔の鎧はどうでしよう!? その鎧は、身に付けた者の生き血を見境なく奪い続ける呪われた鎧。悪魔の鎧を着た者が、半年以上生きられたという前例は今までありません！ この神殿にも一人、悪魔の鎧の犠牲者となりつつある哀れな女がいるんですよ」

「それって、ルピルピさんのこと?! あんなに元気そうなのに……！ ヨハネさん、本当なの……!?

動搖するピリポはヨハネにユダの話の真偽を確かめるが、ヨハネは尚も沈黙を貫いている。

「哀れで、愚かな女ですよ。彼女はあなたが牢獄に囚われた後も孤独に研究を続け、とうとう自分の身を実験材料として、悪魔の鎧に捧げてしまつたのですから！ 彼女は元々、あなたが大邪神の鎧の研究を始めることに反対していた。彼女の言うとおりにしていれば、あなたの方二人の未来は変わっていたのにねえ！ ま、あなたを陥れるために鎧の研究を持ち掛けた私が言えたことではないですが」

「言わせておけば……ユダよ。愚か者はお主の方だ」

ユダの長口上に一区切りがつくと、ヨハネはようやく口を開いた。

「お主は昔から、周りが下す評価の中でしか自分の価値を見出せぬ、虚しい奴じやつた。だから他者に下される評価が気になつて仕方がなく、その評価の些細な違いが激しい嫉妬の炎となるのだろう」

ヨハネの言葉に、ユダの表情が初めて険しくなつた。

「邪道騎士の正体がルピルピだとわかつた時：わしの心は乱れた。わしの行いが、ルピルピの運命を狂わせてしまつたことは紛れもない事実」

ヨハネは瞳の中に強い意志を籠めたまま、ユダに話し続ける。

「だが同時に、わしは自分が恵まれていると思ったよ。ルピルピはわしのためにその命を懸けて、わし自身ですら諦めかけていた宿願を叶えようとしてくれたのじや。わしには、ルピルピが悪魔の鎧を身に付けた覚悟を、共に背負う責任がある！　そのためにも、大邪神の鎧は取り返させてもらうぞ」

ディーナは、ヨハネとルピルピの間にある、単なる師と弟子という立場を超えた特別な絆の存在を感じ取っていた。

「ユダよ　お主は見栄えがよくて腕も立つ兵士を数多く従えている。だがこの者達は、お主が窮地に追い込まれた時、命を賭してお主のために戦うだろうか？　中身は空っぽで、さしたる信念も持ち合わせていないお主に、付いて行こうとするだろうか？」

ユダは湧き上がる怒りで顔を醜く歪ませ、グラスを持つ手をわなわなと震わせた。

「相変わらず口が減らないじじいですね！　じつ、自分のために命を懸ける女が一人いるからって、何だっていうんですか！　あなたは地位も名声も失って、代わりに私がこの街の支配者となつた！　この結果こそが、私があなたより優れていることを証明しているんですよ！　さあ、観念してください。いくら大魔導士のヨハネといつても、この人數には——」

「観念するのはあんたよ！　このつ、オカマ野郎!!」

凛々しい女の声がユダの背後で響いた。

虚を突かれたユダは、身体を竦み上げらせ、手にしていたグラスを床へ取り落とした。ユダがいるバルコニーの奥側には通路があり、バルコニーと通路を区切つていた帳の中から、ルピルピが飛び出した。その表情からは、ユダへの断固とした敵愾心が見受けられた。

「お前、あほか！　攻撃する前に気付かれるようなことをしたら、奇襲にならねえだろがっ！」

ユダへ勢いよく啖呵を切つたルピルピに続いて、ガイウスがバルコニーへ姿を現した。予測不可能なルピルピの動きに、ユダと同じく度肝を抜かれたようだつた。

ルピルピはユダを睨み付けながら、腰に手を当てて憤りの声を上げる。

「こんな好き放題言われて、黙つてなんかいられないわ！　しかもこいつは私を騙して、

私にお師匠様を殺させようとした！ 絶対許さないんだから！」

ユダは慌てふためきながらソファから立ち上がり、ルビルピ達の方を振り返った。

「ルビルピ!? あ、あなたまさか、ヨハネ側に寝返つたというのつ!?

「私があなたの仲間だったみたいな言い方、しないでよね！ お師匠様、こんな奴けちよんけちよんにして、さくっと大邪神の鎧を奪還しちゃいましょう！」

ルビルピが階下にいるヨハネに向かつて勇ましく鼓舞の言葉を贈ると、ユダは取り乱し、座つていたソファを蹴り倒した。

「信つじられないわ！ 雜魚のくせに大神官である私に歯向かうなんて！ 私の、美しい愛人達！ やつておしまいなさい!!」

ユダが号令をかけると同時に、彼の部下達は武器を構えた。

「ピリポよ、ディーナを頼むぞ！」

「わ、わかった！ ディーナ、こつち……！」

ヨハネに言い付けられ、ピリポはディーナを広間にある柱の陰へと退避させた。ディーナ達が部屋に入るために使用した扉は既に閉ざされ、外に出ることは不可能だつた。

「ヨハネは死なない程度に痛め付けてから、もう一度牢獄送りにしてやるのよ！ 他の男共は：：そうね、半殺しにして反抗心を失わせてから、私好みの奴隸に調教してあげる

わ！」

憤怒と憎悪の染み付いたユダの蛮声が、広間に鳴り渡つた。

六

ユダ一味との乱戦は、戦闘員の圧倒的な人数差でヨハネ達が劣勢に立たされていた。ユダの部下達は複数の武器を駆使してヨハネ達を攪乱している。近接武器を使う部下を相手にしている最中でも、別の部下達が放つ弓矢や投擲用の短剣が急所を狙つて的確に撃ち込まれてくる。一瞬たりとも気が抜けない状態だった。

「こいつら、ふざけた仮装集団かと思つたら、けつこう戦い慣れてやがる！」

バルコニーでルピルピと共に部下達と交戦しているガイウスの表情には、いつもの余裕が無い。

ユダは堅固な部下達の壁によつて護られ、二人は近づくことすらできなかつた。

ユダ本人は戦いに参加しておらず、毒々しく彩られている自らの爪を眺めながら、勝利が確定しているとでも言わんばかりの笑みを湛えている。

「そうそう、ヨハネに詠唱の隙を与えるんじゃないわよ。魔法が使えなければ、あいつはただのくそじじいなんだからね！」

ヨハネの戦闘手法を熟知しているユダの指示によつて、ヨハネは部下達からの猛攻に遭つっていた。ヨハネは老身とは思えない身ごなしでその攻撃を受け流していたが、反撃に転じる機会を逸していた。

「ピリポ君、私のことはいいから、ヨハネさん達に加勢してあげて！」

戦場の様子に心を痛めているディーナは、自分の周囲を警戒しているピリポの背中に向かつて懇願した。

「でも…君に何かあつたら…！」

ピリポは振り向き、逡巡していた。

「ユダの奴がいない…？　あいつ、どこに行つたの！？」

部下の一人を斬り倒したルピルピが、バルコニーにいたはずのユダの姿を見失い、慌てて辺りを見回した。

「…・…・よ…」

耳を這うようなユダの声が、ディーナとピリポのすぐ側で聞こえた。

魔術を用いて二人の目の前に瞬時に移動したユダは、ピリポを突き飛ばし、彼の身体を強かに床に打ち付けさせた。

ユダはそのまま立ち竦むディーナの首に手をかけ、彼女の身体を近くの柱に手荒く押し当てた。

「ヨハネもそうだけど：私はあなたのことも最初から気に食わなかつたのよ！」

「デイーナ！」

ピリポは痛みを堪えながら身を起こし、ディーナの側に駆け付けようとしたが、ユダの部下達がその行く手を阻んだ。

「私はね、美しさしか取り柄のない女があつい嫌いなの！　特にあなたみたいな、男達の庇護欲を搔き立てて、如何にもか弱そうにしてる女がね！」

首にかけられた手に力が入り、ユダの長い爪が肉に食い込む。ディーナは音にならない呻きを上げ、苦悶の表情を浮かべる。

「い、いかん！　このままでは鎧の適合者が！」

「戦えねえ奴を先に狙いやがつて……！　てめえ！　そいつを殺るのは俺達と正々堂々戦つてからにしやがれ！」

取り巻くユダの部下達と戦いながら、ヨハネは焦燥し、レブロブスはユダの卑劣な行いに激怒した。

ユダはディーナの苦しみが長く続くように、絶妙な力加減で彼女の首を締め上げている。

「あなたは強い者を誘惑して、そいつらの陰に隠れているだけの、本当にずるい女！　一人では何もできない弱者のくせに、誰かがどうにかしてくれるって、思い上がつてるの

よ！」

ユダに攻められながらも、彼の言葉は核心を突いているとディーナは納得していた。瀕死の重傷を負つて記憶までも失つたディーナの心身を癒し、箱庭での安穩な日々を保つたのは、ゼロの弛まぬ努力だった。ゴルゴダの牢獄での苦境を乗り越えたのは、それに挑んだ仲間達の健闘だった。

そして今は、ヨハネに導かれるまま太陽の神殿へ足を運び、またも仲間達の力に頼り切つていい。知らず知らずのうちに自分は、誰かが作り出した流れに身を任す楽な生き方しかしてこなかつた。ディーナはそう思つた。

自分には、この世界に立ち向かうための力も、そのための意志すらもない。

「白い羽の分際で、このユダ様の嫉妬を受けながら死ねることを誇りに思うのね！」

ユダは自らのセリフに酔いしれるかのように笑つている。

ゼロとの再会を果たせないまま、死に至ること。無力で、意志薄弱な自分。あらゆる負の感情が善とされ、大切なものが踏み躡られる、冷酷な世界。

ディーナの中の未練や後悔、悲憤が一つに混ざり合い、零となつて両頬を流れた。

その時だつた。輝かしい白き光がディーナを光源として放たれ、彼女を庇うように巻き起こつた突風がユダを吹き飛ばした。光を直視したユダは目が眩んでおり、両手で目を覆つたまま倒れ込んでいる。

「僕が牢獄で見たのと、同じ光だ！」

ピリポは弓を構えたまま、驚異の目を見張った。

ユダの拘束を逃れたディーナは、激しく咳き込む。その全身からは白き光華が放出され続けている。

彼女達の元には、神話の時代から語り継がれる、大いなる力を巡る物語の幕開けが押し迫っていた。

「鎧の鎖が……」

ガイウスは、台座に置かれている大邪神の鎧に巻き付いていた鎖の輪が砕け、床に飛散する瞬間を目にした。

鎧から放たれていた光は強さを増し、まるでその存在を主張しているかのようだった。

「鎧がディーナに反応し、封印が解けかけておる！ やはりわしの予想は間違つていなかつた！」

ユダの部下達の攻撃を躊躇ながら、ヨハネが声を振り絞つた。

「お主が鎧を着るという意思を見せれば、鎧は力を与えるはずじゃ！」

「ディーナ！ よく聞いてっ！」

ルピルピが相手と剣を交えながら、沈痛な面持ちでディーナに向けて声を張り上げ

た。

「この鎧を着るためには、背中の羽を自分の手で…むしり取らなければいけないの！あなたに、それだけの覚悟がある!?」

ヨハネと同じく頭に角を生やしているルピルピが、本来背中にあるはずの黒い羽を失っている理由が明らかになつた。

ディーナが鎧を見上げると、彼女の周りから、戦場の喧騒や仲間達の声が遠ざかっていった。剣戟を振るう者達の動きが異様なまでにゆつくりになつたかと思うと、その姿は霞んでいつた。

彼女の視界に鮮明に入つているものは、自分と同じ白き光を放つてゐる大邪神の鎧のみ。

鎧は自分に問い合わせてくるようだと、ディーナは思つた。鎧を着て為すべきことがあるのか、それを為すための意志はあるのか、と。

ディーナは自らの片翼を掴み、羽を抜こうと力を込めた。言ひようのない激痛と不快感が身体に走り、顔を歪めて瞼を閉じる。羽を握る手が震えた。

『お前のためならどんなことでもできる。例え、それがどんな罪に問われようとも』

ゼロが自分に紡いだ言葉を反芻する。

ディーナの震えは収まつた。そして彼女は瞳を開き、微笑んだ。

自分の選択が、完全な自分の意志によるものだとは言い切れなかつた。その要因は、ヨハネの野心でもあり、後に引けなくなつた現在の状況でもあると言える。

ただ、ゼロのためならば、自分が何もかも失うことすら厭わない。それだけは誰にも否定されたくない、本当の思いだつた。

箱庭でゼロと過ごした一年間の中で、二人は様々な経験を分かち合つた。お互の心の奥底を見せ合い、お互いのありのままを認め合い、理解し合えることが一つでも増えたことに涙した。

己の一部を与えることで満たされる喜びを教えてくれたゼロのために、今更自分が何を失うことを惜しむだろうか。

悲壯の決意と共に、白い羽がディーナの背中から引き離された。

そして、広間に居る者全ての視界が、真っ白に輝く光に染まつた。

七

居合わせた者達の視界を支配していた光が收まつた直後、広間には白銀の鎧を身に纏つた戦姫の姿があつた。

「あいつ……本当に鎧を着やがつた……」

その場の誰もが言葉を失つていた光景を前にして、初めに開口したのはガイウスだった。

「ディーナ、綺麗だなあ……」

ピリポは戦いの最中であることも忘れ、戦場に佇むディーナを夢心地で見つめている。

落ち着いた光沢を放つ籠手に覆われた自らの両手を、ディーナは呆然と眺めていた。台座に置かれていた大邪神の鎧はまるでディーナのために眺めたかのように彼女の身体にぴったりと添つており、胸元の白銀の金板が美しい曲線を描いている。頭以外を隙間なく包み込む厳かな装甲は、彼女の持つ純然たる清らかさを守っているかに見えた。

かつてディーナの背中にあつた無数の白き羽根が、別れを惜しみながら彼女の周りを舞つていて。翼を捨て、終わりの見えない戦いの日々に身を投じることとなつた彼女への、手向けのようだ。

「何だ？　俺はあるの鎧を着たあいつを何処かで見た気がする……いや、そんな訳ねえ」

ディーナの姿に目を凝らし、奇妙な既視感を覚えたレブロブスは、考えを振り払うように首を横に振つた。

そして解放された大邪神の鎧の目撃者達の中に一人、喜びに打ち震える者がいた。

「我が積年の願いは……遂に成し遂げられた！ 創世記戦争の終結から、永久の眠りに就いていたメタトロンの魂が、今、ここに蘇つたのだつ！」

歓喜はヨハネの理性を押し流すかの如く沸き起こり、法悦に浸る咲笑となつて、広間に居る者達の鼓膜を揺らした。

「目に焼き付けるのだな、ユダよ！ 天界で他の悪魔達の追随を許さぬ力を持つていた大邪神の、その威を代わる者の降臨であるぞ！」

視力を取り戻したユダは覚束ない様子で立ち上がり、ディーナを凝視しながら唇を震わせ、驚倒した。

「いつたい何なの!? まさかこの非力な女が：邪神の再来とでもいうのか!?

頭髪を両手で驚掴み、頭を抱えているユダはひどく混乱しているようだつた。そして彼が抱えている未知の力への畏れと不寛容は、排他的な攻撃性を伴つて、ディーナ達への言動に表れる。

「身も心も邪教に染まり切つた異端者共！ 脱獄の罪だけでは飽き足らず、禁断の大邪神の力まで手中に收めようとすることは……お前達のような異常者を野放しにはできん！ 生け捕りなど生ぬるい、皆殺しだ！」

ユダは目を血走らせながら鋼鉄製の錫杖を手にし、呪文を詠唱した。彼の周囲で身を裂くような獰猛な冷気が発生し、白い霧が渦巻いたかと思うと、その中から人の頭程の

大きさがある氷塊が数限りなく浮かび上がった。氷塊の一つ一つの先端は刃物のように鋭くなつており、その先端がユダからデイーナへ水平方向に目にも留まらぬ速さで撃ち込まれた。射程は長く、また、デイーナが左右の方向に飛び退いても回避は不可能だつた。

だが、先程までデイーナの中に入り乱れていたはずの、死の予感や憤りの心は嘘のように消え失せてしまつていた。研ぎ澄まされた感覚が、危機を脱する手段を既に導き出していた。

彼女は放たれた氷塊の届かぬ上空へ、助走もなく跳んだ。そのまま身を丸めてユダのはるか頭上を旋回し、彼の背後へ舞い散る羽根の一枚のように軽やかに降り立つた。着地の衝撃を受け、純白のマントが優雅に波打つている。

人間業とは思えない華麗な跳躍を見せたデイーナの姿に、敵味方問わず誰もが目を奪われていた。彼女自身、翼を失つたにも関わらず、飛翔できるかのように身軽になつた自らの身体の扱い方に戸惑つていた。

「絶対に認めない：お前のような女が、こんなに美しい力を手にするなんて…！　さつさとくたばつてちようだい！！」

デイーナに向き直つたユダは、錫杖を振りかざし彼女の側へ迫り寄る。その様相は、神官が悪を断罪するため立ち向かう勇姿ではなく、嫉妬に狂つた一人の男が私怨を晴ら

そうと足搔く姿だつた。

「何でもよい、ディーナに武器を渡すのじゃ！」

「こいつを使え！」

ヨハネの呼び掛けに応じ、バルコニーに居るガイウスが階下に向かつて一本の剣を投げ入れた。剣はディーナの足元へ突き刺さる。それはガイウスが神殿の宝物庫で入手したと思われる、柄頭に紅玉が施された両刃の長剣だつた。

ディーナはその剣を即座に地面から引き抜き、彼女を打ちのめすために振り下ろされたユダの錫杖を刃で受け止めた。柄を握る両手に力を込め、剣を大きく撥ね上げる。錫杖はユダの手を離れ、空中で弧を描き、拾い上げるには彼から程遠い場所へ落下した。

「ばつ、馬鹿な！ どこにそんな怪力が!!」

ディーナの想定外の力に驚愕し、その場で硬直している無防備なユダの胴体へ、彼女は無我夢中で剣を振り下ろした。銳刃はユダの左肩先から入り、右脇腹までを斜めに斬り裂いた。初めて剣を取る者が放つたとは思えない、鮮やかな一撃であつた。

人の肉と骨が凶器によつて断ち切られる感触に、ディーナは猛烈な恐怖と嫌悪感に襲われ、総毛立つた。鎧を身に付けてからの一連の自分の行いが非現実的過ぎて、夢の中の出来事のように感じられた。しかし、血に濡れた自らの剣と、目の前で膝を突き、倒れ伏したユダの身体から流出する鮮血が、全てが幻想ではなく事実であると無情にも彼

女に告げていた。

「雌雄は決した！　この場に大邪神の力を凌ぐ者はおるまい！　命が惜しくば、ここから立ち去るがよい！」

ヨハネが殺気立ちながら、ユダの部下達へ鋭い眼差しを向ける。司令塔であつたユダが撃退され、統制を失つた彼の部下達は、たちまち武器を投げ捨て、散り散りになつて広間の外へ敗走を始めた。

「じいさんの言つたとおりになつたな。大将の弔い合戦をおつ始めるような、忠義に厚い手下はあいつにはいなかつたってことか」

レブロブスが呆れ顔でユダの部下達を見送つた。

八

「終わつたの……？」

戦場の狂騒が過ぎ去つた広間の中で、立ち尽くしていたデイーナの手から剣が滑り落ちた。

これ以上、この場で誰かの命を奪わなくて済むという安堵感が胸の内に広がり、身体中から力が抜けていくようだつた。

「ディーナ、大丈夫？ 僕、何もできなくて…ごめんね…」

いつの間にか、ピリポがディーナの傍らに寄り添うように立つており、続いて他の仲間達も彼女の元へ集結した。

「そんなことないよ…！ 皆が無事で、本当によかつた…」

一人も欠けていない仲間達の顔を確認し、いよいよディーナの緊張状態が弛緩しきると、彼女が身に纏っている大邪神の鎧が再び白い光を放ち始めた。光が粒子となつて辺りに雲散すると、ディーナの姿は鎧を着る前の平服姿に戻つていた。

「あ、鎧が消えちゃった…」

ディーナが自らの身体を見回しながらうろたえていると、ルピルピが彼女の前へ一步進み出て、片目をつむつた。

「心配しなくて平気！ 私達の鎧はね、持ち主の戦意に反応して実体化するの。必要な時が来れば、また力を貸してくれるわ。便利な鎧でよかつたわよ、鎧を着たままじやお風呂にも入れないし、ゆっくり眠ることもできないでしょ？」

ルピルピは自らも武装を解いた。厳めしい悪魔の鎧は、年頃の娘らしい出で立ちへと変貌し、彼女の柔肌が露わになつた。

そしてルピルピは瞳を潤ませながら笑みを浮かべ、ディーナを見つめた。

「大邪神の鎧の解放の場に立ち会えたなんて…お師匠様と私の苦労が報われたわ。あり

がとう、ディーナ。今日は、後世にまで残せるように気合を入れて日記に書いておくから！」

「うむ、過酷な決断を迫られたにも関わらず、よくぞ成し遂げてくれた。これで、偉大なるメタトロンの力はお主のものとなつた！」

悲願の達成に昂ぶりを抑えられない様子のヨハネとルピルピに向かつて、ディーナは弱々しく頭を振り、表情を曇らせた。

「全然、実感が湧かないです。今の戦いも、私は生き残ることだけに夢中になつてしまつていたから…。私にこの鎧の力を使いこなせるのか、わからない…」

「生き残ることだけ考えてりやいいんだよ！ 初陣にしちゃ上出来だつたぜ。せつかく強い力が手に入つたんだ、ごちやごちや言つてねえで有り難くもらつとけ！」

翼の無くなつたディーナの背中を、レブロブスがぴしやりと叩き、彼女は目を丸くして前のめりに姿勢を崩す。彼の頬もしい豪胆さによつて、ディーナは自分の不安が何処か瑣末なことのようにも思え、沈み切つっていた気持ちが幾分上向いた。

一同が戦勝の高揚感に浸つてゐる中、地面にうつ伏せで倒れているユダを見下ろしていたガイウスが口を開いた。

「しぶてえ奴だな。こいつ、まだ息があるぜ」

ガイウスはユダを仰向けに横たえさせると、赤く染まつてゐる彼の胸倉を片手で掴

み、上体を起こさせた。もう一方の手には、ユダの部下が落としていた短剣が握られている。

「おい、お前に聞きたいことがある。早く楽になりたかつたら、正直に答えろよ」
白粉が塗られているユダの顔面は戦いの時よりも更に蒼白になつていて、呼吸は弱り果て、彼の命の灯火は今にも絶えそうだつた。

ガイウスはディーナに目配せをし、その目は尋問を始めると語つていた。ディーナはユダの側へしゃがみ込み、彼に問い合わせた。

「…私は自分の主人である、ゼロという名の黒い羽の青年を探しています。彼は愛を口にした罪で、異端審問官達に捕まつてしましました。ゼロが何処に連れ去られたのか、あなたは何か知つていませんか…?」

ユダはディーナを憎々しい目つきで見ていたが、浅い呼吸を何度も繰り返した後、痛みに悶えながら返答した。

「お前の主人のことなんて、私が知る訳ないでしょ…。ただ、異端審問会と言えば、この世界最大の宗教結社、アンゲルス教団が誇る精銳部隊。その教団の直接の管理下にある部隊なんだから、そいつは教団の総本山にでも連れて行かれたんじゃないの…? 悪いけど、総本山が何処にあるかまでは…知らないわよ…」

「俺達は異端審問官の裁きでゴルゴダの牢獄に収監された。そのアンゲルス教団つての

は、俺達を捕らえていた大元つてことか。それで、総本山つてのはそもそも何なんだ？」

「アンゲルス教を布教している世界中の教会を統べる、教皇庁を指す」
ガイウスの疑問に、ユダに代わってヨハネが説明を始めた。

「教団の最高指導者である教皇を頂点に置いた組織であり、教会での説教がアンゲルス教の教義に反していいなか監視するなどして、この世界の秩序を保つために活躍していると噂に聞いたことがある。神官として恥ずかしいが、わしは鎧の研究にかかりきりだつたもので、宗教組織の話にはとんと疎くての。総本山の場所を突き止めるとなると、骨が折れそうじや」

ヨハネは途方に暮れた様子で嘆息したが、すぐに気を取り直してユダへ視線を向けた。

「ユダよ、もう一つ教えてもらおう。お主は先程、大邪神の鎧について調べ上げたと話していたな。詰まるところ、お主も鎧の力に魅入られていたのじや」

大邪神の鎧の名に、レブロブスが身を乗り出す。

「お主の話が本当ならば、封印が解かれた大邪神の鎧は、メタトロンの鎧を含め、二つ。七大邪神の神話に従い、あと五つの鎧がこの世界に封印されているはずじや。残りの大邪神の鎧は、何処にある？」

「残念ながら…全ての大邪神の鎧の在り処を掴めた訳ではありません。御期待に沿えな

くて、すみませんねえ……！」

ユダは力無く笑い声を上げる。口元から流れている一筋の血が、不気味な程に青白くなつた彼の肌に映えていた。

「カナンとパンデモニウムの領主が、教団からの命を受け、自らの屋敷内で鎧を管理しているそうです。私が知る鎧の情報は、これで全部ですよ……」

髭を貯えた顎に手を置きながら、ヨハネが旅の進路について思い巡らしていた。

「ふむ……こやつの話を勘案すると、次に目指すはその二つの街に居る領主達じやな。鎧の警護を任される程の領主ならば、教団と密接な繋がりがあるはず。総本山の場所を知つてゐる可能性が高い」

「……から近いのは、パンデモニウムの街の方ですわ。お師匠様はこの者達と旅立たれるのですね？ それなら、私もお供いたします！」

無邪気に師を慕うルピルピに対し、ヨハネは慌てた様子で口早に話し始めた。

「何を言つておる！ 悪魔の鎧に生き血を吸われ続けているお主を、連れ回す訳にはいかん！ お主はここに残つて身体を休めることに専念するのじや……！」

「何処で何をなさつて いるのかわからないお師匠様の身を案じて いる方が、よっぽど身体に悪いです！ 私が今まで知識を身に付けてきたのは、お師匠様の前途を照らす光となるため。もう何があつても、お側を離れませんから！」

ルピルピは頑として自分を曲げなかつた。その熱誠に根負けし、ヨハネは肩を落とした。

「…そこまで言うのなら、わしも止めはせん。好きにするがよい」

「僕も皆に付いて行つて、いいかな？ 僕なんか大して役に立たないとと思うけど：ディーナの御主人様を助けてあげたい。レブさんも一緒に来てくれるよね？」

「あ？ ああ…そうだな……」

ピリポに名を呼ばれ、レブロブスは急に我に返つたようだつた。その返事にはいつも彼が見せる霸気が無く、何か別の事柄に気を取られているような素振りだつた。

「俺もしばらくお前に付き合うことにした。大邪神様の御威光にあやかつていた方が、道中何かと楽ができそุดからな」

そう言うと、ガイウスは握つていた短剣の刃先をユダの喉元に突き付けた。

「御苦労さん。もう死んでいいぜ」

「待つのじや、ガイ！」

ユダを手にかけようとしたガイウスを制したのは、ヨハネだつた。

「わしに叛意を抱いていたとはいえ、このユダはかつて共に大邪神の鎧を研究していた弟子の一人。成し得る限り、再起の機会を与えてやりたい。こやつの生死は、こやつ自身の生命力と運に委ねてはくれぬか：」

「どうせこの傷じや助からねえよ。このまま放つておいても、苦しむ時間が長引くだけだ。ま、じいさんがそれでもいいって言うなら構わねえが」

ガイウスはヨハネに振り向き眉をひそめたが、そのままユダを掴んでいた手を離した。

「ユダ、もし生き延びることができたのならば、我執を捨て、真の街の指導者としてリベイラの民に尽くすのじや。わしの二の舞を演じるでないぞ……」
祈りを捧げるように戦然とした面持ちでユダに語り掛けるヨハネの姿には、図らずも平伏してしまうような威厳があった。

再び地面に倒れたユダは、微かに唇を動かしてヨハネに何か伝えようとした。だが、その言葉が音を発する前に、彼の瞼は閉ざされた。

九

太陽の神殿を後にした一行は、パンデモニウムの街へと続く街道を歩き始めた。

明け方に神殿へ潜入してから、果てしない時間が経過したようにディーナは感じていたが、陽は僅かに西に傾いているだけだった。

背負っている剣の重さが、ディーナの戦士としての旅立ちを示していた。待ち受けて

いるであろう、まだ見ぬ鬭争の数々に思いを馳せ、小さく吐息を漏らす。すると、地図を広げながらヨハネと前を歩いていたルピルピが振り返り、彼女の真横へ並んだ。

「鎧を着ている女の子同士、頑張りましょ」

ルピルピは親しみ深い笑顔を浮かべ、自らの肩でディーナの肩を軽く小突いた。

「うん！ これからよろしくね、ルピルピさん」

「そんな他人行儀な呼び方は駄目！ 私達、年も近いじゃない！」

「じゃあ…ルピルピちゃん！」

ころころと朗らかに笑っているルピルピを見つめ、ディーナもつられて目を細めた。

彼女の笑顔は温かく、見る人の心の痞えを溶かすようだとディーナは思った。

「ねつ、ディーナ！ 宝物庫からユダの所へ向かっている間にガイから聞いたんだけど

…」

ルピルピはディーナの耳元に口を近づけ、囁いた。

「あなたも愛が本当にあるって信じてるんでしよう？ あなたが愛している、ゼロっていうのはどんな人？ この話、すつごく気になるから、今度二人だけでゆっくり話しますよ！」

「あなたもつてことは…ルピルピちゃんは愛を信じているんだね！ あなたにも、愛する人が…？」

ディーナが顔を輝かせると、ルピルピは、はにかみながら微笑んだ。華やかな話題で盛り上がるディーナ達の背中をぼんやりと眺めながら、レブロブスが最後尾を歩いていた。彼の足取りは遅く、その表情はそこはかとない陰りを帶びている。

「パンデモニウム……一度と戻ることはねえと思つていたが……」

彼の呟きは、吹き付ける乾いた風の中に搔き消された。

第四章 襲いくる郷愁

一

黄昏の陽光が荒野を照らしていた。物寂しい光景が広がる荒野に、剣を構え対峙している二つの人影がある。その内の一つはディーナだつた。

剣を持つ彼女の手付きはたどたどしく、相手方から次々と繰り出される打撃を受けるだけで全神経を使い果たしていた。相手の勢いに呑まれじりじりと後ずさつていると、背後に流れている小川に足を取られた。小さな悲鳴と共に、浅瀬へ盛大に尻餅をつく。

「あいたた…」

「ディーナ、大丈夫？」

二人の様子を眺めていたピリポが川辺へ駆けて行き、ディーナに手を差し伸べた。

「ありがとう、ピリポ君」

ディーナは自らの醜態に苦笑しながらピリポの手を取り、立ち上がる。そして今まで剣を交えていた相手へ視線を移した。

「レブロブスさんも、稽古をつけてくれてありがとう」

「…つたく、調子が狂うぜ。素人の女に剣を教えたことなんざねえからな。加減が難しいんだよ」

レブロブスはげんなりした様子で、手にしている剣で肩を叩いている。二人が用いていたのは、稽古の為に拵えた木剣だつた。

次の目的地であるパンデモニウムの街を目指し旅を続けている一行は、その日の旅程を終えて野宿の支度をしていた。その合間を縫つて、ディーナはレブロブスに剣術の指南を請うた。

「そんな俄稽古、やつたつて意味無いだろ」

焚き火にくべる薪を割っているガイウスが口を挟む。

「鎧を着ちまえば、お前はまともに戦えるんだ。一から腕を磨く真似をしなくてもいいじゃねえか」

「うん…そうかもしないけど……」

ディーナは小川から陸に上がり、濡れた上衣の裾を絞つた。そして俯きながら神妙な顔つきで言葉を続ける。

「鎧の力は私の努力で手に入つた訳じやないから、その、何だかずるしてゐみたいで…。一朝一夕にいかないのは分かつてゐけど、少しでもこの力に見合つた強い戦士に近付きたいの」

「それはそれは、御立派なことで」

ガイウスはからかい甲斐があると言いたげに、皮肉めいた笑みを浮かべている。

「まずはその及び腰をどうにかしないとな」

「は、はいっ！」

ディーナは背筋を伸ばし、意気盛んに顔を上げた。

「殊勝な心掛けじやよ。鎧の力を過信していくては、鎧を着る者自身の成長には繋がらん」

焚き火の側の岩に腰掛け、ディーナ達を見守っていたヨハネの声音は柔らかい。

「強さというものは、腕節の強さに限つたものではない。強靭な精神力を備えていることも、その者の優れた能力である。現に、お主は意志の力によつて鎧の封印を解き放つたのじやからな。その意気込みを忘れなければ、己の戦う力も自然と身に付くであろ

う」

「さあさあ、ルピルピちゃん特製シチューができあがりましたよーっ！」

ルピルピが得意気に火にかけた鍋を搔き混ぜ、夕餉の時間を知らせる。鼻腔をくすぐる香りが鍋の周りへ広がった。

「あの、一つ気になつてることがあるんだけど……」

皆が焚き火を囲みながら食事を取つていると、ピリポが口を開いた。

「ディーナは今でも、白き羽なの？」

「私？ えっと……」

彼の隣に座っているディーナは椀から匙を動かしていた手を止め、返答に窮していった。

羽を失つた自分が世の中でどのように位置付けられるのかなど、想像だにしていかつた。

「今のお主は、白き羽でも黒き羽でも無い」
事実を解き明かしたのはヨハネだった。

「言つてしまえばルピルピと同じ、邪道騎士と呼ばれる身分にあたる。白き羽と黒き羽の二項対立的な種族関係からは除外されると考えればよい」「じゃあ、奴隸階級じやなくなつたディーナなら、奴隸を連れていてもおかしくないよね？」

「別段、問題は無いと思うが……」

ピリポの質問の意図を掴めず、ヨハネは小首を傾げる。

「ねえ、僕をディーナの奴隸にしてくれないかな？」

ピリポはディーナに向き直り、のどかな調子で願い求めた。

「ええつ!?

ディーナは仰天し、椀を口につけていたレブロブスとガイウスは中身を吹き出した。

「何寝ぼけたことを吐かしてやがる!?

レブロブスはむせ返りながらピリポを凝視した。

「そんなことできないよ! ピリポ君と支配したりされたりする関係になんて、なりたくない!」

ディーナが勢いよく首を横に振ると、ピリポは叱られた子犬のようにしゅんと俯く。
「そつかあ：君が僕の御主人様になつてくれたら、愛が本當にあるのかどうか、僕にもわかる気がしたんだけどな…」

ピリポがディーナへの隸属を切望する動機は、自らの保護を求めて力のある他者へ頼ろうとする、悲観的な強迫観念によるものでは無いようだつた。ディーナとゼロの間に培われた絆に憧憬し、それを得るための道を彼が考え得る限り自発的に模索した結果だつた。

だが、ピリポと自分が主従関係を結ぶこと自体が理不尽だとディーナは感じた。

「羽が無くなつただけで、ピリポ君と私が同じ人間であることに変わりは無いよ。あなたは私の大切な友達なの。だから、私達の立場に距離を置いたりしないでね!」

「友達…友達かあ……」

ピリポは名付けられた称号の響きを不思議そうに口にしていたが、腑に落ちたのかその表情は晴れやかになった。

「さすがは大邪神の鎧の適合者ね！ 愛だけじやなく、他の七つの大罪である平等や友情までも軽々しく口にできちゃうんだから！」

「うむ、実に興味深い見解じや…」

ディーナの弁がルピルピとヨハネを喰らせていた。

「ところで、ルピルピよ。お主がくれたこの地図なのだが」

食事を済ませたヨハネは、大陸全土を網羅しているという羊皮紙の地図を広げた。

「どうやら粗悪品のようじや。魔法都市リニアの所在地が抜け落ちておる」

「そうでした。お師匠様は牢獄にいらつしやつた時間が長いから、ご存じないのですね

⋮

ルピルピが浮かない顔つきで地図を覗き込み、言葉を続ける。

「リニアは、消滅したそうです。今から二年前のことですわ」

「なつ、何じやと？ 都市が丸ごと消え失せたとは、一体何があつたと言うのじや！」

ヨハネはひどく動搖している。

「その話なら聞いたことがある。火碎流のせいだとか、新型兵器の実験に失敗して大爆

発が起こつたせいだとか、いろんな憶測が飛び交つてたな」
ガイウスが当時を振り返ると、ルビルピは頷いた。

「リニアが滅亡した原因はわからずじまい。都市の領域には今も有毒ガスが発生してるとかで、立ち入ることができないの。あの時は世界中大騒ぎだつたわ：どこの街も壊滅したリニアの救援を行う程の余裕が無かつたから、アンゲルス教団が早々に先遣隊を結成して対処したのよ。結局、生存者は見つからなかつたみたいだけど…」

「なんと嘆かわしい…リニアは高名な学者達が集う、叡智の園であつたというのに」
うなだれるヨハネの姿は憂色に包まれていた。

ヨハネ達の会話を虚心に聞いていると、ディーナの中にある感情が沸き起こつた。初めにそれは、渚に佇む者の足首だけを濡らす波のように、穏やかに彼女の胸へと打ち寄せていた。意識を傾けると、その波は即座に荒々しくなり彼女を飲み込もうとした。この激情のうねりが何であるのか探り当てようとしても、言い表す言葉が見つからない。「ディーナ？　僕が変なことを言つたせいで、気を悪くさせちゃつた、かな…」

溺れる意識を掬い上げたのは、ピリポの声だつた。

「ううん！　ご飯が美味しくて食べすぎちゃつたから、眠くなつただけだよ。お皿、洗つてくるね」

正氣付いたディーナはピリポに微笑むと、身の回りの食器を手早く重ね、立ち上がり

た。

三

荒野で過ごす夜の眠りから、ディーナは目覚めた。

身を起こし、辺りを見回す。満月が空高く浮かんでいるため、夜明けは遠いようだつた。

枯れ草が時折風にそよぎ、焚き火が燃える音だけが聞こえる、静謐な夜だ。しかし、寝付こうとする気がすぐには起きなかつた。夕餉の時間に感じたどよめきが、今も胸の中で残響を続けていた。夕餉の時間には、まだ早いぜ

張り番のガイウスが、退屈そうに欠伸をしながら膝に頬杖を突いて座つてゐる。

「あれ？ レブロブスさんは？」

「見張りを代わつてやつたのに、風に当たるとか言つてふらふら何処かに消えやがつた。

筋肉馬鹿にも、物思いにふけりたい時があるらしい」

ディーナの問い合わせに、ガイウスは火に薪をくべながら淡々と答えた。

周囲に広がる夜陰の中へ目を凝らすと、程近い岩の上に黒い人影が見える。

「私、様子を見てくる」

デイーナは角灯を手にして立ち上がり、他の仲間達の眠りを妨げないように抜き足で焚き火の側を離れようとした。

「得物は必ず持つて行け」

ガイウスに睨まれ、慌てて剣を背負つた。

荒野を進み、人影がレブロブスであると確信できる距離まで近付いた所で、デイーナは立ち止まつた。

レブロブスは岩の上に胡座を組み、黙想していた。角灯の仄かな灯りを受けただけでも、彼の豊麗な肉体から溢れ出る生命力を感じできる。だが彼の眉間にには微かに皺が寄り、深い苦渋の色が浮かんでいるように見えた。その逞しさと懊惱は釣り合いが取れなまま彼に内在し、ある種の芸術的な魅力を醸し出している。

デイーナが声を掛けることを忘れて立ち尽くしていると、彼女の存在に気付いたレブロブスは表情を和らげ、彼女を見た。

「眠れねえのか？」

デイーナは頷く。

「しばらく隣にいてもいい？」

「好きにしろ」

レブロブスの返事には愛想が無かつたが、彼女を煩わしがつてゐるようでも無かつた。

「お前、どういう氣の変わりようだ？ リベイラの神殿じや弱音を吐いてたくせに、随分と戦うことに前向きになつたじゃねえか」

「あの時、レブロブスさんが励ましてくれたお陰だよ。それとね…」

ディーナは微笑を返し、間を置いてから言葉を続けた。

「私なりに考えたんだ。ユダさんを…初めて人を斬り付けたのは、凄く嫌な感触だつた。できるなら、もう二度とあんなことしたくない」

ディーナは渋面を作り、岩に立て掛けている自らの剣を見つめた。

「でも、私達はお尋ね者だし…それに、ゼロを助けるために対立する人達と、話し合いで解決できない場は起くると思う。そんな時、戦う力があつても皆の後ろに隠れたままなんて、もつと嫌。だから、今自分が持つてゐる力を最大限に活かせるようにしたい」

レブロブスは大口を開き、豪快な笑い声を上げた。

「お前にそう決意させたもんが、主人への愛つてか！ 愛のためなら、自分の羽をむしり取ることも、殺し合いだつてできるつて訳だ！ 見上げた根性じやねえか。この世にそなんもんが無かつたとしても、お前は大した奴だよ！」

些細な悩みなど吹き飛ばしてしまうような彼の気強い笑顔は、見ていて爽快だつた。

「馬鹿真面目に愛の存在を信じ続けるお前が、正直、羨ましくなつてきたぜ。俺は：未だに自由つてもんが、ちつともわからねえまだ。なあ、お前は自由つて一体何だと思う？」

「自由…。うーん…ゴルゴダの牢獄にいた私達の逆で、牢屋に入れられずに身体を動かせること？ それだと捕まつていらない人は皆、自由の大罪を犯していることになつちゃうし…何だか頭がこんがらがつてきたよ……」

レブロブスとの問答に、ディーナは苦心しながら考えを巡らせる。

「自分のやりたいことが、誰にも邪魔されずにできる」とかな。だけど、それって…」
ディーナが自らの答えに違和感を持つと、途端にレブロブスの表情が険しくなつた。

「お前の言うことが本当なら、真っ先に裁かれるべきは、好き放題やつてる黒い羽の奴らじやねえか！ 白い羽をさんざこき使い、享楽三昧してゐるあいつらの、どこが自由じやねえって言うんだ!? 罪に値する自由つて、何なんだよ…!」

レブロブスは苦しそうに俯いた。

「一瞬でもいいんだ…真の自由を手にすることができるなら、俺は死んだつて構わない！」

レブロブスの剣幕にディーナが圧倒されていると、彼は決まりが悪そうに薄く笑いを

浮かべた。

「すまねえ。因縁深い土地に戻つてきちまつたせいで、ついカツとなつちまつた」
「そつか、ガイウスさんが、レブロブスさんはパンデモニウムの剣闘士だつたつて話してたね。だから街の名前に聞き覚えがあつたんだ……」

命懸けの旅路を共にしている仲間達の過去を、ディーナは熟知していない。過去を失つている自分が、他人の過去を無理に詮索することについて気が咎めたからだ。

レブロブスが自由を追い求める理由の中に、彼が負つた痛みが潜んでいる気がした。それを癒そうなどとは甚だおこがましいが、何か自分にできることはないかと思つた。
「レブロブスさんはどうして——」

「おい、お前ら」

会話を遮られたディーナが振り向くと、ガイウスが腕を組みながら立つていた。冷然とした眼差しを二人に向けていた。

「お喋りに夢中で気が付かなかつたか？ 隠れて俺達の様子を窺つてる奴らがいる」

ディーナは緊張で身を竦ませたが、レブロブスは苦々しげにガイウスを睨み返した。

「わーつてるよ！ 二人だろ？ 気配を隠し切れてねえ。身構える程の奴らじやねえよ！」

「全然、気付けなかつた……」

ディーナは自らの危機意識の足りなさを恥じた。

「そこにはいるのはわかつてゐる！ こそこそしてねえで、出て来やがれ！」

レブロブスは前方の岩に向かつて怒声を浴びせた。ディーナは手にした剣の柄に手をかけ、彼の視線の先を注視する。

岩陰から現れたのは、二人の白い羽の男達だつた。するとその内の一人がレブロブスの元へと引き寄せられるかのようにふらふらと前へ進み出た。頭髪に白色が混じるその初老の男は、頬が痩け、憔悴しているようだつた。

「レブ……！ 本当に、レブなんだな……！」

男の叫びには、欣喜の響きがあつた。

レブロブスの隻眼が見開かれる。

「お、お前っ！ ダロムじやねえか!?」

ダロムという男は糸が切れた傀儡のように、その場に膝を突いた。

レブロブスはダロムの元へ駆け寄り、その肩に手を回し彼の身体を支えた。がつしりとしたレブロブスの腕の中で、ダロムの体躯はより一層貧弱に見える。

「知つてゐる奴なのか!?」

ガイウスが不審がると、レブロブスはダロムを見つめたまま声を発した。

「こいつは：俺の古巣の闘技場で雑役夫として働いていた男だ。俺がガキの頃から、親

代わりになつて何かと面倒を見てくれていた」

レブロブスの瞳には、旧知との再会の喜びと、その者が変わり果てた姿で目の前に現れたことへの当惑がある。

「ダロム、どうしてお前がこんな所にいるんだ!?」

「俺達は身体一つでパンデモニウムの街から逃げ出して來た。何日も碌に食べてなくて、行き倒れそうなんだ。頼む、食料を分けてくれないか?」

ダロムは縋るような目つきでレブロブスに哀願した。

「わかつた、とにかくこっちに来い!」

そう言うと、レブロブスはためらわずに二人の放浪者を焚き火の側へと導いた。

四

「こんな所でレブに助けられるとはなあ。お前はてつきり、ゴルゴダの牢獄で処刑されちまつたもんだと思つていたよ」

食事を与えられ飢餓状態を脱したダロムの顔つきには、理性が戻りつつあつた。

他の仲間達も目を覚まし、焚き火の近くに腰を下ろしているレブロブスとダロムの会話に耳を傾けている。

「ちよいといろいろあつたのさ。俺達は脱獄して、パンデモニウムの街に向かつてゐるところだ。それよりダロム、パンデモニウムで何があつたんだ？」

ダロムは意氣消沈とした様子で視線を落としながら話し始めた。

「パンデモニウムに、マモンという高利貸しの男がいてな。荒稼ぎをしていたそいつはどうとう、金に物をいわせてこさえた傭兵团を使つて街の領主を殺し、新しい領主になつた。お前が捕まる少し前の話さ。領主にのし上がる程の才覚とその強欲さに、街の住民達は心酔しているんだが！」

深い溜め息を吐いたダロムからは、この世の終わりでも告げるような悲愴感が漂つている。

「取り立てられる税の額が跳ね上がつてなあ。しかも、マモンに破格のみかじめ料を支払える店しか商売ができなくなつて、物価も滅茶苦茶に上がつた。街でまともに暮らしていけるのは、一部の金持ち連中だけになつちまつたのさ！　俺達の主も、マモンに借りた金が返せなくて首を括つちまつた。それで俺達は借金の形に剣奴の競り市にかけられそうになつて、命辛辛街を飛び出して來たんだ。笑つちまうだろ、こんな老いぼれにまで剣闘士をやらせようなんて！」

「そんな領主、俺がぶつ殺してやる！　ダロム、お前達も一緒に来いよ！」

レブロブスは領主への憤りのために顔をしかめ、気炎を揚げた。しかし、ダロムは彼

の誘いに対して諦観を持ちながら首を横に振つた。

「いや…遠慮しておく。何だか、お前達は訳有りの一団みたいだな。俺達のような弱い奴らは、きっと邪魔になるだけだ。このままリベイラまで逃げ延びることができたら、どうにかして新しい主を見つけようと思う」

俯いていたダロムは顔を上げ、レブロブスを気遣うような眼差しを向けた。

「気を付ける。今のパンデモニウムには、金のためなら何でもやる暴徒とゴロツキ共しかないねえ。それと…闘技場にあいつが戻つて来ただぞ……」

ダロムの言葉に、レブロブスは一瞬、色を失つた。

「あの野郎、生きていやがつたのか……！」

見る間に、レブロブスの形相が夜叉に取り憑かれたか如く変貌する瞬間を、デイーナは目にした。

「闘技場には近付くな。それじや世話になつた、俺達はそろそろ行くよ」

ダロムが立ち上ると、ヨハネは手頃な大きさの皮袋に食料を詰めて彼に手渡した。

「旅の無事を祈つておるよ」

「あんた、黒い羽のくせに風変わりな奴だなあ！ 有り難く貰つとくぜ」

皮袋をしつかりと背に括り付け、ダロムはレブロブスに向き直つた。

「レブ、最後にお前の顔を見られてよかつた。競り市にかけられそうになつた時、俺はつ

くづく生きてることに嫌気が差して、いつも死んで楽になろうかと思つた。だが、お前のことを思い出して、街を逃げ出す決心がついたんだ」

「俺のことを？」

「あの生き地獄のような闘技場の中で、お前には何が何でも生き抜いてやろうという気概があつた。お前を見ていると、いつも胸がすく思いだつたよ。こいつはいつか、どえらいことをやってのけると予感していた。だからお前が闘技場を脱走した時、やりやがつた！」と俺はほくそ笑んでいたのさ。お前はついに、自由つてもんを選び取つたんだ」

レブロブスは苦笑いをしながら立ち上がつた。

「何言つてんだよ。俺の脱走劇があつという間に終わつたのはよく知つてるだろ。自由なんて、雲の上だぜ！」

ダロムはそれ以上多くを語ろうとはせず、柔らかい微笑みを浮かべるだけだつた。今 の彼には、一度は死の誘いに身を委ねかけた者だとは微塵も感じさせない清々しさがあつた。

「達者でな……レブ」

ダロム達が消えて行つた薄闇の奥を、レブロブスはしばらく名残惜しそうに眺めていた。

「お前らとの旅はここまでだ。俺には寄る所ができちまつた」

レブロブスの表情には確固たる決意が漲つている。

ディーナは彼の側へ歩み寄り、じつとその巨体を見上げた。
 「さつき話していた闘技場に向かうつもりなんだよね？ 私も一緒に行く」
 「馬鹿野郎！ お前はマモンとかいうふざけた領主を問い合わせに行くんだろ！？ 俺の用事に構つてる暇はねえはずだ！」

凄味を利かせるレブロブスに怯むこと無く、ディーナは凜と食い下がる。

「だつてレブロブスさん、すぐ思い詰めた顔してると…！ 心配なの！ それに闘技場に行くつてことは、危険な戦いをするかもしれないんでしよう！？」

二人が互いに譲らず睨み合つていると、ヨハネが一つ大きな咳払いをした。
 「レブよ、お主がダロムと話している間に、もう一人の白い羽の男からこんな話を聞いた。パンデモニウムの住民は、週末に闘技場で開かれる賭事に必ず参加し、稼いだ金を領主に納めなければならない。領主は視察と称して度々闘技場を訪れ、一緒になつて博打に興じているそうじや」

「今日はちょうど週末！ 闘技場に行けば、守りが堅い領主の館に攻め込むよりも、簡単に領主に会えるかも知れない、というお考えなのですね！」
 ルピルピが嬉しそうに手を打つた。

「目的地が同じなら、問題無いよね」

レブロバスをまっすぐに見つめるディーナの顔を、光が輝かす。乳白色の空を鮮麗な
黄金色に染め上げる、朝焼けの光だつた。

レブロバスは眩しげに目を細め、嘆息を漏らした。

「お前みたいな底抜けのお人好し、長生きできねえぞ。もういい付いて来るなら勝手
にしやがれ」

五

パンデモニウムの市街地と件の闘技場は、間に丘を一つ隔てた位置関係にある。一行
の進行方向からは、市街地より手前に闘技場はあつた。

闘技場に辿り着き、ディーナは仰け反るような姿勢でその巨大な建造物を仰ぎ見た。
堅固な石造りの壁が、城塞のように広大な敷地を円形に取り囲んでいる。壁の中では、
観客達の喚声とおぼしき轟音が反響していた。

ディーナ達が立っているのは、博打の参加者達が受付を済ませるための広場である。
賭けで所持金を使い果たしたと地団駄を踏んで悔しがる者、試合の勝者となる剣闘士の
予想紙を巧みな宣伝文句で売り込む者。広場には闘技場へ賑わいをもたらす人々が溢

れている。

「僕、博打なんてやつたことが無いけど…お祭りみたいで楽しそうだね」

ピリポは広場の雰囲気に些か浮かれ、珍しそうに辺りを見回している。すると彼は、受付カウンターの隣に立てられている表示板に目を留めた。そこには試合に出場する剣闘士の名と、その者の勝利を当てた際に得られる配当金の倍率が書かれている。

「ピリポ、間違つても勝者投票券を買うなよ。こここの博打は、配当金からとんでもねえ額の寺銭が差し引かれる。客は勝とうが負けようが大損する仕組みなんだ。特にお前なんか、いいカモにされるのが目に見えるぜ」

レブロブスに釘を刺され、ピリポは肩を窄めた。

「そなんだけ…ちよつとだけ、やつてみたかつたなあ…」

「てめえら、客じやねえのか!? 冷やかしならとつとつ失せろ、この貧乏人共!」

カウンターにいる受付係の男が、レブロブス達の会話を聞き付けて罵り声を上げた。

「そうだ、俺達は客じやねえ！ こんなくだらねえことに、びた一文だつて賭けられるか！」

レブロブスは片手でカウンター机を強く叩き、受付係へ詰め寄った。

「俺は次の試合の出場選手としてここへ来た！ こいつらは俺の介添えだ！ さあ、俺を選手控室に案内しろ！」

受付係はレブロブスを見るや否や、平静を失った。

「レ、レブロブス!? ど、どうしててめえが生きてここにいやがる!? それに今日の大会はさつき予選が終わつて出場選手は決まつた——」

「特別枠で出場させるんだよ、この俺を! 最強の白き羽が舞い戻つたんだ:客寄せにやあ十分だろうが! 早くしねえところでひと暴れして大会を中止させるぞ! 手始めにお前から締め殺してやろうか!?」

レブロブスから放たれるのは、視線だけで相手を死なせることができるような禍々しい殺意だった。

怯え切つた受付係は、レブロブスの出場について闘技場支配人の了承を得る必要があると、その場から矢のような速さで支配人の元へ飛び出して行つた。

「待つて、一人で戦うつもりなの!?」

ディーナがレブロブスの独断に非難の意を込めて問い合わせると、彼はきつぱりと言ひ放つた。

「闘技場のルールは、一対一の個人戦だ。お前達の出る幕はねえ。客席に紛れて、領主探しに集中してろ」

「言われなくともそうするさ。こんな目立つ所で、脱獄囚の俺達が仲良く揃つて戦うなんざ、愚の骨頂だ」

ガイウスの口調には日頃と変わらぬ刺があつた。

「死んだら墓石くらい建ててやる。気兼ね無く行つてこい」

「もー、素直に頑張れって言つてあげればいいじやない！」

ルピルピがガイウスに唇を尖らせていると、受付係がカウンターへ駆け戻つた。

「レブロブス、出場の許可が下りたぞ！　すぐに本選が始まるから、選手のお前は控室に急げ！　わかつてゐるだろうが、大会へのエントリーはもう取り消せねえぞ。大会を制覇するか、ぶつ殺されるかのどつちかだ！」

「へいへい。そんじや、行つてくるわ」

レブロブスは気晴らしの散歩にでも赴くような悠長な歩みで、受付係と共に闘技場内部へ進み始めた。

「私、いつでも戦えるようにしておく！　だから絶対、無茶なことはしないで！」

ディーナの必死の呼び掛けに、彼は背を向けたまま開いた片手を上げて、薄暗い通路の先へ姿を消した。

六

「御来場の皆様、お待たせいたしました！　闘技大会本選、第一回戦を開催いたします！」

熾烈な予選を勝ち抜いた八名の中から、第二回戦へ進出する四名が決まりますが、ここで急遽、八人目の出場選手が交代の運びとなりました！」

闘技場内の階段状になつた観客席の最前列で、司会の男が拡声器を手に名調子を響かせる。

「飛び入り参加となつたその選手の名は、ゴルゴダの煉獄から奇跡の生還を果たした最強の白き羽、レブロブス!!」

観客達は予期せぬ展開に色めき立ち、沸き起くる喚声は大地を揺らすようだつた。柄の悪い観客が、聞くに堪えない下品な言葉遣いで、レブロブスに声援を送つてゐる。

渦巻く熱気を氣にも留めず、アリーナに立つレブロブスは空を見上げた。そびえ立つ闘技場の壁が、視界の中で紺碧の空を橢円形に縁取つてゐる。囲われた空の中を、鷹か鶴か、大型の鳥が滑空していた。その鳥は闘技場の上空を一回、二回と旋回し、悠々と羽ばたきながら彼方へ飛び去つた。

「そうだ……俺はいつもこの空を見ていた……」

ゆつくりと頭を下げ、対戦相手を見据える。目の前に立ちはだかるのは、双剣を携える、線の細い若い白羽の男であつた。

「この闘技場の戦士に、脱獄囚も異端者も関係無い！　ただ我々を滾らせ、めくるめく死闘を見せてくれば何でもいい！　さあ、決勝戦へ駒を進め、今大会王者、不発弾のゼ

ファルへの挑戦権を獲得するのは誰なのか!?」

司会が高らかに試合の開始を告げた。

試合が始まつてすぐ、レブロブスは相手の戦意が挫けそうになつてゐることに感付いた。我武者羅に振り回される二刀は空を切るばかりで、レブロブスに命中する気配は無い。剣を構える姿も隙だらけだつた。

「てめえっ、びびつてんのか!? そんな弱腰でよくここまで来れたな！ つまらねえ戦いをしてると、客席から野次と一緒に矢でも飛んで来るぞ！」

相手と距離を空けながら、レブロブスは声を荒げた。

「…お前のせいで、俺の計画は台無しだ……」

獣が威嚇するような低い声が、双剣使いの男の口から漏れた。

「予選を通過した時、優勝の最有力候補は俺だつた。闘技場の支配人達は、この大会に優勝すれば俺を剣闘士の身分から解放すると約束していたんだ！ それなのに…お前が出席したせいで、支配人達の関心はお前に移つた！ お前とゼファルをぶつけた方が客が入ると…俺との約束は反故にされた!!」

双剣使いは目を剥いて怒りを露にする。

「そんな約束、端からあいつらは守る気なんて無かつたんだ！ お前に発破をかけるための甘言だつたんだよ！ 少し考えりやわかるだろう?！」

レブロブスは双剣使いを弄んだ者達へ溢れ出る憤怒を、歯を食いしばつて抑え込んだ。そして戦斧を振りかざし、彼との距離を一気に詰める。

レブロブスが振り下ろした一撃を、双剣使いは恐れ慄きながら刃で受け止めた。レブロブスは斧の柄を握る両腕の力を加減している。

「おい、よく聞け！」

声を潜めて双剣使いに鋭い眼差しを向ける。

「客席に俺の連れが紛れ込んでる。そいつらと騒ぎを起こしてこの場を混乱させれば、逃げ出せるはずだ。お前も力を貸せ！」

そう言い終えた後、レブロブスは自分自身の言葉に耳を疑つた。

眼前にいる哀れな剣闘士を、自分が救いたいと思つたことに驚愕した。そして、知らぬ間に自分がディーナ達の力を心頼みにしていたという深意に気付かされた。弱肉強食という世界の原理の縮図であるこの闘技場で、自分は孤高に戦い抜いていた。そんな自分が他人の命を気に掛け、他人の力を頼る行為に及ぶなど、信じられなかつた。

「……ふざけるな」

双剣使いの瞳に希望の光が灯ることは無く、彼は忌々しげにレブロブスを睨み付けた。そして、渾身の力で彼の斧を撥ね除けた。

「ただの奴隸が束になつたところで、何ができるつてんだ！　金も権力も持ち合わせて

「いない俺達がここから逃げ出したって、そこからどうやつて生きていきやいいんだ!?」「逃げた後にいくらでも考えりやいいじやねえか！　自由さえ手に入れれば、どうとでもなる！」

「自由だと!?　そんな世迷い言じや、腹は膨れねえ！　支配人達は、一生遊んで暮らせるだけの金も、女も、俺が望むものを全て与えてくれるはずだつた！　お前だつて結局、食い扶持に困つてここに戻つたんだろう!?」

「違う！　俺は…ゼファルの野郎を殺すため、立ち寄つただけだ！」

レブロブスは悲痛な面持ちで叫んだ。

「思い出せ！　調教師に死ぬ程殴られた夜を、憎くもねえ相手をたたつ殺す試合を、お前だつて今まで耐えてきたはずだ!!　その辛抱強さを何故、ここを出て生きるために使おうとしない!?　助かる道があつてもなお、お前は黒い羽共へ服従すると言うのか!?」

「うるせええつ！　俺を助けたいなら、黙つて死にやがれつ!!」

双剣使いは奇声を発し、レブロブスに斬り掛かる。

説得を諦めたレブロブスは斧を振るい、彼を剣ごと叩き伏せた。双剣使いの身体と剣は両断され、地面に転がつた。白い羽根が辺りに舞い上がり、地面に落ちて血を吸つている。

「畜生!!」

顔を歪め、レブロブスは咆哮した。

「白い羽はどこまでも虐げられ、利用される……！　俺達が自由になるには：死ぬしかねえってことなのかよ……!?」

「牢獄にいた間のブランクを感じさせない強力無比の一撃が、相手を屠りました！　レブロブス、二回戦進出です!!」

司会の熱烈なアナウンスに、レブロブスを囲む喚声の輪が一層激しくなる。

レブロブスが双剣使いの死体を見下ろしながら立ち尽くしていると、数人の白い羽達がアリーナに姿を現した。彼らは慣れた手つきで地面の肉塊を回収し、その場を掃いている。

『お前はついに、自由つてもんを選び取ったんだ』

ふと、ダロムの微笑みが蘇った。

「ダロムの奴、好い加減なことを言いやがつて……！　俺がいつ、自由を手にしたつてんだ……」

レブロブスは眉を顰めながら咳き、振り返ると、アリーナから選手控室に続く通路に向かつて歩き始めた。

ディーナはレブロブスを探して、闘技場内の通路を急ぎ足でさ迷っている。

レブロブスは怒涛の勢いで闘技大会本選の二回戦と三回戦を勝ち進み、大会王者との決勝試合を残すばかりとなつた。試合までの待機時間が始まつてしまらく経つても、レブロブスはディーナ達が待つ選手控室へ戻つてこなかつた。ディーナは控室に止まつていても気持ちが落ち着かず、彼と入れ違いになることも承知で部屋を出た。

アリーナで戦うレブロブスの姿は、雄々しく、軍神のような高潔さがあつた。しかし、戦斧を打ち振るう毎に彼の中には迷いが生じ、それに心を擦り減らしているかのように、ディーナには見えた。このままでは、この大会が終わつた時、彼に息衝く尊さが失われてしまいそうな気がした。

通路を闇雲に歩き回つていると、視界が開け、広間に辿り着いた。その広間は部屋の中央部が柵で囲まれており、さらにその柵の全周を取り囲むように長椅子が置かれている。

広間にはただ一人、レブロブスが佇んでいた。戦いに赴く時とは打つて変わつた空虚な瞳で、柵の中を見つめている。

「レブロブスさん、ここは…？」

ディーナはレブロブスの隣に立ち、広間の正体を問うた。

「ここは剣闘士となるべく連れてこられた奴隸達の競売場だ。俺も赤ん坊の頃にここで競りにかけられたと、ダロムに聞かされた」

ディーナは顔を引きつらせ、広間を見渡した。

レブロブスは吐き捨てるように言葉を続ける。

「白い羽だつたお前にとつても、胸糞悪い場所だろう？　俺は何度もここを燃やしちまいたいと思った。だがそんなことをしたつて、何も変わりやしねえ。競売場の位置が変わるだけで、剣闘奴隸がいなくなる訳じやねえんだ」

そして彼は表情を曇らせ、か細い声を発する。

「生きてる間、俺達が自由になることも、無いのかもな……」

「やあつとわかつたか！　俺達剣闘士は見せ物として死ぬまで戦い続ける定めなんだよ

!!

蔑みを含んだ男の声が広間に響いた。二人の背後に、薄笑いを浮かべた白い羽の男が立っていた。神経を逆撫であるその笑みが、首筋から頬にかけて刻まれた刺青の形を歪めている。

「しつかしよお、お前も本当に懲りない奴だよなあ……」

男は込み上げる嘲笑を堪えることに苦労しているようだった。

「今はその女に慰めてもらつてゐるのか？　そこまでして自分の子孫を残したいのかよ

!?

「ゼファル!!」

レブロブスの怒気が烈風の如く男に向かつて猛り狂う。

「その減らず口、二度と叩けねえようにしてやる!!」

「レブロブスさん、駄目!!」

ゼファルと呼ばれた男に組み付こうとしたレブロブスの前に立ち、ディーナは彼を押し止めた。

「闘技場では、試合以外での暴力行為は禁止されてるんだよね？ 発覚したら、処刑されるって聞いたよ：挑発に乗らないで！」

レブロブスは立ち止まり、射るような視線をゼファルに飛ばしている。

「そうだぜえ、俺達の決着は決勝戦の場で華々しくつけようや！ 俺は今、その決勝戦のことで大事な話があつて来たんだ」

ゼファルはレブロブスの殺気に毛ほども動じること無く話し続ける。

「レブロブス！ 噂によれば、お前の付き添いでここに来てる奴らは、腕に覚えがあるらしいな。闘技場の運営本部はド派手な殺し合いを御所望だ。そこでだ、決勝戦は五対五のチーム戦になつた！ お前を入れて五人、出場選手を決めろ！ 俺も選りすぐりの猛者を揃えてお出迎えしてやるよ！」

「ふざけるのも大概にしろ！　他の奴らは関係ねえ！　そんな要求、呑めるか!!」
目の色を変えて抗議するレブロブスに向かい、ゼファルは舌を出しておどけて見せた。

「ばーか！　要求じやねえ、主催者が下した決定事項なんだよ！　従わなければ、全員、問答無用で処刑されるだけだ！　安心しろ、乱戦の中だろうと、お前は俺がきつちり殺してやるからよお!!」

ゼファルは卑しい笑い声を上げながら、競売場を立ち去った。残されたディーナとレブロブスを緊迫した沈黙が包む。

「あの野郎：許せねえ……！」

怒りに身を震わせるレブロブスを宥めるようにディーナは話し掛ける。

「私も一緒に戦うよ。いつたん、控室に戻ろう？」

レブロブスは拳を握りながら僅かに首を縦に振った。

八

「…すまんな。とんだ厄介事にお前達を巻き込んでしまった」

選手控室の椅子に腰掛けるレブロブスは、ゼファルとの応酬を経て、気力を消耗して

いるようだつた。

「まつたくだ。何が楽しくて、俺達がお前の喧嘩に肩入れしなきやいけねえんだ」

部屋の壁に背を持たせ掛け、ガイウスが顔を顰めながら腕を組んでいる。

「試合に必要な人数は五人だ…。お前は出なくていい…」

いつものように彼の嫌みへ噛み付く素振りも見せず、レブロブスはうなだれた。

ガイウスが腹立たしげに舌打ちをする。

「それができねえから俺は機嫌が悪いんだ！ そこの馬鹿女が、勝手に俺を選手としてエントリーしちまつたんだよ！」

「酷いよルピルピさん…どうして僕をエントリーしちゃつたの？ 僕なんかより、ヨハネさんの方が絶対戦力になるのに……」

ピリポは瞳を潤ませながらルピルピに抗しているが、当の本人はあつけらかんとしている。

「何言つてるのよ。こんなことくらいでお師匠様のお手を煩わせる訳にいかないでしょ！」

心配しなくとも、鎧を着た私とデイーナがいればお茶の子さいさいよ！ それに、致命傷以外の怪我なら私が魔法で回復してあげるから！」

「僕…あんなに強そうな人達と戦つて致命傷を負わない自信が無いよ……」

「落ち着くのじや、ピリポ。いざとなれば、わしが客席から魔術を使つて助太刀しよう」

哀感を漂わせるピリポを励ますようにヨハネが声を掛けた。そして、彼の視線はピリボからレブロブスへと移される。

「して、レブよ。どうやらお主と闘技大会の王者ゼファルとの間には、浅からぬ縁があるようじゃな。無理にでも話してくれとは言わんが——」

控室にいる者達の注目がレブロブスに集まる。レブロブスは俯いたまま、静かに口を開いた。

「あいつは俺の右目の光を奪い……俺の妻にあたる女を殺した」

ディーナは息を呑んでレブロブスを見つめる。

「俺達剣闘士は、競走馬と同じだ。剣闘奴隸の飼い主である黒い羽共にとつて、試合に勝ち続ける強い剣闘士を所有することが、権力の誇示を意味する。さらに奴らは、剣闘士の能力に生まれが影響すると、俺達の血統に甚くこだわってるのさ。種馬の務めとして、俺にも女があてがわれた。そして女は俺の子どもを身籠つた」

自らの過去を、レブロブスはまるで他人事のように抑揚なく話している。

「生まれてくる子どもが、俺と同じように虐待まがいの調教を受け、金持ちの道楽のためだけに殺し合いをさせられ、この闘技場の堀の中でのた打ち回りながら一生を終えるのかと思うと…憐れでしようがなかつた。それで俺は女を連れ、闘技場を脱走した。…結果はお前達の知るとおりだ」

彼の話を聞きながらピリポは再び涙ぐんでおり、ガイウスは腕を組んだまま無表情に天井を見上げている。

「俺達が脱走したのは、俺がゼファルとの試合を目前に控えている時だつた。戦闘狂の奴は、試合を放棄した俺が気に食わなかつたらしい。奴は俺達の搜索隊に加わり、異様な執念で俺達を追い詰めやがつた。女は奴に殺され、自由を口にした俺はゴルゴダの牢獄にしよつぴかれた」

レブロブスがしばし口を閉ざし、控室は沈黙に浸つた。そして彼は気を整えるように息を吐き、言葉を続ける。

「不運な女だつたんだ…。よく知りもしねえ男の子どもを孕まされた拳句、その男のせいで、自分の死期が早まつちまつたんだからな。ゼファルに斬り裂かれ、事切れる寸前に俺を睨んでいたあいつの目が：忘れられねえ。さぞかし俺が憎かつただろう……」

遠い目をしているレブロブスの声が、微かにだが震えていた。

「牢獄で死ぬのは当然の報いだと思つた。だがそこで…腹の底から愛なんかを信じている馬鹿に、俺は出会つた」

レブロブスは顔を上げ、その隻眼にデイーナの姿を映した。デイーナは驚き、ただ呆然と視線を交わしている。

「お前を見てると、何だかな…俺ももう一回、馬鹿をやつてもいいんじやねえかと思つた

んだ。あの女と俺の子どもが終ぞ得ることができなかつた自由つてやつをもう一度、追い求めてみようつてな」

「がたいに似合わず、しおらしいことを言うじやねえか」

ガイウスが堪え切れずにくつくつと笑い出した。

「お前の間抜けつぶりがよくわかつて、面白かつたぜ。その礼だ。次の試合、勝たせてやる」

「…頼むぜ、相棒」

レブロブスが弱々しく皮肉混じりの笑みを湛えると、闘技場の衛兵が控室に現れ、ディーナ達にアリーナへの移動を命じた。

九

「今まで運がよくて生き残つてこれたけど…今日こそ死んじやうかもしれないなあ…」

アリーナと繋がつて いる扉の前の通路で、矢筒を背負つた暗い表情のピリポがしみじみと独り言ちた。

「運だけじやなくて、ピリポ君自身が強いからここまで来れたんだよ。頑張ろう。レブ

ロブ・スさんになつて、生きてここを出よう」

ピリポを力付けながら、ディーナは自らの戦う勇気も奮い起こした。そして身体の奥底から不思議な温もりの漲溢を感じたかと思うと、太陽の神殿で見たものと同じ白い光が全身から放たれた。光が収まると、ディーナは白銀の鎧に身を包んでいた。

「本当に、鎧が現れた……」

ディーナは啞然としながら鎧を眺めたが、すぐに表情を引き締め、麻の紐を取り出し髪を後頭部で一つに結い上げた。

扉が開かれ、通路に光が差し込む。アリーナに足を踏み入れた、ディーナ達を、ゼファルを含めた五人の白い羽の男達と、場内に割れんばかりに轟く観客達の喚声が待ち受けていた。

司会は観客達の興奮を代弁するかのように声を弾ませている。

「ついにこの時がやつてまいりました！　今回の試合は闘技大会史上初のチーム戦です！　王者のゼファル率いる歴戦の勇士達に、最強の白き羽であるレブロブ・ス率いる挑戦者チームが挑みます！　相手チームの最後の一人の息の根を止めるまで、この試合は終わりません！　それでは、驚天動地の闘技大会決勝戦、開始!!」

ディーナは向かい合う剣闘士達の一人から、悪寒が走るような怪しい視線を感じた。

「女だ……いい女が、二人もいる……」

その男は濁つた沼のような虚ろな瞳で、舌なめずりをしながらディーナを見ている。

「ああ、早く……斬り刻んで、色っぽい声で鳴かせてやりてえ……!!」

そう叫ぶと、男は剣を片手に、ディーナを目掛けて走り寄った。

ディーナが剣を抜いて男を迎撃とうとすると、目の前で強固な拳が男の顔にめり込んだ。男の身体は吹き飛び、アリーナに平然と佇んでいるゼファルの足元に倒れた。

「部下の躰がなつてねえぞ、ゼファル！ 何が選りすぐりの猛者だ！」

男を撃退したのは、レブロブスの握拳だった。燃え盛る闘魂をこめてゼファルを睨み付けていた。

「どこがおかしい？ 己の欲望に忠実な、最高のクズ共じやねえか！」

ゼファルは足元で痙攣している男に一瞥もせず、競売場でも見せた挑発的な笑みを返している。

「俺はゼファルをぶちのめす…… 残りの奴らはお前達に任せた」

レブロブスは戦斧を肩に担ぎ、ディーナ達の側を離れ単身ゼファルへ迫った。入れ替わるように、大金槌を持つた巨漢がルピルピの方へ突進してくる。鎧の力の存在を知らない相手チームは、女であるディーナとルピルピを弱者と判断し、真っ先に標的にしているようだつた。

「おいデブ。てめえの相手は俺だ」

大金槌の男の行く手をガイウスが遮る。男は攻撃目標を変えて、槌をガイウスへ撃ち下ろした。その一撃は彼を仕留めること無く、土煙を上げただけだった。

「遅い！劍奴のくせに肥え過ぎだな」

身を躰したガイウスは、男に再び槌を振り被らせる隙も与えず、無防備な背中を槍で貫いた。

「なーんか、拍子抜け！ レブがゼファルつて人を倒しちゃつたら、勝負ありじやない！」

ルピルピが物足りなさそうに小首を傾げ、鎧を削っているレブロブスとゼファルを見遣つている。

壮絶な斬り合いだつた。レブロブスの戦斧が、鍛え抜かれた筋肉によつて目にも留まらぬ速さでゼファルへ打ち込まれている。ゼファルが使用している槍の柄はいくつも棍棒の中に鎖を仕込んだ多節棍のようになつており、棍棒の一本一本が生きているかのように空中を這い回つて、斧の斬撃を跳ね返していた。レブロブスの攻撃の僅かな隙を狙い、ゼファルがヌンチャクの要領で柄の部分を振るう。遠心力によつて破壊力が増しているその打撃は、一度でも当たれば勝敗の決め手になることが明白だつた。レブロブスは驚くべき反射神経で上体を後屈させ、凶器の猛撃を避ける。

「素晴らしいぞ、レブロブス！ やはりお前の肉体は、戦い続けるためだけに創られた、

至高のものだ！　あの時は女房を庇いながらだつたから、全力が出せなかつたんだろう！？」

攻撃の手を緩めること無く、ゼファルが喜色を浮かべている。

「この闘技場にいればお前の剣闘士としての名誉は揺るがないものになつたというのに、なぜだ？　なぜお前は、足手まといにしかならない女を連れて脱走するなんて馬鹿げた真似をしたんだ？　自分の優秀な遺伝子を引き継いだ子を、独り占めしたかつたのかあつ？！」

「俺は…否応なしに俺と関わらされたあの憐れな女と、生まれる前から碌でもねえ生き方を課せられていた俺の子どもに……自由を、やりたかったんだ！！」

レブロブスが真横に振り抜いた斧の斬撃を、ゼファルは空中で身体を回転させ躲し、彼との距離を取つた。

「そうだつた、そうだつた！　血塗れの女房を抱きながら、お前は同じように喚いていたなあ！」

痛ましいレブロブスの叫びを、ゼファルは嘲笑う。

「だが、お前の望みは叶えられたじやねえか。死が俺達に自由をもたらす。奴隸である俺達が自由を手にするのは：道具としての役割を終えて、壊れる瞬間だけなんだよ！」歯を剥き出し、その目を爛々とさせ、ゼファルはレブロブスに相対している。

「お優しい俺が、お前にもとびきりの自由を与えてやる」

ゼファルが片手を上げ、指を鳴らした。すると、レブロブスの側に倒れていた、彼に顔を潰された男が突如として起き上がり、彼を羽交い締めにした。

レブロブスが男を振り解こうとした途端、爆音と爆煙が彼を覆い尽くした。

「レブロブスさん!」

ディーナが悲鳴を上げるように彼の名を呼ぶ。

煙が風に飛ばされ様子が分かるようになると、レブロブスに絡み付いた男は影も形も無く、無数の肉片が地面に散らばつていてだけだった。レブロブスは己と飛散した男の血に全身が染まり、その場に膝を突いて倒れた。

「あ、あんまりだ……仲間を爆弾にして、自爆させたんだ！」

青ざめた顔のピリポを、ゼファルが鼻で笑う。

「仲間だあつ!? こいつらは決勝を盛り上げるための、ただの癪癩玉みてえなもんだ！ 気をつけた方がいいぜえ、俺が仕掛けた不発弾が、いつどこで爆発するかわからねえからなあ!!」

ルビルピがレブロブスの元へと駆け寄り、戸惑いながら怪我の具合を確認する。

「助かるかわからないけど、治療するわ！ 時間稼ぎ、お願ひ！」

レブロブスの傍らに膝を折り、ルビルピは精神を統一して、魔術の詠唱を始めた。

「おい、泡を食つてないで戦え」

動搖しているディーナの心を見透かし、ガイウスが戒める。

「この呪符が爆風で飛ばされて來た。恐らくさつき爆発した男に取り付けられていたものだ…。俺が殺したデブにも、針金で直接背中に縫い付けられていたのを見たから、これが起爆装置だろうな。残りの手下にも十中八九、付いてるだろう」

血の付着した一枚の札をディーナに見せながら、ガイウスは隙を見せぬようにゼファルへ鋭い眼差しを向けている。

「見たところ、爆発の威力は、他の味方を巻き添えにしないためか、俺達を苦しませるためかは知らんが、多少抑えてある。相手に掴み掛かられないようにながら、背後を狙つて殺るぞ」

ゼファルの策略にはまつたレブロブスの姿に動搖すること無く、彼は冷徹に戦況を分析していた。

ディーナは目を見開き、声を震わせる。

「それじゃあ、あの人達は…命を握られて、無理矢理戦わされているのかもしれない！」

「舐めたこと言つてんじやねえ！ 躊躇してたら俺達がお陀仏だぞ！」

試合が始まつてから今まで冷静だつたガイウスの口振りに、苛立ちが籠もる。そのま

ま彼は、襲い掛かってきた剣闘士に応戦するため、ディーナの側を離れた。

もう一人の剣闘士が、詠唱中のため身動きが取れないルピルピと瀕死のレブロブスを狙い、走り来るのが見える。ピリポが放った矢が、その剣闘士の片肺を確かに潰した。にも拘らず、その勢いは衰えない。

『戦う力があつても皆の後ろに隠れたままなんて、もつと嫌』

敵への憐れみのために屈服し殺されるのか、仲間のために憐れむ敵へ死神の鎌を振るうのか。酷薄の選択が、ディーナの決意を試している。

「私は……！」

己の剣が死を振り撒くようになることが恐ろしかった。だが、それよりも。

『この世にそんなもんが無かつたとしても、お前は大した奴だよ』

レブロブスの頼もしい笑顔が永遠に失われることの方が、怖かつた。

剣を強く握り直し、アリーナを疾走する。剣闘士はルピルピに向かつて斬り掛かろうとしていた。

彼が味わう苦痛を最小限に止めたい。そう祈りを込めてディーナが剣闘士の背後を通り過ぎると、剣闘士の首が胴体から離れ宙に舞つていた。

「なんて速さだ……！」

自らの対戦相手を打ち破つたガイウスが、閃くような太刀筋で剣闘士の命を刈り取つ

たディーナの姿に目を見張っている。

ルピルピとレブロブスを背にしながら、ディーナは剣を構え、ゼファルと対峙した。

「お前か…マモン様が言つていた、妙な力を持つ騎士というのは！」

ゼファルは值踏みをするかのように念入りにディーナを見つめている。

「お前のように力を持つ者が、なぜわざわざ徒党を組んでいるんだ？ そこに横たわっている無様な男を庇い立てして、何の益があるってんだよ!?」

「無様なんかじやない!!」

ディーナはゼファルを睨め上げ、叫んだ。

「レブロブスさんは黒い羽の人達の支配に屈しないで、奥さんとお子さんのために闘技場を脱出する選択をした！ 二人が亡くなつたのはレブロブスさんのせいじやないのに…それを自分の責任として受け止めて、現実に立ち向かつてる！ あなたにこの人の生き方を笑う資格なんて、無い!!」

その時、意識を失つていたレブロブスの隻眼がうつすらと開かれた。

「…選択…責任…？」

始めは焦点が定まつていなかつた彼の瞳にたちまち生気が蘇り、それは極限まで見開かれた。

「ちよつと！ まだ動いちや駄目！ あなた、死にかけてたのよ!?」

治療を終え、うろたえるルピルピの制止を振り切り、レブロブスは力強く地面を踏み固めて立ち上がる。

再起したレブロブスの表情には、何か重要なことを悟つたためか、高邁な重々しさがあつた。

「ここを出ると決めた時……俺の中にあつたものは、自由を求める意志、それだけだつた……。なんてこつた……俺は既に自由だつたんだ……!!」

レブロブスはディーナの側へ近付き、労うように彼女の肩へ手を置いた。

「俺がヘマしたせいで面倒を掛けたな。もう、大丈夫だ」

彼は端然とディーナの前へ進み出て、再びゼファルと向き合つた。

ゼファルはレブロブスの強靭さを迎え入れ、喜んでいるようだつた。

「やけにすつきりした顔してるな。一度あの世で神のお恵みでも施されてきたか？」

「この闘技場じや、毎日多くの剣闘士が死んでいく……。神つて奴は、俺みたいな極悪人まで救つてくれる程暇じやねえだろう。俺は自力で立ち直つたんだ……!!」

ゼファルが嘲笑を浮かべたまま槍を構え、レブロブスへ肉薄する。

「お前の言うとおり、俺は死ぬまで戦い続ける！　だがそれは俺の自由のためだ！　闘

技場の奴らとじやねえ……この糞つたれな世の中と、俺は戦い続けてやる!!」

ゼファルが放つた電光石火の棍を、レブロブスは避けること無く片手で掴み取り、彼

の動きを一瞬封じた。その一瞬、ゼファルは硬直せざるを得なかつた。爆発が起ころる前のレブロブスには宿つていなかつた胆力と威厳が、ゼファルへ本能的に危険を察知させた。それは恐らく、彼が生まれて初めて感じる恐怖であつた。

その気骨から繰り出される会心の刃が、ゼファルの胸に直撃する。彼は血しぶきを上げながら、乱れ散る棍と共に地面に倒れた。

十

「あーあ、終わっちまつた……」

アリーナに広がる血溜まりの中で仰向けになりながら、ゼファルは闘技場の空を眺めている。先程まで彼の中に菓食つていた狂氣は消え失せ、穏やかな表情を見せていた。レブロブスは死にゆくゼファルを見送るかのように、沈んだ顔で彼の傍らに立つている。

「俺はいつも……このアリーナで勝ち続けるお前を見て、惚れ惚れしてたんだぜ。お前が持つ力への追求心は天賦の才だ。もつとお前と……お互い本気でやり合いたかつたなあ……！」

「きたねえ手でこいつをはめた奴が、よく言うぜ」

レブロブスの隣に立つガイウスが、冷ややかな眼差しをゼファルに向けた。

「レブロブス：俺には思うとおりにいかなかつたことが二つある。一つはお前の女房のことだ。俺が捜索隊に加わつて脱走したお前達を探しておいた時、俺は先にお前の女房を見つけた。俺は、この試合で使つたものと同じ呪符をその女に取り付けて、いつたんお前の所に戻したんだよ」

「なんだと!? 貴様……！」

激昂するレブロブスの反応を楽しむかのように薄笑いをしながら、ゼファルは話し続ける。

「呪符を取り付けた者は、取り付けられた者を意のままに操ることができる。守ろうとしていた自分の女に煮え湯を飲まされるという絶好のシチュエーションで、お前が死ぬのを見物してやろうと思つてなあ……！ だが、呪符の力を発動させても、お前の女房はお前を襲わなかつた。それどころか、俺を巻き込んで自爆しようとしたやがつた！ 慌てて殺しちまつたから、あの時何が起こったのかはわからないままだ……！」

ゼファルから明かされた妻の死の真相によつて、レブロブスは困惑している様子だつた。

「そしてもう一つは：俺の人生、そのものさ。五体満足でいたけりや、俺の側からもうちつと離れな……！」

ゼファルが胸をはだけると、彼の胸に血で汚れた札が縫い付けられているのが見えた。

「お前ら、下がれっ!!」

レブロブスの咄嗟の掛け声に応じてアリーナ達がその場から退いた直後、爆音と共にゼファルの身体が四散した。

「そんな…この人自身も誰かに操られていたの!?」

爆発がもたらした煙に咳き込みながら、ルピルピが動搖している。

「ゼファル!! お前はいつから、誰に、操られていたんだ!?」

レブロブスは顔を引きつらせ、ゼファルが倒れていた血の海に向かつて叫んだが、それに答える者はもういなかつた。

大会王者が敗北したアリーナでアリーナ達を包み込むのは、観客からの称賛の嵐ではなく、凶暴な不満と非難の声だつた。ゼファルの勝利に賭け金を投じていた者達が逆上し、今にも客席を飛び出してアリーナで乱闘を始めそうな勢いだつた。

「これつて…かなりまずいんじやないかな……!?」

ピリポが怯えながら観客席を見渡している。

すると、客席の至る所で見覚えのある光弾が炸裂し、観客達を襲つた。客達は喚き叫びながら逃げ惑い、闘技場の様相は混沌一色となつた。

「お主達、何をぼーっとしておる！ ほれ、試合は終わつたのじやから撤退じやよ！」

ヨハネが猫のようにしなやかに身を翻し、客席とアリーナを隔てる柵を越えてデイ一
ナ達の元へ駆け寄つた。客席に放たれた光弾は、闘技場からの突破口を開くためのヨハ
ネの計らいだつた。

一行は闘技場の出口を目指してアリーナを走り出す。

「大会王者より、あのじいさんのやることの方がえげつねえな……」

アリーナを駆けながら、ガイウスが苦笑を漏らした。

十一

混乱に乗じて闘技場を首尾よく脱出した一行は、その足でパンデモニウムの街へ続く
丘を登り、頂上で小憩することとなつた。

「レブロブスさん……身体の方は大丈夫？」

力無くうなだれながら立ち尽くしているレブロブスに、ディーナが声を掛ける。彼は
頷き、顔を上げた。

「お前と自由について話したよな。俺は……自由つてのは、人間をあらゆる柵から解放す
る翼のようなもんだと思つていた」

レブロブスの尊厳を脅かしていた迷いは消えていた。

「そんな好都合な代物じやねえんだ。自由ってのは、重てえな。だが…いいもんじやねえか……」

彼は長きに渡る苦悩の末に見出した答えを囁み締める。

「お主は予てより、自由と放縱が同義では無いことを知つておつた」

ヨハネは満足気に微笑を湛えていた。

「そしてお主は自らの思考と経験から、一つの結論に行き着いた。即ち自由とは、外的要因に左右されず、自分自身の意志に基づいて生き方を決断し、その選択と行為から生じる重荷に耐えながら生きていく…この一連の主体性であると言うことじやな。例えその考えがこの世界では罪深いと呼ばれようと…お主の精神は気高いものだと、わしは思うよ」

「それとね、私…ゼファルさんの話を聞いて、思ったの」

ディーナがレブロブスを見据えて訴え掛ける。

「レブロブスさんの奥さんは呪符に意識を乗っ取られていたはずなのに、その力に抗いながらレブロブスさんを守ろうとしていたつてことだよね。亡くなる直前、奥さんはレブロブスさんを恨んで睨み付けていたんじやなくて…あなたに生きて欲しいって、必死に願いを…込めてたんじやないかな……」

束の間、レブロバスの瞳が揺れた。彼は丘の上から景色を眺めるかのように、ディーナ達に背を向ける。

「そんなこと…今となつちや知る由もねえよ……」

彼が立つ場所からは、激戦を繰り広げた闘技場の全容を眼下に望むことができた。

「懐かしむ思い出なんざ、一つもねえ所だつたが：お前達のおかげで、けじめを付けられた。ありがとよ」

「さあ、そろそろ出発するとしよう。あいにく、闘技場では領主と思しき者は見つけられなかつたからの。気を引き締めて、パンデモニウムの街へ参るぞ」

しめやかな空気へ厚く別れを告げ、ヨハネが旅の再開を説き勧める。

仲間達が丘を下り始めてからしばらく、ディーナは一人頂上に立ち止まつていた。

「懐かしむ…思い出…」

レブロバスが発した言葉を繰り返し呟きながら、記憶をまさぐる。そして彼女は、ヨハネ達が魔法都市リニアについて話していた時に自分が感じた強い気持ちの正体を突き止めた。

ディーナを襲つた感情は、狂おしい程の郷愁だつた。

その都市の名になぜ惹かれるのか、自分とどのような関わりがあるのか、そこまでは思い出せない。途方も無い喪失感と遺る瀬無さだけが胸の内に広がつていく。

『記憶を取り戻すことが辛いなら、俺のために無理して思い出そうとしなくていいんだ。俺は今のお前とこの暮らしが続けばそれでいいと本気で思つてる』

過去を取り戻せない不安に押し潰されそうになつたディーナの心を、記憶に残るゼロの笑顔が支えた。光明を盛り返したディーナは、自らに言い聞かせる。

今の自分にとって、帰るべき故郷はゼロと二人で暮らしたあの箱庭なのだ。今はただ、ゼロを見つける糸口を掴むため邁進するしかない。現在の自分の力ではどうしようもできない過去の記憶に囚われていては、ゼロに再会する道は切り拓けないのだ、と。

ディーナは身に迫るその郷愁から逃れるように、仲間達の跡を追つて急いで走り出した。

第五章 強欲の街

一

「父さんがまた、怒ってる……。母さんは……泣いてる……」

窓の無い牢屋のような仄暗い部屋の隅に、ピリポは蹲つている。階下から聞こえてくる両親の口論の声に背筋を凍らせ、思わず膝の中に顔を埋めた。

ピリポは既に、自分が夢の中にいることを知っていた。ゴルゴダの牢獄の看守になる前、実家で過ごしていた時の記憶を呼び起こす悪夢だった。今までに何度もうなされ、今回も最後まで同じ思いを味わわなければ目覚めることはできないだろうと諦めが付いていた。

夢の中の両親の諍いの原因が自身にあることもわかつていた。弱者の罪を背負う自分の存在を隠しながら暮らしている両親の元へ、近隣の住民が異端審問官への口止め料をせびりにやつて来たのだ。

家の外壁に打ち付ける雨音が妙に生々しかった。その雨音に紛れ、誰かが階段を上る

音がする。足音の大きさから、父親のものだと察知した。

足音はピリポの部屋の隣にある父親の書斎の前で止まり、間を置かずに部屋の扉が開く音がした。書斎には、両親が蓄えた全財産を保管している金庫がある。

父親が金庫を開けるためにダイヤルを回す音が響く度に、ピリポの胸は軋んだ。

「悔しいだろうな……一生懸命稼いだお金が、僕のせいで、どんどん減つていくんだから

……」

膝を抱えている両腕に力が籠まる。

「僕が生きてても……父さんと母さんを苦しめるだけだ……」

足音はピリポの部屋の前を通過し、階下へと遠ざかっていった。

「でもまだ、決め付けたくない……僕が生きてる意味を……」

ピリポは顔を上げ、目の前の壁に立て掛けている一張の弓と矢筒を視界に入れる。それは弟から貰い受けたものだった。

ピリポの弟は両親の目を盗んでは、狩猟をするためにしばしば彼を近くの森へ連れ出した。弟から弓の手解きを受け、狩猟を続けていたある日、ピリポは見事な牡鹿を仕留めた。ピリポが無断で家を抜け出したことが発覚しないよう、その獲物は弟が一人で狩つたものとして両親に引き渡された。しかし、喜ぶ両親の姿を見た後、ピリポは初めて自らの行いが家族の笑顔へ繋がつたと、自室で密かに感泣していたのだった。

「僕にはまだ：誰かのためにできることがあるつて、信じたいんだ……！」

夢の中で自らが発した声により、ピリポは目を覚ました。頭を預けている枕が湿っている。寝台から上体を起こし、濡れた目元を拭うと、意識がはつきりとしてきた。

現在ピリポ達が休息している場所は、パンデモニウムの街の宿である。上階にある部屋の窓に目を遣ると、空が白んでいた。ベランダへと続く扉を開けて外に出て、そこにいる先客と挨拶を交わす。

「おはよう、ピリポ君」

風になびく髪を片手で抑え、ディーナがにこやかにピリポへ振り返る。

「気持ちのいい朝だね」

ディーナは目を閉じ、大きく伸びをした。ピリポは頷き、朝日に照らし出されたパンデモニウムの街並みを彼女の隣でしばらく眺めていた。

ヨハネがディーナを鎧の適合者として選ばれた人間だと話していたように、ピリポにとっても彼女は何にも代え難い存在となっていた。ゴルゴダの牢獄で出会った時、ディーナの分け隔てない真心が、ピリポの中に眠っていた勇気を振り起した。そして彼女がもたらした奇跡によつて、彼は健全な肉体を持つ白き羽へと生まれ変わった。

ディーナへ溢れ出る敬意と感謝を、どうにか言葉にして伝えたかった。

「ディーナ、僕は——」

ピリポは不意に改まつた表情でディーナに向き直つた。

「君に出会えたお陰で、本当に……幸せだつた……」

ピリポを見つめるディーナから笑みが消える。

「突然どうしたの……？」

「僕は皆の中で一番弱いし、この旅でいつ死んじやつてもおかしくないから……言いたいことは、言える時に言つておこうと思つて……」

慌てて陽気な声を上げて、ピリポは自らの感傷を取り繕つた。

「闘技場でも僕は何もできなかつたし……死んじやう前に、役立たずつて捨てられちやう方が早いかな……」

ディーナは沈み込んだ表情のまま俯いている。

「悲しくなるようなことを言わないで……。それに、必要以上に自分を貶めちやうの、ピリポ君の悪い癖だよ……」

彼女につられ、ピリポも氣を落とした。

よかれと思った言動が悉く裏目に出る自分の要領の悪さを恨む。両親に続いて、ディーナからも見限られたのではないかと、目の前が暗くなつた。

「そんなピリポ君には……」

ディーナは顔を上げてキッとピリポを見た。なぜか両方の掌を彼に向け、全ての指を繰り返し曲げたり広げたりしている。

「お仕置き、だよ!!」

「わあわわわわわわ!?」

身体をくすぐられたピリポの絶叫が宿中に響き渡る。彼から手を離したディーナには、再び笑顔が弾けた。

「あのね：記憶を取り戻せなくて苦しんでいた時に、ゼロが『ありのままの自分でいい』って私に言つてくれたの。私の気持ちを楽してくれた、大事な言葉。この言葉を、ピリポ君にもあげる」

身をよじつて息を切らしていたピリポは、食い入るようにディーナを見つめる。

「卑下する必要なんか無いよ。今の自分を大切にした上で、足りないと思うところを見つけたら…自分のためになる努力を続けて、自分らしく成長していけばいいんじゃないかな」

街を包む曙光と同じ、柔らかく何か希望を感じさせるディーナの微笑が、ピリポへ差し込んだ。

「ピリポ君は自分で思つていて以上に素敵な人なんだよ。あなたの勇気にはたくさん助けられてきたし、私はピリポ君と一緒にいるだけでほんわかできるの。これつて凄い才

能だよ！」

「…ありがとう……」

この上ない喜びと面映ゆさが入り交じり、瞳から零れそうになるのを必死に堪える。

「ディーナに何度も濡れそぼつた顔を見られるのはみつともないと思った。

「お前ら、朝っぱらからうるせえぞ…。じゃれ合うなら余所でやれ……」

寝起きのガイウスが眠たげな目を浮かべてベランダへ顔を出した。

二

「ディーナ、聞いて聞いて！ 完璧な作戦が閃いたわ!!」

起床したルピルピが潰刺とした様子で、宿の部屋で身支度をしているディーナへ声を掛けた。

「ルピルピちゃん、おはよう。作戦つて：一体、何の？」

「領主のマモンから、教皇庁の場所について引き出す作戦に決まってるじゃない！」

ルピルピは不敵に笑っている。

「旅の興行者に成り済まして、マモンの屋敷に潜り込むの！ そして宴の席を設けさせて、踊り子に変装した私とディーナがマモンに酌をする訳。お酒と私達の色気に酔い痴

れたマモンは、口を滑らせるはず！」

「大胆過ぎじゃないかな……!?」

ディーナが困惑していると、レブロブスがからからと笑い声を上げた。
「大体よ、ディーナはともかく、お前の薄っぺらい胸と尻じや色氣も何も——いつてえ！
何しやがる！？ ぐつ！」

彼は顔を真っ赤にしたルピルピから、怒りの往復びんたに見舞われている。
「闘技場の一件もあつて、我々は街の住民達に面が割れておる。身分を偽つてマモンに
近付くのは無理があるのう」

ヨハネが苦笑しながら口を開いた。

そもそも、ディーナは脱獄犯である自分達が闘技場で多くの人に顔を見られているに
も関わらず、辺りを憚らずに街を出歩いたり宿を利用したりしていいものかと気を揉んで
いた。

だが、ディーナ達が闘技大会を制覇したことが、街の住民達へディーナ達の強さを見
せ付ける結果になつたというのがヨハネの持論である。力こそが全てであるこの世界
において、追つ手も下手に手出しができないと悟つただろうから、臆せず堂々としてい
ればよいと彼は豪語している。

「やはり、闇夜に乘じてマモンの館を襲撃するのが定石であろう。今宵にでも仕掛ける

とするか…。このままこの街でのんびりしていては、宿賃だけで路銀が底を突いてしまうわい！　まさか物価の上昇がここまで凄まじいとは」

「薄気味悪い街だ。こここの黒き羽共は、白き羽の俺達にまで媚びへつらつて商いをしてやがる。プライドよりも金儲けが優先されてるんだな。法外な値段で物を売り付けてくるから、奴らの横暴に変わりはねえが」

「スリや強盗も多発してるそうです。街の皆がお金を得ることに躍起になつて。お金は人の生活を潤すためにあるはずなのに…この街では人がお金のためにいるみたい……」

肩を落とすヨハネを見ながら、ガイウスとディーナが言つた。

「パンデモニウムに限つた話ではないかもしけん。黒き羽達は幾つもの社会階層に分かれて暮らしておる。そして各々が富と物質的成功を獲得するため、他者との競争に常に身を置いているのじや。栄華も零落も自分次第：己の手腕と立ち回りが全てを決める、この孤独な戦いから落伍した者は、野垂れ死ぬしかない。富を蓄積したり、物質的成功を收めたりすることが、自らの幸福という目的のためではなく、目的そのものになつておる。これが今の黒き羽達の社会なのじやよ」

「この街にいた、レブさんの知り合いの御主人様も、借金のせいで自殺しちやつたんだよね。お金つて…命よりも大事なのかな……？」

ヨハネの話を聞きながら目を伏せているピリポを、ディーナは気遣わしげに見ていた。

「…今夜動き出すなら、今のうちに買い出しを済ませておくね。ピリポ君と私で行つてくるよ」

「お前らだけで平氣か？ 美徳商人共に、有り金巻き上げられんなよ」

「大丈夫。任せて！」

ディーナは腫れた頬をさすつてレブロブスに向かつて力強く頷き、ピリポを伴つて宿の部屋を出た。

三

「とは言つてみたものの…」

パンデモニウムの一角にある商店の中で、ディーナとピリポは食料品の陳列棚を前に頭を抱えている。

ディーナは財布の中身と食料品の値札を何度も見直した後、嘆息を漏らした。

「どうしよう、これじゃあ全然足りない……」

「ヨハネさんならお店の人どうまく値下げ交渉をしてくれるかな。呼んでくる？」

二人が考えあぐねていたその時だつた。

「あら、可愛らしいお客さん達だこと。お使いかしら？」

店の奥から、黒い羽の妙齢の女が現れた。頭にターバンを巻き、美々しい首飾りや指輪を身に付け、商人然とした当たりのいい笑みを湛えている。

その宝飾品の輝きを霞ませる程、女には華がある。自らの美貌を誇つてはいるが、それに嫌らしさはなく、品格のある自信が悠然と備わつてゐる。

非の打ち所がない麗しさに魅せられ、ディーナはすっかり彼女に見惚れていた。

「いらっしゃい。何が必要なの？」

「わ、私達、旅をしていて、食料の補給のためにここへ來たんです。でも、持ち合わせが足りなくて……」

我に返つたディーナが申し訳なさそうに話を切り出すと、左右対称に上がつていた女の口角が下がり、今度はその艶っぽい唇が輪を描いた。

「まあ、旅人さん？　あなた達、若いのに苦労してゐるのねえ。私にその旅の手助けをさせてちょうだい」

つかつかとディーナ達の元へ歩み寄つた女は、棚にある食料品を次々と紙袋へ詰め込んでいく。

「今日はね、お客様感謝祭をやつてるからお店の品物が全部半額なの。あなた達には大

負けに負けて、更に値引きしちゃう！　はい、どうぞ。お代はこれでいいわ」

女ははち切れんばかりに膨れた紙袋を二人の胸元にそれぞれ押し当てた。

ディーナは渡された勘定書を見て驚愕する。

「こんなただ同然の代金じゃ、大損しちゃうんじゃないですか!?」

「そんなこと、気にしないで！　お客様は大善神様、よ。あなたが笑顔になつてくれさえすれば、それが私の心の糧になるの」

思いも寄らぬ他人からの厚意に、ディーナは顔を綻ばせ、女に品物代を支払う。

「本当にありがとうございます。これで旅を続けられます……」

「こんなに邪惡な黒き羽が、この街にいるなんて……」

ピリポは紙袋を抱えたまま、呆気に取られている。

「それじやあ、帰り道に気を付けてね。あなた達が余りにも可愛いからって、誘拐されたりしませんように」

温かい眼差しを向けている女へ深々と頭を下げ、ディーナは踵を返した。そして先に店を出た。ピリポに続こうと、玄関扉の持ち手に手を掛けた。

「素敵な鎧ね」

女は確かにそう言つた。

心臓が跳ね上がり、ディーナは即座に振り返つたが、女の姿は幻であつたかのように

忽然と消え失せていた。

四

ディーナ達を接客していた女は、店の勝手口から狭隘な路地裏へ移動していた。

女は微笑しながら、鼻唄交じりに頭のターバンを掴んだ。巻き付けられていた布が解かれ、頭頂部に生えていた野性的な角が露わになる。

「お前の挙動は、一々理解に苦しむ……」

路地の薄暗がりの中で、男の低い声が響いた。そして女の前に現れたのは、黒曜石を磨き上げたような鎧を全身に纏う、背中に羽を持たない剣士だつた。

「ルカ。なぜ商人の姿を装つてまで、奴らに近付いた？　顔を覚えられては、こちらの不利になるだけだろう」

顔面を覆い隠す兜から漏れ出る声によつて、僅かに呆れている様子が窺える。

「なぜつて？　それはもちろん——」

ルカと呼ばれた女は相好を崩したまま、男を見遣る。

「あのキユートな鎧ちゃんを、じっくり眺めるためよ！　あーん、もう！　近くで見たらますます震い付きたくなる可愛さだつたわ!!　教皇厅にお持ち帰りしたいくらい!!」

「飯事遊びをしているだけで務まるとは、異端審問十字軍隊長はお氣楽なものだな」

品を作り上機嫌なルカを、黒の剣士は冷淡にあしらつた。その途端にルカの眼光は鋭くなり、常人には耐え難い威圧感が場を支配した。

「ファウスト…自分が教皇様のお気に入りだからって、あんまり図に乗るんじゃないわよ。立場上、私はあなたの上官なんだからね」

ファウストという剣士はルカの重圧に臆する色もなく、影のように佇んでいる。

「今私達に与えられている任務は、大邪神の鎧の適合者の監視とその戦闘能力の調査。私はね、自分の手駒の消費を最小限に抑えて任務を遂行する方法をちゃんと考へてるの」

「そのためにお前が闘技場で利用した拝金領主の奴隸共は、大した働きも見せぬまま奴らに返り討ちにされたようだが?」

「あれは戦力を出し惜しみしたマモンが悪いのよ! ほんつと、借金を取り立てることしか能がない男なんだから」

氣色ばんだルカはファウストから視線を逸らす。

「彼、名譽挽回するつて息巻いてたから、もう一度チャンスをあげようと思つてね。手柄を立てたいばかりに、今度は大邪神の鎧を着せた邪道騎士を切り札として投入するはず。鎧を着た者同士の戦いとなれば…貴重なデータが取れるでしょ」

「くだらん。資質を持たぬ者に大邪神の鎧を着せたところで、鎧に命を食われる激痛ですぐに使い物にならなくなる。俺はお前達に与する気はない。好きなようにあの女の力を測らせてもらう」

そう言い置いて、ファウストは薄暗がりの中へ同化するように消え去った。

「下等なおサルの分際で、偉そうに」

ルカは忌々しそうにファウストが消えた方向を睨んだ後、恍惚として笑顔を浮かべた。

「それにしても、鎧ちゃんのあの困った顔……そそられたわ……。もしマモン達に殺されちゃつたら、首だけでも持つて帰らなきや……」

五

「じゃあ、あの万屋のお姉さんは、ディーナが大邪神の鎧の持ち主だつて知つてたの!?」「うん……多分、聞き間違いじゃない」

商店から宿屋への帰路に就いたディーナとピリポの表情は険しい。

ディーナは商店の女に對して不思議な印象を抱いている。彼女が自分達に差し向けられた追つ手だとすれば、警戒心を持たれないようには接なし瞬時に姿を消した彼女は相

「当の実力者なのだろうと思った。だが、自惚れではなく、彼女は自分と出会つたことを心から喜んでいたようにディーナは感じた。そしてディーナ自身も、彼女の美しい笑顔を見て安心感と懐かしさを得ていた。紅血の沼のように深い彼女の瞳が、少しだけゼロと似ている気がしたのだ。

「いつどこで敵が現れるのか、わからないね。注意しておかないと…」
 「あとね、今の話とは別に気になつてることがあつて——」

隣を歩くピリポの横顔をディーナが見つめた。

「ピリポ君、パンデモニウムに着いてから元気がないよう見えるの。今朝も様子がいつもと違つてたし、何か悩んでるんじやないかな？」

ピリポは視線を落としてしばらく黙つていたが、やがて抑え気味の声で口を開いた。
 「僕の実家がある村が、この街の近くなんだ。街がこんな風に変わつてしまつて、僕の家族の生活も苦しくなつてるんじゃないかと思つたら、心配で……」

街中を進む二人の視界が急に暗くなる。リベイラの街でも目にした巨大な鎖が地上から空へと連なつており、街を見下ろしながら影を落としていた。

「それなら、この街を出た後にピリポ君の村に寄ろうよ。御家族に会いに行こう」

「…健康になつた僕の身体を、父さんと母さんに見てほしい。だけど…」

再び日の当たる歩道を歩き出しても、彼は晴れない面持ちのままだつた。

「実家にいる間、僕はずつと家族に迷惑を掛けていたんだ。父さんと母さんは払いたくもない口止め料を近所の人達に取られ続けて、弟のパルタは：弱者がいる家の子供だつて、いじめられたこともあつた」

「そんなの…！ ピリポ君は悪くないよ！」

「やつと厄介払いができたつて喜んでいるのに、僕が姿を見せたら、父さんと母さんはがっかりするよ。僕の家は、パルタが繼ぐはずなんだ。僕なんかよりもっと頭がよくて、運動も得意なパルタがいれば、父さん達が困ることはないんだ」

「跡継ぎの子供がいれば、他の子供はどうなつてもいいと思う親なんて：いや駄目だよ。ピリポ君の御両親がそんな考え方をする人達だとは思えない」

ゴルゴダの牢獄で初めてピリポの境遇を聞いた時から、ディーナは違和感を覚えていた。本当にピリポの両親は体面を保つために金を使つたり、彼をゴルゴダの牢獄に送り出したりしたのだろうか、と。

ディーナは立ち止まりピリポに向かい合つた。彼女を見つめ返すピリポの顔は、今にも泣き出しそうに歪んでいる。

「私は記憶を失つていて、両親がどこにいるのか、生きているのかもわからないから…。会いたい人がいて、その人に会えるチャンスがあるなら、自分の気持ちを伝えに行こう。そうした方が、きっと後悔しないと思う」

「ピリポは口を引き結んだまま俯いている。

「だつ、誰かつ！ そいつを捕まえてくれ！ 財布をすられた!!」

二人の沈黙を、切羽詰まつた男の声が破つた。すると、目の前を若い黒羽の男が脱兎の勢いで通り過ぎ、細い路地裏へと姿を消した。若い男を追うように、息を切らしながら初老の黒羽の男がやつて来て、精魂尽きた様子で地面に倒れ込んだ。

白昼堂々、公衆の面前で窃盗が行われたようだつた。通行人達は足を止めて遠巻きに初老の男を眺めるだけで、彼を手助けしようとする者はいない。皆、盗まれる方が悪いと言わんばかりに嘲笑を浮かべている。

「私、さつきの人を追いかける！ すぐ戻るね！」

ピリポが声を掛ける間もなく、デイーナの後姿は遠ざかり、若い男が消えた路地裏に吸い込まれていった。大邪神の鎧の力を持つデイーナならば、鈍臭い自分がわざわざ助力しなくとも、盜人の一人程度あつさり撃退できるとピリポは見込んでいた。ピリポは初老の男を助け起こうと彼の側にしやがんだ。

「おじさん、大丈夫？」

「ありがとな、坊主。助かるよ」

初老の男はピリポの片腕を手荒く掴み、薄気味悪い笑顔を見せた。

「お前らが噂どおりの大とんちき野郎で、本当に助かる」

男を傍観していた通行人達がピリポを取り囲み、その内の一人が手にした木の棒でピリポの頭を強く殴つた。

六

「ピリポが攫われただあつ!? あの間抜け、何やつてんだか!」

レブロブスは宿屋の食堂で骨付き肉を豪快に頬張りながら、血相を変えて戻つたディーナの話を聞いている。

ディーナが盜人から財布を取り戻しピリポと別れた場所に戻ると、そこには買物をした商品が詰まつた紙袋が転がつていてだけだった。付近にピリポらしい人影は見当たらず、もしかしたら彼は先に宿屋に戻つたのではないかと一縷の望みに賭けて宿屋の部屋に踊り込んだが、そこにもピリポの姿はなかつた。

「鎧のことを知つてたつてんなら、店にいた女はアンゲルス教団の関係者に違いない。大方、後を尾けられたんだろう。お前らの隙だらけでおめでたい頭は、度を越えてるな」レブロブスと同じ食卓に着いているガイウスの冷ややかな視線を受けながら、ディーナが苦悶に満ちた表情で頷く。

「私のせいだ。自分達の立場を、わきまえてなかつた……。ただでさえ、白い羽が街の中で

一人になることは危険だつて、知つていたはずなのに……！　ヨハネさん、ピリポ君が連れ去られた場所に心当たりはありますか？』

『ピリポ一人を狙つてかどわかしたということは、教団の者があやつを人質に取り、わしらを誘い出して一網打尽にしようと企んでいる、と考えるのが妥当かの。そのうち奴らの方から取引の場を提示してくるのではないか？』

「大変！ 大変よ！！ これを見て!!」

食堂に駆け込んだルピルピが、食卓の上に一枚の広報物を広げた。

『外でこれがばら撒かれてたんだけど：ほら！ 『七つの大罪を犯した死刑囚達の脱獄を手引きし、逃亡中だった元看守を捕縛。領主マモンの屋敷内庭園にて、本日正午公開処刑を執行』ですって！』

『鎧の警護を任されてる領主にも当然、教団の息が掛かってるだろうな。俺達がピリポを助けに現れると踏んでる訳だ。放つておけ。自分の身も守れなかつたあいつが悪いんだ』

容赦なく言い放つガイウスの話は、デイーナの耳に届いていなかつた。紙面に刷られた処刑の二文字が浮かび上がり、彼女の気持ちを乱している。

『君に出会えたお陰で、本当に……幸せだつた……』

今朝、聞いたばかりのピリポの声が蘇る。その言葉が今では、彼との永遠の別れを暗

示していたかの如く、ディーナの胸を締め付けていた。

血なまぐさい旅を続ける中でディーナに一時の安らぎを与えていたのは、無邪気に、それでいてどこか謙虚に微笑むピリポの姿だつた。彼の存在に温められていた心が、自らの罪の意識と焦燥感で急速に冷たくなつていくのがわかつた。

「正午まで、もう時間がない……。行かなきや。領主の館つて、この街にあるお城みたいな建物のことだよね……！」

「待ちやがれ!!」

宿屋を飛び出そうとしたディーナを、レブロブスが呼び止めた。食卓に置かれた、中身を平らげた大量の皿の前に座つたまま、真顔で彼女を見据えている。

「食後の運動がてら、付き合つてやるよ。お前達には闘技場での借りがある。このままあいつを見殺しにしたら、さすがに後味が悪いからな」

すると、ヨハネが落ち着いた様子でゆっくりとディーナの元へ歩み寄つた。

「わしも同行しよう。ひ弱で甘つたれな子犬のように見えて、思わぬところで勇ましさを發揮するあの若人を、わしは気に入つておる。ここで死なせるには、ちと惜しいと思うのじや」

「お師匠様が向かわれるのであればもちろん、私も参りますわ！」

「レブロブスさん、ヨハネさん、ルピルピちゃん……。ありがとう……！」

レブロブス達の言葉に深く感じ入り、ディーナは目頭が熱くなつた。そしてヨハネは怪訝そうに顔を顰めていたガイウスへ微笑む。

「さて、ガイよ。お主はどうする？　お互い、戦力の分断は避けたいところじやが」「ここには後先考えない馬鹿しかいねえのか…」

ガイウスは物憂げに嘆息した後、吐き捨てるように言葉を続けた。

「わかつたよ！　付いてきやいいんだろ！」

苛つくガイウスを少しも意に介さず、ヨハネは朗らかな笑い声を上げた。

「結構、結構！　二百人斬りの大義賊殿に力を貸していただけるとは、頼もしい限りじや！　どのみちマモンの屋敷には出向くつもりだつたのじやから、闇討ちを掛ける手間が省けたと、肯定的に捉えようではないか」

七

その屋敷を取り囲む物々しい鉄柵は、屋敷の主の用心深さと猜疑心の強さを表現しているかのようだつた。堅牢な仕上げの門扉は、現在開け放されている。そこから領主の住まう豪邸へ続く広々とした庭園は整然と舗装された石畳に覆われ、異形の動物や黒い羽を持つ聖人達の石像が至る所で台座の上に鎮座している。

庭園にはパンデモニウムの住民達がひしめき合つてゐる。彼らの好奇の目は、庭園の中央に組み立てられた処刑台に注がれていた。十数段の階段を上つた先には木の杭が打ち込まれており、そこへ後ろ手に縛られたピリポが膝を突いている。

「ドブネズミ一匹の駆除のために、ここまで見物客が集まるとは！　金を持たない奴らは碌な娯楽を知らんからな。これしきのことで大喜びしてやがる」

ピリポの隣で居丈高に立つ、頭に巻き角を生やした恰幅のいい黒羽の中年男が、眼下の群衆を嘲笑つてゐる。パンデモニウムの領主、マモンであつた。

「なんだ、その反抗的な目つきは!?　お前の最期の役目はなあ、みつともなく大声で命乞いをして、残りの大罪人共をここにおびき寄せる事なんだよ！　だんまりを決め込んでちや、客も興ざめしちまうだろう？」

マモンは身を屈め、自らを睨めるピリポの顔をまじまじと見た。

「女みてえな面をしやがつて。お前が本当に女だつたら、死ぬ前にいい思いをさせてやつたんだが：生憎、俺に男色の気はないんでな。薄汚い白き羽の奴隸風情が俺達黒き羽に逆らうとどうなるか、これから思い知らせてやる」

「そんなに白き羽が憎いのなら、僕を好きにしなよ。殴られるのも蹴られるのも、僕は慣れてるから……！」

そしてピリポはマモンに訴え掛けるような目を向ける。

「でも、お願ひだから僕の仲間には手を出さないで！　あの人達は皆：僕の大切な恩人なんだ！」

「うるせえっ！　邪教徒に洗脳されたクソガキが！　粹がるんじやねえ!!」
マモンが怒声を放ちながらピリポの頬を叩き打つた。ピリポは歯を食いしばって痛みに耐えている。

「仲間だの恩義だの、非生産的で荒唐な概念が人を破滅させるんだ。そのお前の仲間とやらが情にほだされてここに現れりや、俺に殺されちまうんだからな！　人間を人間たらしめるのは、金！　金だけだ!!　そこのお前！　このガキを適当に痛め付ける。こいつの悶え苦しむ声が、街に潜んでいる罰当たり共に聞こえるようにな！」

マモンは背後に控えている兵士に命令を下した。屋敷の庭園内に配置されている他の兵士達とは一線を画する色彩と装飾の鎧で全身を武装した、羽を持たない兵士である。兵士は無言のままピリポの前に進み出ると、鞘から剣を引き抜いた。

ピリポは自らの運命を受け入れたかの如く、静かに目を閉じて俯いた。しばらくしても何も起こらず、ピリポが目を開けて兵士を見上げると、彼の剣を持つ手が震えているのが見えた。素顔を隠す兜の隙間からは、荒い息遣いが聞こえてくる。

「貴様！　何ぼさつとしてるんだ！　お前には特別に、大枚をはたいて手に入れた大邪神の鎧を着せてやつてるんだぞ!?」

「この人も、ディーナと同じ…!?」

兵士を叱責するマモンの言葉に、ピリポは驚愕している。

「それだけじやねえ、お前自身も本来なら生涯有り付けないような額の報酬を受け取つているだろう！ 払つた金に見合つた働きを――」

「取り込み中みたいだが、邪魔するぜ！ 業突く張りのマモンさんよ!!」

威勢のいい男の声が、処刑台に群がる人々の喧騒すら突き抜けるように響いた。

「レ、レブさん！ 助けに来て、くれたの…?!」

ピリポは身を乗り出し、声がした正面の人込みに目を凝らす。その中の一人が身に付けていたローブを脱ぎ捨てると、処刑台のマモンを射すぐめているレブロブスが現れた。

彼の周囲にいる見物人達は、慌て慄きながら後ずさつた。

「連れが世話になつたな。とろくてお前の手に余るような奴だろう？ 大人しく返してくれや」

「闘技場の覇者、レブロブスか！ 貴様の悪名は聞き及んでいるぞ！」

マモンが不気味な笑みを浮かべながら声を張り上げる。

「剣奴の分際で、自分がやりたいことだけをやつて生きていくことをすることは笑止千万よ！ 貵様の首には、教皇庭により巨額の懸賞金が掛けられている！ 喜悪でしかない貴

様の命を札束に変えて、俺がこの世の中のために役立ててやろう!!」

「おもしれえ、やれるもんならやつてみな!!」

戦斧を構えたレブロブスがそう言い終わらぬうちに、彼に斬り掛けた兵士が打ち倒されていた。

「じいさんとルピルピが有り難そうに話してた大邪神の鎧は、素質のある人間しか装備できないんだよな？ こうもあつさり鎧を着てる奴に出くわすもんなのか？」

レブロブスから離れた人込みに紛れてマモンの話を聞いていたガイウスが頭を捻つている。

囮を買つて出たレブロブスが兵士達を引き付けて場を攪乱させている間、他の者達がピリポを救出する手筈になつていた。

「私はリベイラでずっと鎧の研究をしてたわ。そこから比較的近いパンデモニウムでそんな人が現れたら、見逃すはずないと思うんだけど…」

落ち着かない様子のルピルピの隣で、ヨハネが哀れむような目で処刑台に立つ兵士を見据えている。

「あの者からは、ディーナが鎧を身に付けた時の邪悪な力を感じられん。真の鎧の主ではないのだろう。ああしている今も、鎧によつて命を削られているはずじゃ」

「ま、そんなことはどうでもいいがな。思つていたより兵士の数が多い。俺は筋肉馬鹿

に加勢する。無敵のディーナ様がいりや、こつちは平氣だろ?」

「わ、私、頑張るね。ガイウスさんも気を付けて!」

ディーナの返事を待たず、ガイウスは器用に人込みを押し分けてその場を離れた。

ヨハネが錫杖を取り出し、表情を引き締める。

「あの邪道騎士の力がまがい物だとしても、氣を抜いてはいかん。どれ、わしが処刑台までの道を拓こうではないか。とつておきの呪文を一発、唱えてやるかの」

「ありがとうございます。でも、なるべくヨハネさんの魔法に頼らないようにピリポ君を助け出します。ここにいる街の人達を、できる限り巻き込みたくないから…」

「大邪神の力を繼ぐ者としての模範解答じやのう! しかし、それはわしが魔術を控えるだけで済む話ではないようじゃ」

ヨハネの視線の先に広がる光景を前に、ディーナは愕然とする。

「そんな…! 兵士達が、街の人達まで襲い始めてる!」

八

マモン邸の庭園内で、突如として殺戮は始まった。マモンに雇われた兵士達の野蛮な叫び声と、パンデモニウムの住民達の悲鳴が混ざり合う。屋敷の外へ避難するために門

を目指して駆ける住民達の足元には、慘たらしく頭を真つ二つに割られ、肢体の一部を切断された遺体が既に幾つも倒れている。

幼い黒羽の男児とその母親が、兵士の一人に追われている。やがて男児の足がもつれ、地面に突つ伏した。兵士の凶刃が迫る中、母親が男児に駆け寄り、兵士に背を向けて男児を抱き起こした。

男児にとつて、それが母親に触れた最初の体験だつた。黒い羽達の世界では、彼らが美德としている欲情に関する行為以外で人間が身体を触れ合わせる行為は禁じられている。必要以上の肉体的接触は、そこから生じる帰属意識や一体感が、七つの大罪である愛という錯覚に繋がる恐れがあると言わっていた。震えている母親の腕に強く抱きすくめられ、男児は母親の体温を生まれて初めて感じていた。

振り下ろされた剣と母子の間に素早く入り込み、その刃を武器で食い止める者がいた。

「何してる!! 早く行け!!」

自分達を庇つてゐるレブロブスを呆然と眺めていた母親は、一目散に逃げ出した。

母親に手を引かれながら振り向いた男児の瞳には、レブロブスの広く逞しい背中と、そこに生える純白の羽が映つていた。

「てめえら、気が触れたのか!?」

猛々しく戦斧を振るい、目の前の兵士を斬り伏せたレブロブスは、自らを取り巻いている数人の兵士達に向かつて叫んだ。

「民間人を守るのがお前らの仕事だろが!! なぜ女子供まで好き好んで襲うんだ!?」

「おかしいのはてめえの方だろう、邪教を信じ込んだ狂犬が」

兵士がレブロブスを蔑むような目つきで口を開いた。

「俺達はな、この街の利益にならない人間を排除しようとマモン様に命じられているんだ！ 金を持つてなさそくな、みすぼらしい身なりの奴らは幾らでも殺していいと言われてるんだよ！」

「殺した貧乏人の数だけ俺達の給金が上がるのさ！ マモン様に言われたとおり暴れるだけで金がもらえるんだ、こんなぼろい商売他にねえぜ！」

「貴様ら…！ 自分がどれだけ恐ろしいことをしてかしているか、気付かないのか!?」

次々と兵士達から飛び出した言い分に、レブロブスは絶句していた。

「てめえらは、俺達白い羽のように生まれながらの奴隸なんかじやねえし：誰かに操られてる訳でもねえ……。それなのにてめえらは、金のために自ら意志も責任も捨て、権力者の言われるがままになつて喜んでいる！ なぜだ!? なぜお前達は自由に背を向けて、へらへら笑つていられるんだ!?」

吠えたけるレブロブスを小馬鹿にするように見ながら、兵士達は腹を抱えて笑つてい

る。

その時、レブロブスの背後で兵士の断末魔の叫びが聞こえた。

「自分の頭じや何も考へられない盆暗共に：御高説を垂れるだけ時間の無駄さ」

レブロブスの背後から彼に斬りかかるうとした叫び声の主は血を吐きながら倒れ、その傍に立つ槍を手にしたガイウスが兵士達に冷たい目で微笑んでいる。

「こういう手合いは、四の五の言わずに斬り捨てるのが一番だ」

「珍しく気が合うじやねえか…！ こいつらまとめて根性叩き直してやる！」

並び立つレブロブスとガイウスはそれぞれ武器を持ち直し、眦を決して兵士達に相対する。

「早く！ 逃げてください！！」

ディーナとヨハネ、ルピルピも、レブロブス達と同じく街の住民達を守りながらマモンの兵士達と戦っていた。

「どうしてこんなことを…!? 守るべきはずの街の人達を、なぜ領主のあなたが傷付けるの!?」

「そんなこともわからねえのか！ この社会を維持するためにはなあ、人間をふるいに掛けて生きる価値のある奴をはつきりさせる必要があるんだよ…！」

兵士と剣を交え憤るディーナを、マモンが処刑台から見下ろしながらせせら笑つてゐる。

「人間、何をするにも金が要る。俺様のように金を稼ぐことができる奴つてのは、能力がある強者つてことだ。一方で、金を稼ぐ能力がない、七つの大罪である弱者を野放しにしておけばどうなる？ そいつらを養うためのしわ寄せが、金持ち達に来ちまうだらう！？ 税金を払わない無能共のために、なぜ俺の大事な金を使つて街を整備し、奴らの暮らしを支えなければならない！？ 働かざる者食うべからずとはよく言つたもんだ。金を稼げない奴は死ぬしかない。惰眠を貪つてゐる弱者共に、俺は社会の厳しさを教えてやつてるのさ！！」

「税金を払えない人が増えたのは、あなたが私腹を肥やすために街の人達へ重税を掛けようになつたからではないの!? それに、働きたくても思うようにできない事情を抱えた人達だつているはずなのに：そんな人達を問答無用で殺そうとするなんて、許せない！」

「知つたふうな口を利くなよ、小娘！ 貴様には俺のような上に立つ者の劳苦など、見当も付かんのだ！ さあて、ここにはレブロブスに加え、疾風のガイに、大魔導士のヨハネ：札付きの大悪党が雁首揃えてる訳だ。こいつらを全員殺せば、金がたんまり俺の懐に入る：笑いが止まらんなつ！！ おつと、兵士達よ！ 鑑を付けた女は二人とも生け捕

りにしろ！ 殺すよりも、鎧を引つべがして客を取らせ続けた方が金になるからな！」

「あつたま来ちゃう！ 私達の美貌を売り物にしようだなんて!!」

剣を振るう手を休めることなく、ルピルピがマモンを見上げる。

「ピリポを助けるついでにあいつを張り倒してやりたいけど、兵士の数が多すぎて処刑台に近付けないわ……！」

「そろそろ、わしの出番じやな」

兵士達から間合いを取つて呪文を唱えていたヨハネが言つた。

「領主マモンよ！ 街の支配者の座に就いてもなお富を欲するお主の強欲さには敬服するが、ここまで人命を軽んじるのは見過せん！ 無念を宿した亡者達の慟哭を聞くがよい！」

ヨハネの掛け声を合図に、倒れている死体が一斉に上体を起こした。そして死人達は身の毛もよだつような呻き声を上げ、両手を前に差し出しながら立ち上がった。

死人達は、恐怖に立ち竦んでいるマモンの兵士達へその両手を絡ませ、彼らの喉笛を噛み千切り始めた。庭園内を満たしていた街の住民達の悲鳴が、兵士達のものへと塗り替えられていく。

兵士達に斬り付けられ、身体に弓矢が突き刺さつても、死人達は痛みを感じないのか、少しも怯むことはない。中には割れた頭から脳髄を垂れ流したまま、噛み付いた兵士の

死肉を貪つてゐる者もいた。

「これこそが、当代随一のネクロマンサーと名高いお師匠様の死靈魔術！　流石ですわ！」

ルピルピが惚れ惚れとヨハネを見つめている。

「お、お前達！　これしきのことで怖氣付くなあつ！　おめおめと逃げ出そうものなら、俺がお前達を殺してやる！　死にたくなれば、化け物ごとあいつらを八つ裂きにしろ！！」

戦意をくじかれ、動きが鈍くなつた兵士達に激怒しているマモン自身も、眼下に広がる蘇つた死者の群れに恐れをなしているようだつた。

「この機を逃すでないぞ、ディーナ！！」

氣迫がこもつたヨハネの声を耳にし、目の前で彷徨と捕食を繰り返す死人達に驚き立ち尽くしていたディーナは我に返つた。その場から弾かれたように駆け出し、死人達に襲われている兵士達の間を搔い潜り一直線に処刑台を目指す。

「げえつ！？　もうここまで来やがつた！　おいつ、はやくあの小娘をぶつ殺せ！！」

処刑台の階段を駆け上がりピリポ達の元へ辿り着いたディーナを見たマモンは、邪道騎士を盾にするかのように後ろへ下がつた。

ディーナは剣を構え、マモンと邪道騎士に対峙する。

「ピリ。君を、返して!!」

邪道騎士は弓に矢を番え、死人達を操っているヨハネを狙い撃とうとしていたが、即座に弓を剣に持ち替えディーナへと斬り掛かった。刃の速度と切れは凄まじいものであつたが、ディーナは冷静にそれを刃で受け対抗した。大邪神の鎧によつて強化された動体視力と膂力が、邪道騎士が振るう剣の軌道を読み、猛攻をしのぎ切つている。

二人が繰り広げる人間業とは思えない剣戟に気圧され、マモンは呆けたように口を開けて棒立ちになつてゐる。

邪道騎士がディーナを斬り払おうと、大きく剣を振り抜いた際に生じた隙を彼女は見逃さなかつた。

「ごめんなさい！」
邪道騎士の背後へ回り込んだディーナは、剣の柄頭で相手の後頭部をありつたけの力で殴つた。

体勢を崩した邪道騎士はそのまま床に倒れ、氣を失つたようだつた。仲間達からは甘いと非難されるとわかつても、ピリポを傷付けることを躊躇していたように見えた邪道騎士の命を、ディーナは奪いたくなかった。

「俺が苦労して手に入れた大邪神の鎧が、こんな小娘に劣るというのかつ!?」
狼狽するマモンを余所目に、ディーナはピリポを拘束している縄を解こうとした。

「ディーナ、後ろ!!」

ピリポが叫ぶと同時に突き刺さるような悪寒が背筋を走り、ディーナはその場から飛び退いた。刃が一閃し、あわや彼女の身体を斬り裂くところだった。

「メタトロンの鎧に選ばれし者よ。ここにいる雑輩共が相手では、物足りないんじやないか?」

「お前はルカ様が連れていた邪道騎士?: 確かファウストとかいつたな! 何しに来やがつた!? こいづらは俺の獲物だ、首を突つ込むな!!」

「無能な上司の世話ばかり焼いていてな。俺も退屈してたところだ。一つ、手合せ願おう」

さかんに怒鳴り声を上げるマモンには取り合いもせず、漆黒の剣士はディーナと向き合い、剣に付いた血を払っている。

その直後、兵士達を襲っていた死人達の足が止まり、折り重なつて再び地面へ倒れていった。

「あやつまさか…! わしが動かしていた亡者達を全て破壊してからディーナの元へ行き着いたのか!」

ヨハネが動搖しながら庭園を一望している。死人達は一人残らず首を刎ねられ、断面から流れ出る血が石畳の目地を伝い赤い河となつていた。

ファウストを見据えながら、ディーナは纏わり付くような不快な汗が額から滲み出していることを感じていた。一分の隙もない構えを取るファウストの強さからだけではなく、何か判然としない恐怖が頭をもたげた。

驚異的な瞬発力でディーナとの距離を詰めたファウストの一太刀をディーナは剣で受け止めたが、その重みに顔を歪める。間髪を容れずに叩き込まれる剣技は入神の域に達しており、先程戦っていた邪道騎士の比ではなかつた。

剣と剣が火花を散らす度、ディーナの中で得体の知れない恐怖が増大していった。身体中を駆け巡る混沌とした感情が破裂し、叫び出しそうになる。

「拍子抜けだ。お前の剣は軽すぎる！」

剛力と神速を兼ね備えたファウストの一撃を受け、処刑台から弾き飛ばされたディーナの身体は庭園の石畳の上を転がつた。

「あの剣士、何者だ!?」

完膚なきまでにディーナを叩きのめしたファウストを見ていたガイウスが険しい表情で叫ぶ。

「まずい、ディーナがやられる！ さつさとこいつらを片付けるぞ!!」

戦斧を掲げ、行く手を阻む兵士達を威嚇しているレブロブス。彼らは死人の襲撃から

生き延びたマモンの兵士達との戦いを続けていた。

二人がファウストの存在に気を取られた一瞬の間のことだった。目にも留まらぬ速さで飛来した黒い影がガイウスに直撃した。その影が振るつた剣に吹き飛ばされたガイウスは受け身を取つたものの、巨大な石像の台座に背中を激しく打ち付けた。ひび割れた台座に背を預け座り込んだまま、ガイウスは自らを窮地に追い込んだ影の正体を睨め上げている。

「大邪神の鎧を着た奴が……まだいやがつたのか……！」

そこに立つのは、処刑台の邪道騎士と配色は違えど、よく似た装飾や模様が施された鎧に身を包んだ兵士だった。とどめを刺すため、邪道騎士は深手を負い動けずにいるガイウスへ迫る。

「ガイ!!」

背中を見せている邪道騎士にレブロブスが戦斧を振り下ろす。並みの武装をした兵士相手ならば、身に付けた鎧ごと粉碎する程の威力を持つた一撃を、大邪神の鎧は傷一つ刻まれることなく跳ね返した。反撃に出た邪道騎士が斬り掛かり、レブロブスは苦戦を強いられている。

「おのれえつ！ 秘蔵していたサリエルとウリエルの鎧を、貴様らざ」ときに二つとも使うことになるとは！ この鎧を譲り受けるために、俺がどれだけ教皇庁に金をつぎ込ん

だと思つてゐるんだ!!」

処刑台の上でマモンが怒り狂つてゐる。

「まあいい…中身をすげ替えれば、鎧は何度でも使える！　使い切りの呪符に比べりやよっぽど経済的だ。おいつ、お前はいつまで寝てるんだこの役立たず!!」

邪道騎士と戦いながらマモンの話を聞いたレブロブスの顔色が瞬く間に驚きと怒りへ変わる。

「呪符だと!?　闘技場でゼファルを操つていたのは貴様なのか!?　答えろつ、マモン!!」

「捨て駒の名前なんか、一々覚えてる訳ねえだろう!!」

足元で気を失つてゐる邪道騎士を踏み付けながら、マモンがレブロブスへ当たり散らす。

「待てよ、そういうえばお前が闘技場から脱走した時、俺は呪符を取り付けた剣奴を一人、お前の捜索隊に潜り込ませた…。そうだ！　そいつの働きでお前は捕まり、手柄を立てる俺はこの街の前の領主に気に入られたんだつた！　おかげで俺は出世の道を突き進み、領主にまでのし上がる事ができたのさ！　そのことに関しちや、お前に感謝しねえとなあ!!」

「よくわかつた…。ゼファルを利用し、俺の妻と子を死に追いやつたのは…貴様だつたんだな…!!」

声を震わせたレブロブスは、優勢だつた邪道騎士の剣を恐るべき力で押し返した。邪道騎士は宙に投げ出され、勢いよく地面に倒れた。

「貴様をそこから引きずり下ろす！ 金で飾り立てた領主の椅子に座る貴様自身にどれだけの力があるのか：俺が見極めてやる！！」

周囲を圧倒する鋭い眼光を処刑台へ飛ばすレブロブスに、高笑いを響かせていたマモンは縮み上がつた。

後ろに跳ね飛ばされた邪道騎士が上体を起こすと、レブロブスは再び視線を邪道騎士へと戻し身構えた。しかし、邪道騎士は取り落とした剣を掴もうとすらせらず、うなだれたままその場に止まつてゐる。

「…俺を…殺してくれ…」

「なつ、何!?」

邪道騎士が絞り出すような声を上げ、レブロブスは目を見開いた。

石畳の上にうつ伏せになつていたディーナは苦しそうに息を吐きながら身を起こした。処刑台から転落した際の損傷は大邪神の鎧が軽減していたが、ファウストと剣を交えた両腕は痺れ、心身共に困憊しきつてゐる。

「純粹に強さがあつた分、以前のお前の方がまだ好感が持てた。ここにいるのは、ただの

抜け殻だな」

ファウストが処刑台の階段を静かに降り、ディーナへ近付く。

「やつぱり……あなたは記憶を失う前の私を知っている！」

くずおれていのディーナは顔を上げ、ファウストを凝視する。そしてファウストを見た時から感じていた恐怖が、失われた自らの記憶から来るものだと確信した。

「私もあなたに出会った気がする。でも、いつ、どこでなのが思い出せない……。教えて！」私は一体、誰なの？！」

「本当に、知りたいのか？」

ディーナの叫びを、感情があるとは思えない程冷たいファウストの声が搔き消した。

「口先だけだ。お前は真実を知ることを恐れている。何も知らない者は何もできない。何もできない者は何も理解できない。何も理解できない者は生きている価値がない……」

蒼白になつてゐるディーナの顔を見下ろしながら、ファウストが剣の切つ先を彼女に向けた。

「力を持つ者の責務を果たさぬのならば、ここで死ね」

「みんな……！　僕が捕まつたばかりに……！」

死力を尽くして戦っている仲間達の姿を、ピリポは処刑台から暗澹とした表情で見てる。そして戦場と化した庭園内に積み重なっていく死体の山を目にし、胸が詰まるような悲しみに襲われた。

「くそつたれ！　こんなに兵士を失うことになるとはとんだ誤算だ！　これじやあ懸賞金が手に入つても大赤字じやねえか!!」

怒りにわなないでいるマモンは、処刑台の下でディーナと対峙しているファウストを苦々しげに睨みつけた。

「それだけじやねえ、このままだとあのファウストに手柄を横取りされちまう！　あいつが邪教徒共を始末したところを見計らつて、俺があいつを直々に葬つてやる!!　そうすりや、金はみんな俺のものだ!!」

「ひど過ぎるよ！　街の人も、あなたの部下も、たくさん死んでしまった！　それなのにあなたはお金のことしか気にしてない!!」

ピリポが悲痛な面持ちでマモンを見上げながら叫ぶ。

「当たり前だろう!?　俺が支配している街の住民と俺の金で雇われた兵士がどうなろうと、俺の勝手だ！　金のある奴が、全てを手にするんだよ!!」

「違う！　自分の命は、他の誰のものでもないよ：！　人の命を売り買いして、自分のことをしか考えないあなたは…偉くも強くもない!!」

「このガキ…言わせておけば……！」

額に青筋を立ててマモンがピリポへ向き直った。

「ちょうどいい。ファウストを殺す前に、魔法の試し撃ちをしてくれるわ！」

マモンが片手を差し出すと、その掌の上に火の玉が現れた。

「貴様の邪な思想」と、焼き払つてやる！　灰燼に帰せ!!」

灼熱の火の玉は一回り二回りと巨大化し、逃げ場のないピリポの身体を煌々と照らした。やがて火の玉は角を生やした鬼の生首のような形へと変形し、大きく開かれた口がピリポに食らいつこうと猛進した。

熱風が顔に打ち付け、息苦しさにピリポは少しの間顔を歪めたが、猛火が彼の身を焼くことはなかった。一人の兵士がピリポの目の前に立ち、背中でマモンの魔法を代わりに受け止めていた。それはディーナに敗れ、気を失つていた邪道騎士だつた。

炎を凌いだ後、邪道騎士は床に捨て置かれていた弓と矢を拾い上げ、振り向きざまにその矢を放つた。予想だにしない事態に面食らつていたマモンの頭を矢はかすめ、彼は足を滑らせ処刑台の下へ転落した。

邪道騎士はよろめきながら剣を手にすると、ピリポを杭に繋いでいた縄を断ち切つ

た。そして邪道騎士は崩れ落ちるように座り込んで首を前に垂れると、そのまま動かなくなつた。

マモンが放つた火炎魔法の力が加わつても、大邪神の鎧には焦げ目の一つも見受けられなかつた。しかし、鎧を着ている兵士の肉体は致命的な怪我を負つたようだつた。座り込む邪道騎士の周りに血だまりが広がつていく。

「どうして…僕を庇つたりなんか……」

拘束を解かれたピリポは放心して立ち尽くし、邪道騎士を見つめている。

「…助けるのが遅くなつて…ごめん……。兄ちゃん……」

消え入るような邪道騎士の声に、ピリポは耳を疑つた。邪道騎士の傍らにしゃがみ込み、恐る恐る両手でその兜を取り外す。

「バルタ!? なんでお前がこんなところで…大邪神の鎧を着てるの!?

兜の下から現れたのは、ピリポに似た少年の面差しだつた。

「俺はもともとこの街の警備兵だつた…」

レブロブスと刃を交えた邪道騎士は、戦う気力を完全に失つた様子で彼に視線を向けた。

「病気にかかつた女房のために薬代が必要になつたが、俺の稼ぎではとても手の届かな

い額だつた。借金の相談をしようにも、俺のような貧乏人の話を聞いてくれる奴なんかこの街にいない。それに借金が女房のためだとばれれば、俺は偽善者として異端審問会に通報されちまう。困り果てていた時、俺がこの鎧を着ることと引き換えに薬代を肩代わりしてやると、マモンが取引にやつて来たんだ：」

邪道騎士から自嘲するような乾いた笑いが漏れる。

「取引に飛びついた俺はまんまと騙された。この鎧が装備した者に地獄の苦しみを与え、死ぬまで脱ぐことが許されない呪われた鎧だと気づいた時には後の祭りだ。マモンは：俺がろくな戦果を挙げず、痛みに耐えかねて自殺しようものなら、女房を売春宿に売り飛ばすと俺を脅した……！」

眉を顰めて邪道騎士の話を聞いているレブロブスに向かつて、彼は救いを求めるように手を伸ばした。

「なあ、俺は強かつただろう！？ もう、十分戦つただろう！？ 頼む、俺をこの苦しみから解放してくれ！ 身体中の皮を剥ぎ取られ、火に炙られるように痛いんだ！ 殺してくれ……！」

その場からふらふらと歩き始めた邪道騎士はレブロブスの目の前で立ち止まるとき、兜を脱いだ。

レブロブスは戦斧の柄を強く握り直し、厳かな表情で邪道騎士の顔を見据える。

「ああ。お前は強かつた。そして孤独な戦いの中で……お前は女房を守り抜いた」

苦痛に取り憑かれ青ざめている若い男の顔が和らぎ、レブロブスへ微笑んでいた。

レブロブスが戦斧を水平に振るうと、男の首が胴体から離れ地面に落下した。途端に胴体の切断面から赤い煙が立ち上ったかと思うと、男の遺体は白骨と化し、鎧と共に音を立てて石畳の上に転がった。まるで大邪神の鎧が血の一滴も残さず男を食らい尽くしたかのようだつた。

「黒い羽共が欲望のために弱者を食い物にし……生き方を選ぶ意志すら奪うことが……善行だつてのか……？」

散らばつている鎧と白骨に呆然と目を遣りながら、レブロブスが呟く。やがて彼の隻眼には、胸中渦巻く憤激が収斂した強い光が灯つた。

「おかしいだろう!? 何もかもが狂つてやがる!!」

怒声を吐き歯噛みするレブロブスへ、マモンの兵士達が迫り来る。

「俺には、まだ足りねえ……このふざけた世界に喧嘩を吹っ掛けるだけの力が！ 何者にも支配されない、強い力が!!」

「パルタ、待つて！ 傷を治せる仲間を連れて来るから……！」

立ち上がるこうとしたピリポを、弟のパルタは弱々しく首を横に振つて留めた。

「兄ちゃんに伝えなきやいけないことがあるんだ。僕の話を聞いてほしい……」

ピリポは息を殺してパルタの言葉の続きを待つた。

「父さんと母さんは：本当は兄ちゃんを手放したくなかったんだ。兄ちゃんをゴルゴダに送ったことを、今も後悔してる……」

「そんな！ 父さん達は、賄賂を支払わなくとも済むようにしたくて、僕をゴルゴダの牢獄の看守にしたはずじゃ……！」

「村の奴らが要求してくる金額がどんどん上がつていって、父さん達は金を使い果たしたんだ。それで仕方なく兄ちゃんをゴルゴダに送るのを決めたんだよ。金でしか兄ちゃんを守ることができなかつたのに、それすらもできなくなつて情けないって：父さん達は毎日泣いてた。それを見ているのが嫌で：僕は家を飛び出した……」

夥しい血を流しながらもパルタが真相を語るのは、大邪神の鎧に込められた魔力のためか、肉体の限界を凌駕した彼の精神力によるものかはわからない。

「僕は兄ちゃんとは違う、一人でもなんでもできる人間なんだ。そう思つてパンデモニウムに來た。でも違つた。僕は両親に保護されて思い上がりつていただけの、子供だった。仕事が見つからなくて街をさまよつていた時、僕はマモン様に拾われ傭兵になつたんだ」

血を吐き赤く染まつたパルタの唇が震えている。

「マモン様の権力を笠に着て…僕は自分が偉くなつたつもりでいた。マモン様の言い付けで税金を取り立てる相手に暴力を振るつたり、他の傭兵達と一緒になつてやりたい放題だつた。おだてられていい気になつて…利用されることに気付かなかつた。そして、命を捨てる覚悟で大邪神の鎧を着て邪教徒達と戦えば英雄になれる」とマモン様に言われ…僕は何の疑いもせずにこの鎧を着てしまつたんだ……」

「こんな物を着なくたつて、お前は頭もよくて運動もできて…僕よりずっとずっと強かつたのに……！」

「僕は…周りから弱者と呼ばれていた兄ちゃんが嫌いだつたよ……。実家にいた頃、僕がどうして兄ちゃんを狩りに連れ出していたのかわかる？　僕は狩りの腕に自信があつたから、兄ちゃんに見せつけてみじめな気持ちにさせてやろうと思ったんだ。身体の弱い兄ちゃんには、何もできないだろうと思つて……」

俯くパルタの表情には、深い悔恨の念が刻まれていた。

「でも、兄ちゃんは逃げ出さなかつた。下手くそでも弓を引き続けて、いつの間にか僕が仕留めたこともない大きな獲物を狩るようになつた。そして…ここでマモン様に立ち向かつた兄ちゃんを見てやつとわかつたんだ。本当の強さを持っていたのは…兄ちゃんだつたんだ……！」

ピリポの双眸から、小さな真珠のような涙がとめどなく転がり落ちる。

「僕は家の外に出ることを禁止されてた。だからお前が僕をこつそり森に連れて行つてくれたこと…本当に嬉しかったんだよ…！」弓を引き絞るお前はかつこよくて：僕はお前の兄ちゃんでいることが誇らしくて…！」お前がどう思つていたとしても、一緒に森で過ごした時間は、僕の生きがいだつた!!」

涙するピリポを鏡に写したかのように、顔を上げたパルタも頬を濡らす。

「やり直すことが…できたらな…。そしたら、誰かに言われたからとか、みんながそうしてゐるからとかじやなくて…自分が信じた道を行くんだ…。兄ちゃん、一緒にケデロンの村に帰ろう…。もう誰も兄ちゃんのこと…弱者だなんて言わないよ…。だから…父さんと母さんと…みんなで…」

「うん、一緒に帰ろう…。だから、パルタ！ 死んじや駄目だ!!」

鎧の継ぎ目から漏れ出した赤い煙が、ピリポの視界からパルタの全身を覆い隠した。そして煙が消え去ると、鎧と白骨を残してパルタは消滅していた。

「パルタ――――――ッ!!」

泣き叫ぶピリポは鎧に埋もれている骨からパルタの頭骨を見つけ出し、震えながら胸の中にそつと包み込んだ。

「…命の価値を決めるのがお金だけだなんて…そんなの嘘だ!! だつて命は…生きようとしていた。パルタの命は、こんなに綺麗だつたのに!!」

現実は、ピリポに弟の死を悼む時を満足に与えてはくれない。雇い主のマモンが倒れた今も、生き残った傭兵達は仲間達を攻め立てている。そしてファウストとの鎧迫り合いの末、ディーナは剣を弾き飛ばされ危機に瀕していた。

「パルタ、僕は強くなんかないよ。僕が本当に強ければ、お前は死ななかつた」
泣くことを止め、目の前の鎧を見据えるピリポの瞳にも、レブロブスと同じ決意の光が満ちている。

「もう二度と、こんな思いはしたくないんだ！　強くなりたい！　大切な人を守れる力が欲しい!!」

ヨハネは兵士達と戦いながらも、レブロブスとピリポのただならぬ気配を感じ取つた。

「レブ、ピリポ！　何をするつもりじゃ？」

二人は背中に手を回し、自らの白き羽を握りしめている。

「羽を剥ぎ取り鎧を着るつもりか!?　早まるでない！　お前達では無駄に命を散らすだ

け——

焦るヨハネが叫ぶ声を、二人が発する鮮烈な光が遮つた。その光が収まつた後、虚空に乱れ散る無数の白き羽根の中に、大邪神の鎧を身に付けた二人の姿があつた。

驚きのあまり、ルピルピとヨハネは我を忘れている。

「さつきの光、太陽の神殿でディーナが鎧を着た時と同じだわ！ それに、なんて禍々しい力なの!?」

「新たなる救世主の降臨…… よもや…あの二人までもが大邪神の鎧の適合者だつたとは……!!」

高貴と威厳を帯びる黒の装甲に身を包み、紅蓮の炎を宿したような赤いマントをたなびかせ、雄叫びと共にレブロブスが戦斧を振るう。その勢いから生じた突風と業火が、レブロブスを取り囲んでいた兵士達を立ち所に飲み込み、骨すら残さず焼き尽くした。

すかさずヨハネの魔術によつて追い討ちを掛けられ、総崩れとなるマモンの兵士達。

ピリポはパルタが使つていた弓と矢を手にして立ち上がり、勇ましくそれを引き絞つた。放たれた矢は光を纏いながら放物線を描き、ディーナに斬り掛かろうとしたファウストを阻んだ。矢は流星が落下した跡のように石畳と地面を抉り、ファウストの眼前の地中に深々と突き刺さつている。

「それ以上ディーナに近付いたら、次は絶対に当てる!!」

涙に濡れた目をすがめ、ピリポは既に一の矢の狙いをファウストに定めている。黄褐色がかつた落ち着きのあるオリーブ色の装甲と清々しい萌葱色のマントに身を固め威容を示すピリポに、かつてゴルゴダの牢獄で虐げられていた頃の惨めな面影は片鱗もな

い。

「時代が移り変わつても……お前達は何も変わらないな……」

「いいだろう。お前達の信念とやらがどこまでこの世界に通用するか、せいぜい這いつくばつて確かめてみるんだな。お前はもう少しまともに鎧の力を使えるようにしろ。このまま持ち腐れにする気ならば、必ず殺す」

ディーナに向き直つたファウストは捨て台詞を残してマントを翻すと、瞬時に姿を消し去つた。

ピリポは安堵の溜め息を漏らし、構えていた弓をおろす。

敵兵を殲滅し、焦土と化した庭園一帯を眺めた後、振り向いたレブロブスが氣前のいい笑顔をガイウスに見せた。

「どんなもんよ！　俺の強さに驚いて腰が抜けちまつたか？」

石像の台座にもたれ掛かりぐつたりと座り込んでいるガイウスは、悔しそうにレブロブスを睨みつけている。

「屈辱だ……お前に助けられるなんて！　おまけに、お前とピリポの奴も伝説の勇者の仲間入りだつて？　冗談きついぜ……」

「それだけ舌が回りやあ、大丈夫そうだな。ほら、早くルピルピに治療してもらえ」

レブロブスに肩を借り、ガイウスはどうにか立ち上がった。

十

「ピリポ君!!」

「ディーナ!! 怪我はない!?」

処刑台の階段を降りたピリポの元へディーナは駆け寄り、涙を滲ませながら彼に向かい合つた。

「ごめんなさい。私のせいで、あなたを危険な目に遭わせて……！」

「ディーナは少しも悪くないよ。油断してた僕がいけなかつたんだ。助けに来てくれて、ありがとう」

ピリポは泣き腫らした目を落とし、顔を曇らせた。

「僕はこの鎧を……弟のパルタから受け継いだんだ。そしてパルタは本当のことを持ち明けてくれた。君の言うとおりだつた。父さんも母さんも、僕のことをどうでもいいなんて、思つてなかつた……」

「ゴルゴダでお前の身の上話が聞こえてきた時、妙だと思つた」
ルピルビの回復魔法をその身に受けながら、ガイウスが言つた。

「お前の両親が面子しか気にしていなかつたのなら、お前を隠しながら育てるなんて回りくどいことはせずに、殺しちまえばよかつたんだ。親の生殖能力が失われない限り、子はいくらでも代えが効くつてのが黒き羽共の考えだからな。それをしなかつたつてことは、お前の両親も相当邪悪な奴らだつたつてことだ」

「ガイさんも僕の話を聞いて、いろいろ考えてくれてたんだね。僕は…自分が弱者だという不運に囚われて、周りのことが何も見えてなかつたんだ……」

「…お前が惨めつたらしい声で話してたのが嫌でも耳にこびり付いてただけだ。それよりディーナ、まだマモンの野郎に用があるだろ？ 早くしねえとレブがあいつをミンチにしちまうぜ。あいつはレブの嫁と子供の仇だつたらしい」

ガイウスの言葉にディーナはハツとしてレブロブスを見遣つた。

「さあ、お前が自慢の金で揃えた兵士共はいなくなつた!! どうするつもりだ!!」

処刑台の近くに倒れていたマモンの胸倉を掴み上げ、レブロブスが般若の形相で怒鳴り付けている。

「わ、わかつた！ お前達は強い！ 自分の力量を顧みずお前達に戦いを挑んだ俺が馬鹿だつた！」

マモンは脂汗を流しながら態度を一変させていた。

「お前達の強さを見込んでだ、俺の傭兵にならないか!? 一生遊んで暮らせるだけの金

をやるぞ！ 裏金を動かして、教団からもうまく匿つてやる！ どうだ、悪い話じやあないだろう？』

「その金は、お前が街の人間の生活を踏み躡つて得た金だろう!! そんなあぶく銭に俺達の目が眩むと思つたか？ どこまでも性根の腐つた奴だ……今までの報いを受けやがれ!!」

「レブよ！ 気持ちはわかるが、一旦抑えてくれ！ こやつに教皇庁の場所を知つているか問わねばならん」

猛烈な殺意を込めて拳を振り上げたレブロブスをヨハネが制した。

「教皇庁？ し、知つていてるぞ！ 話すから、命だけは助けてくれ!! 教皇庁は…かつ…!!」

息を詰まらせたマモンの口がそれ以上話をすることはなかつた。空を切つた一本の短剣が彼の首を突き抜いたのだつた。

口から血の泡を飛ばしもがき苦しんでいるマモンを前に、一同はただ当惑している。「おしゃべりな男つて、嫌いなのよねえ。自分のことしか話さないから、うんざりしちやう。そう思わない？ ディーナちゃん」

短剣が飛んで来た方向から一個分隊程の神官兵達を引き連れて現れた女の姿に、ディーナとピリポは目を見張つた。

「あなたは……！」

「万屋のお姉さん!? やつぱり、僕達の敵なの……？」

そこにいたのは商店で出会った例の赤い瞳を持つ女だつた。今は商人の出で立ちではなく、胸元や太腿を露出した扇情的な衣装を身に纏つてゐる。

「私の部下があなたに意地悪しちやつたみたいね。後でよく叱つておくわ」

女は小首を傾げ、艶めかしい笑みを浮かべてディーナを見つめている。
「でも、しようがないわね。あなた達はとつても悪い子だから……ここで死んでもらわなきやいけないの」

女のたおやかな人差し指が、ディーナ達に突き付けられた。

「私は異端審問十字軍隊長のルカ。邪教の信奉のみならず、大邪神の力を使つて世界の崩壊を企てるあなた達には、アングエルス教団総本山から直接の抹殺命令が下されたわ。教皇様の名において、我ら異端審問十字軍があなた達を処刑する」

「黙つて聞いてりや、勝手なことばかり言いやがつて……！」

身体の傷が癒えたガイウスが槍を構え、臨戦態勢に入る。

「ルカとやら、お主は何か誤解をしておるようじや。わしらは世界の崩壊など望んではおらぬ。話し合う場を設けてはもらえぬか?」

思い煩つてゐる様子のヨハネの提案を、ルカは一笑に付す。

「問答無用よ、おじさま。それじゃ、あなた達が奪つた大邪神の鎧もまとめて返してもらうわ！」

ルカの手振りに従い、神官兵達はディーナ達へと襲い掛かった。

十一

「なあらほど…。これはちよつと面倒なことになつたわ」

ディーナ達と異端審問十字軍との戦局を静観しながら、陣形の最奥に立つルカは独り言ちていた。

異端審問十字軍。世界の霸権を握るアングルス教団が誇る異端審問会の中で、類い稀なる武芸を有する神官兵を結集させた武力組織である。

盤石の強さを持つ神官兵達に、数で明らかに劣つてゐるディーナ達は互角に渡り合つてゐる。彼女達の動きは戦の素人集団とは思えない程統制が取れていた。

ルカの視点から、不利な戦況を開拓する策を反射的に編み出し仲間達への指示を出しているヨハネの戦略家としての役割が大きいように思えた。更に彼自身も強力な魔術を用いて大砲の弾を飛ばすように神官兵達を蹴散らしている。

そして新たに大邪神の鎧を装備した二人のいずれも、闘技場での戦いの時と比べて格

段に戦力が向上している。

極め付きの脅威は剣を手にしたデイーナだ。繰り出される妙技は、先程まで彼女自身を追い詰めていたファウストのものと寸分違わなかった。僅かに剣を交えただけで、デイーナはアンゲルス教団一剣術の腕が立つファウストの技を写し取っていた。彼女に対峙した神官兵達は為す術もなく倒れていく。

「大邪神の鎧の力がここまでとは…。決着が付くのも時間の問題ね。直ちに総本山へ帰還し、より優れた抹殺部隊を編成しなければ」

転移の魔術を詠唱しその場から姿を消すまでの間、ルカは自らを囮う神官兵達の先で剣を振るつていてデイーナに熱い視線を送つていた。

「不思議ね。私好みの顔だから、首だけでも持つて帰りたいときまでは思つていたけれど…。それだけじゃあ満足できなさそうだわ。生きたままあなたを独り占めして、いじめ抜いてあげたくなつてきちゃつた。こんな気持ち、初めて……」

甘美な吐息のような咳きは、戦場の喧騒の中へ溶けていった。

「教皇つて奴は随分と手荒な挨拶をしてくれるじやねえか！　こうなりや何が何でも教皇の場所を突き止めて、こっちも相応の礼をしねえとな」

「僕…鎧の力がなかつたら…百回くらい死んでたと…思う……」

ディーナ達が異端審問十字軍との戦いに勝利を収めた後、マモン邸の庭園内。レブロ
ブスは血氣盛んに鬪志をたぎらせ、ピリポは両手を膝に突いて息を切らしている。

「頭の女は戦いもしねえで逃げやがつた。…お前も毎日飽きねえな……」

日記帳に囁り付いて執筆にいそしむルピルピを、ガイウスが憮然たる面持ちで眺めて
いる。

「あの女、やーな感じ！ ちよつと顔とスタイルがよくて胸が大きいからって、調子に
乗ってるんだから！ 今度会った時こそあの女に私達の強さを教え込んで、総本山の人
達にも私達が正しいってことをわかつてもらわなきや！」

仲間達の輪から外れ、むせ返るような血の匂いに包まれ変わり果てた庭園を、ディーナ
は見渡している。酸鼻を極める屍の中に、目を見開いたまま絶命しているマモンがい
た。

「あとどれくらい、血を流せば……」

掴みかけたゼロ救出の糸口は脆くも潰え、ディーナの中には鬼胎だけが残った。
ディーナの過去を知るファウストの言葉と失われた記憶が、得も言われぬ重圧となつて
伸し掛かる。

「ディーナ。僕はまだ実家には戻らないよ。早く君の御主人様を探しに行こう」
俯ぐ、ディーナの背中をさするかのように、ピリポが声を掛けた。

「でも…ピリポ君の御両親は、きっとあなたに会いたいはずだよ」

不安そうにデイーナが振り返ると、澄み切った瞳を彼女に向けて微笑むピリポがいた。

「僕は…父さんと母さんと…パルタが守ってくれたこの命に、胸を張つて生きたいんだ。自分が決めたことを、逃げ出さずにやり遂げたい。父さんと母さんの所に帰るのは、この旅が終わつてからじやないといけないんだと思う」

日溜まりのような温もりを持つピリポの笑顔が、強張つているデイーナの心を解きほぐしていった。

「デイーナにとつて大切な人は、僕にとつても大切な人なんだ。だから早く、君に会わせてあげたい」

心に沁み渡るこの温かさは、ピリポの限りない勇気と慈悲なのだとデイーナは気付く。

二人の会話を聞いていたレブロブスが冷やかしの口笛を吹いた。

「なーにいつちよ前に色気付いてやがるんだ？ けどよ、何だか昨日よりお前の男っぷりが上がつたみてえだな…これも大邪神の鎧の力なのか？」

「お前の場合は鎧を着ててもそちらのヒキガエルに劣るがな」

「ガイ、てめえはやつぱりいつぺんぶつ殺す!!」

レブロブスとガイウスの言い争いに束の間の安息を見出した一行は口元を綻ばせる。

「みんな、ありがとう…」

仲間達の顔を見つめながら、微笑を湛えたピリポは囁く。

「僕にも愛つてものが何なのか、少しだけ…わかつたような気がするんだ…」

第六章 暴食の街力ナン

一

森の奥でルピルピが苦しそうに咳き込んでいる。木の幹に片手を突いて背中を丸め、肺の底で蠢く病魔を必死に抑え込もうとする。足元に生える草を濡らしているのは夜露ではなく、口を覆つた指の隙間から滴る血だつた。

悪魔の鎧は着実にルピルピの生命力を蝕んでいる。衰弱していく自分の姿を、彼女は仲間達に決して見られたくなかつた。だからこの日も発作が起ることを悟るとすぐ、眠りに落ちた仲間達がいる野営地から離れて孤独な戦いに身を置いていた。

猛り狂つていた魔物はやがて鳴りを潜め、体内に仮初めの平穏が訪れる。呼吸を整えたルピルピは、俯いたまま小さな吐息を漏らした。

「発作の頻度が高くなつてるな」

強い風が吹いた。不意を突かれて早鐘を打ち始めたルピルピの鼓動に同調するかのように、木々がざわめく。月を隠していた厚い雲が動き、その光が木立の間から現れた男の姿を照らし出した。

「女の子の秘密を覗き見するなんて、ガイはむつりスケベだったのね。日記に書いと
かなくっちゃ！」

口元に付いた血を拭い、ルピルピは努めて悠然と背後に立つガイウスへ言つた。

「もう平氣。ほら、早く戻りましょ」

「なぜお前はそこまでしてあのじいさんに尽くそうとするんだ」

鋭い眼差しと言葉がルピルピの背中に投げ掛けられる。

「お前の身体がそうなつたのも、元はと言えばじいさんの野心のせいだ。お前はあいつ
にとつて駒の一つに過ぎない。それでもお前は残りの時間をあいつのために費やすの
か？」

「時間がないから…だからなおさらよ！　私の命を私が好きに使つて何が悪いの!?　誰

にも迷惑だつて掛けてないわ!!」

振り返ったルピルピの瞳は悲しみと怒りに濁つていた。

「お師匠様は、初めて私の研究を認めてくれた人。私の知識は唯一無二だつて：自分の
悲願を達成するためには、私の力が欠かせないつて：私を必要としてくれた。だから私
はお師匠様に弟子入りして、この人の役に立つためだけに生きようつて決めたわ。お師
匠様が喜んでくれさえすれば、私は幸せなのよ！　私の身体なんて、もうどうでもいい
の！」

「なるほど、じいさんはそうやつてお前の孤独に付け込んで懷柔したつて訳か。さすがは徳のある大神官をやつてただけあるな」

「ガイは黒き羽達の社会の中で、聖人として崇められるくらいモラルが高いわ。他人をこき下ろして、気に入らなければ殺して、自分がいつも正しいって顔してる」

ルピルピは声を震わせ、大理石の彫刻のようにつややかで表情の変化のないガイウスの顔を睨み付けた。

「でも私は…あなたが嫌い。あなたは血だらけだわ。死に一番近い臭いが染み付いてる……！」

そして足早にガイウスの側を通り過ぎた所で立ち止まつた。

「あなたなんかに…私の気持ちがわかるはずないのよ……」

彼女は野営地の方向にある茂みへ消えた。

月の光は再び雲によつて陰り、ガイウスは一人闇の中に取り残された。

二

「次の街は、まだかな？　お腹が空いたよ…」

「縛まりのねえ奴だ。この間の威勢のよさはどう行つたよ？」

森の中をとぼとぼと歩くピリポの隣で、レブロブスが呆れ返っている。

「だつて…昨日の夜もレブさんが僕の分のおかずを食べちゃうんだもん……」

ピリポの恨み言をレブロブスは笑い飛ばす。

「ちんたら食つてるのが悪いんだよ！ この世は素早い判断と行動ができる人間しか生き残れねえからな」

「お前は飯を食う早さよりその鈍足をどうにかしろ。団体ばかりでかくて、戦う時も目障りだ」

「うつせえ！ ちよこまか動き回るだけが取り柄のお前と俺じや、格が違うんだつつの!!」

睨み合うレブロブスとガイウスを見てやれやれと力なく笑つた後、ヨハネがピリポへ言つた。

「もう少しの辛抱じやよ。この森を抜ければじきにカナンの街へ着く。聞くところによると、カナンは美食の都と評される程出される料理が美味であるそうじや」

期せずして新たな大邪神の鎧を入れ、パンデモニウムで異端審問十字軍との激闘を制した一行は、次の目的地であるカナンの街を目指して旅を続けていた。

「ルピルピちゃん」

仲間達の他愛ない会話を聞きながら、ディーナは下に向いて黙々と歩いているルピル

ピに声を掛けた。

「顔色が悪いよ。休憩しよう？」

「レブのいびきがうるさくてよく眠れなかつただけだから気にしないで。困っちゃうわ、睡眠不足は美容の天敵なのに」

「顔を上げたルピルピにはいつも明るさが戻つていたが、デイーナが感じた不安は消えなかつた。」

しばらく一人が黙つて歩いていると、ルピルピが声を潜めて言つた。

「デイーナは怖くなつたりしない？　信じている愛が、やつぱりただの幻想かもしけないつて…」

その目は必死に答えを求めている。

「一人が寂しいからとか、自分の地位を高めたいからとか、勝手な理由で誰かを求めている人ばかり。お金を稼いだり外見を磨いたりしながら、お互いがお互いにとつて都合のいい掘り出し物を探し合つてゐだけ…。こんな虚しい世界で、本当の愛なんて見つけられる？」

「愛つていうのは…どこかで見つけ出すものじやなくて、その人に備わつてる力みたいなものだと思う」

「愛するためには能力が必要だつて言うの？」

「うまく言えないんだけど…自分の中に愛が生まれるのかも、相手の心の中に愛が生まれるのかも、最初は何もわからない。何の確証もないのにそれを信じ続けることは、すごく大変で勇気がいる。それでも諦めないで不確かな未来に踏み込んで行く人に、愛する力が芽生えるんじやないかな」

頭上から降り注ぐ柔らかい木漏れ日が、ディーナがゼロと過ごした日々を思い出させていた。

彼女が意識を取り戻してから初めて家の外をゼロと共に歩いた日。散策を始めて近くの森に差し掛かった時、木の根につまずいて転びかけたディーナをゼロが受け止めた。顔を見合せ微笑んだ二人は、重なった手を繋いだまま森の中を進んだ。

その情景はただ眩しく、温かい。

「怪我を負つていつ目を覚ますかわからない状態だつた私の看病を、ゼロはしてくれた。誰かを助けることが罪になるこの世界でずっと、たつた一人で。ゼロがくれたものを疑つてしまつたら…私は大切なことを失つてしまう気がする。だからゼロが信じているものを、私も信じてる」

「あなたの御主人様はあなたが必要だから愛を口にしたんじやなくて…愛することができる人だからあなたを必要としたのね……」

「ルピルピちゃんが愛する人の心にも、愛が生まれてるといいな。ルピルピちゃんも愛

することができる人だから」

何かに怯えているような表情をしていたルビルピは、その恐怖から解放されて穏やかな笑顔を浮かべた。

「やつぱりあなたは、大邪神の鎧を着るにふさわしい人なんだわ」

「見えたぞ。カナンの街じや」

森の出口へ辿り着き、ヨハネが仲間達へ声を掛けた。

視界を遮っていた木々がなくなると、リベイラとパンデモニウムの街にも存在していた、地上から天空へと斜めに伸びる巨大な鎖が一行の目に飛び込んだ。その鎖に縛り付けられているかのように、鎖の根元に街が広がっている。

三

「な、なんなんだよ、この街は!?」

街の様子を目にしたレブロブスは啞然としている。他の者達もその胸中は同じであつた。

軒を並べているのは飲食店ばかり。店先から漂う珍しい調味料や香草の匂いに当たられ、ディーナは嗅覚だけでなく意識まで混濁しそうになる。

街のあちこちを見回すと、屋外に備え付けられたテーブルに寄り掛かっている肌色の小山がひしめき合っている。小山は肥え太つた人間達だつた。彼らは手掴みで料理を口に運び、皿に顔を突っ込んでなめ回し、最後の一瞬まで食事を堪能し尽くしている。知性や情緒、あらゆる人間性が食事をするためのエネルギーに変換されていた。そして彼らは満腹になると階段のように突き出た腹を揺すりながら所構わぬ寝転がり、安穩に満ちたいびきを響き渡らせている。

「街の人達は食べるのに夢中で私達に見向きもしないね。ああやつてずっと食べることとと寝ることを繰り返してるのでかな」

「どうやらこの街では、聖書の教えとして貴ばれている怠惰と暴食が厳格に遵守されておるようじゃ」

「みんな幸せそうな顔をしてるなあ。お腹がいっぱいになつてうとうとしてる時間は、僕も大好きだよ」

街の住民達に驚愕するディーナと感心しているヨハネの隣で、物欲しげに立つピリポが控えめに腹を鳴らした。

「要するにこの街の連中は悩まぬ豚だ」

ガイウスは心底から嫌悪感をあらわにし、黒い羽を生やした住民達を睨んでいる。

「日先の欲望を満たすだけで、自分を取り巻く社会や自身の生き方に何の疑問も持たな

い。こんな奴らに俺が劣っているだと…？」

「わあっ、びっくりした！　私以外の白い羽の人を久しぶりに見たよー」

一行が声のした方を向くと、大きな籠を両手に提げている白い羽の少女が立っていた。

少女は人懐こい笑顔でガイウスに問い合わせる。

「こんにちは！　あなたもバアル様に雇つてもらうためにここまで来たの？」

「バアル？　誰だそいつは」

「あれ？　知らないんだ。バアル様はこの街の領主様だよ！　この街の人達はね、バアル様から毎日欠かさず私達の所に届けられる飛び切りの食事のお陰で幸福に暮らしている。食べ過ぎで太つて自力で動けない人ばかりだから、私がこうやってみんなの所へ出前に行つてるんだ」

「ねえ、どうしてあなた以外の白き羽の姿が見当たらないの？」

ルピルピが少女に尋ねると、少女は誇らしげに答えた。

「私以外の白い羽の人達はバアル様のお屋敷で働いてるからだよ。バアル様から食料を買うお金がなくなつた黒き羽は自分の奴隸を差し出すの。それから、他の街から来た逃亡奴隸なんかもバアル様は受け入れて仕事を与えてあげてるんだつて。お屋敷ではすごくいい待遇で働けるみたいで、誰もお屋敷から出たがらないんだ。お屋敷から帰つて

「見た人を見たことないもん」

「逃亡奴隸を匿う!? それが本当なら、その領主はとんだ偽善者だな!!」
レブロブスは疑わしげに少女の話を聞いている。

「でもバアル様は奴隸の私にも労いの言葉を掛けてくださるし、街のみんなに慕われてるよ! 私もバアル様のお屋敷で働きたいんだけど、私の御主人様は身の回りのことが何もできない人だから私を手放してくれないんだよねえ。いけない! 出前に遅れちゃう!!」

忙しなくその場から走り去る少女を見送ると、ヨハネが口を開いた。

「あの娘の話を信用するなら、バアルはユダやマモンとは一風変わった領主のようじゃ。あわよくば穩便にディーナの主人の情報を得られるかもしけん。わしらが教団と対立する中で、バアルが有力な後ろ盾となる望みすらある」

「けどよお、じいさん! 黒い羽共は何よりも保身に走る奴らだぜ? ましてや領主の座に就く権力者が進んで七つの大罪を犯すような真似をするとと思うか?」
レブロブスの言葉にヨハネは考え込んでいる。

「僕はさつきの人人が言つてた飛び切りの食事っていうのが気になるよ。どんな御馳走なんの」

んだろう？」

ピリポが瞳を輝かせながら言った。

「それはもう、一度舌にのせれば人であることも忘れ食悦の虜となる絶品でござりますよ」

「うなんだ、食べてみたいなあ……」

彼はその目をしばらく瞬かせた後、飛び上がった。

「おじさん、誰!？」

いつの間にか一同に紛れて黒羽の初老の男が佇んでいる。上品なスーツを着こなしている彼は、細いヒダの付いた白手袋をはめた左手を胸に当てて恭しく頭を下げた。

「申し遅れました。私めはこの街の領主であらせられるバアル様に仕える執事でござります。失礼とは存じますが、大魔道士ヨハネ様と大邪神の鎧を手にしたお連れの方々とお見受けいたします」

執事は頭を上げて優雅に微笑んだ。

「バアル様はあなた方とお目にかかりたいと申しております。食事の席を設けましたので、どうか屋敷までお越しいただけないでしょうか」

「早速仕掛けてきやがつたな。どうする？ 十中八九、罠だぜ」

顔を顰めているガイウスを見ながらヨハネが頷く。

「いずれにせよ領主には会わねばなるまい。多少の危険は承知のうえで参るとしてよう。虎穴に入らずんば、じやよ」

四

「いらっしゃいませ、どうぞごゆつくり」

執事に案内されバアルの屋敷に辿り着いたデイーナ達を出迎えたのは、十数名の白い羽のメイド達だつた。一行が通された広間の席に座ると、メイド達は湯気が立つ料理の皿や酒瓶を次々と食卓に置いていき、手際よく給仕をしている。

「白い羽の人達がここで働いてるのは本当なんだね。でも、みんななどことなくピリピリしてるような気がする……」

デイーナがメイド達を心配そうに見ているとルピルピが言った。

「緊張してるんじゃない？ こんなに立派なお屋敷のメイドになれるなんて、白き羽にとって普通じゃ考えられないことだもの！」

「おい、ここで働くことに何も不満はないのか？」

ガイウスが近くを通りかかったメイドの一人に声を掛けると、メイドはぴたりと立ち止まり硬い表情を崩した。

「もちろんございません。バアル様は卑しい私をこの屋敷に取り立ててくださった素晴らしいお方です。バアル様のおかげで私達は、食べられるのです」

「これ、ピリポ。むやみに料理に手を付けるでない。毒が盛られているやもしれん。美食を味わうのは、バアルにわしらへの害意がないとわかつてからじや」ヨハネに念を押されたピリポはしょんぼりと手に持つていた匙を食卓に戻し、お預けになつた目の前の料理を見つめている。

ディーナも食卓に所狭しと並べられた皿の中身に目を移す。どれも箱庭での質素な生活や旅を続けている中では一度も見たことがない豪華な料理ばかりであつたが、不思議と食欲が湧いてこなかつた。

「よう、こそお越しくださいました！ 私がこの街を治めているバアル・ゼブルです」

広間の奥にある扉が開き、頭に巻き角を生やした黒羽の男が現れた。

「今日はコック長が腕に縫りを掛けて皆様への食事を用意しました。心行くまでお召し上がりください」

「この街の領主にしちゃあ中々の男前じやねえか！ てつきり歩くチャーシュームみたいな奴かと思つてたぜ」

紳士の出立ちに整つた口髭を貯えているバアルの長身瘦躯を見ながら、レブロブスが驚きの声を上げた。

「お招きいただき感謝するよ、バアル殿。せつかくじやが、食事の前に尋ねたいことがある」

バアルが落ち着いた所作でディーナ達と同じ食卓に着くと、ヨハネが言つた。
 「アンゲルス教団に追われる身であるわしらを自らの屋敷に招き入れるとは、どういうつもりじやな？」

「そう、大罪を犯しているあなた方は更に脱獄という罪を重ねた。そして教団に対抗する力を求め、リベイラとパンデモニウムの領主から大邪神の鎧を強奪したのです。そして今度は私が所持しているミカエルの鎧を狙い、この街を訪れた」

バアルの物言いに一同の顔は険しくなる。

すると、バアルの眼差しがディーナへ向けられた。

「しかしながら、大邪神の力を得た娘よ。それらが全てあなたが愛する主人に再会するためだと知った時、私は…胸を打たれました」

「えっ…!？」

ディーナはバアルの口から出た言葉に目を見張つた。

「私も愛の存在を信じる者、教団からすればあなた方と同じ異端なのです。そして私は考えていました。これ以上血を流すことなく、あなた方と教団の確執を解くことはできなかいか、と。対話と強調により困難を乗り越える道を模索していたのです」

「既に教団とは対話を試みておる。じゃが、教団側は聞く耳を持たず、わしらは異端審問十字軍と戦うことになった」

ヨハネがもどかしそうに眉根を寄せた。

「当事者同士ではどうにもならない程、あなた方と教団の遺恨は深い。そこで私が調停者として名乗りを上げて会談を開くのです。政を司る立場上、私は各界の有力者と繋がりがあります。教団の上層部も例外ではありません。彼らを会談の場に招集し、条件付きですがあなた方を赦免することもできるでしよう」

「随分と大きく出たもんだ。で、その条件つてのは何なんだよ？」

レブロブスが隻眼を光らせバアルに問い合わせる。

「一つは、殺戮行為をただちに止めること」

「僕達だって好きで人を殺してた訳じやないよ。街の領主や教団の人達が襲つてこなければ、あんなにたくさん死ななかつた……」

ピリポは暗い面持ちで目を伏せた。

「そしてもう一つ、大邪神の鎧を保有している方が今後その力を世界平和のためだけに使用すると誓い、教団の管理下に置かれること。管理下と言いましても人身の自由や尊厳は保障されるよう先方に掛け合いますので、御安心ください」

バアルは力強くこんこんとディーナ達に言い聞かせ続ける。

「もちろん、教団側にはあなたの主人を解放することを約束させましょう。いかがですか、皆様。あなた方は確かに強い。暴力で教団を屈服させることはできるかも知れない。しかし相手と完全に理解し合うことは絶対にできません。納得させるためには、言論の力が不可欠なのですよ！」

拳を掲げたバアルは仰々しく一同を見渡した。

「私は常に、正義と理性の執行者でありたい。本来対立する立場であるあなた方と私は、こうして一つのテーブルを囲んでいる。教団ともわかり合えるはずです。さあ、共に人間の可能性に賭けてみようではありませんか!!」

「しかし、バアル殿。お主にそれだけの権限があるという確証を、わしらはまだ得ていな
い」

「それは私のことを信じていただくより他ありませんね」

ヨハネに疑いの目を向けられても、バアルは臆することなく毅然としている。

「私はなんとしてもこの大事を成し遂げたいのです。そしてゆくゆくは、争いと差別のない社会を打ち立てたい。黒き羽と白き羽が手を取り合つて平等に暮らしていくる社会です。手始めに私は、街の人々が私に差し出した白き羽の奴隸達を解放奴隸とし、実家に帰らせました。今この屋敷にいる者達にも、いざれ相応の報酬を持たせて暇を出そ
うと思っています」

「あ、愛や平等を口にするだけでなく、そこまで偽善を実行しているの!? 黒き羽がそんな大罪に手を染めるなんて!!」

「それはお互い様でしょう。あなた方もパンデモニウムの街で、兵士の襲撃から住民を守つて戦っていたと伺っていますよ。やはり私達は志を共にする仲間なのです」

仰天しているルピルピへ向かってバアルはにこやかに語り掛けた。

「いいぜ、こいつの話に乗るかはお前が決めろよ」

ディーナを見ながら鋭い目つきのままレブロブスが言つた。

「仮にこいつが俺達の寝首を搔こうとしたなら、その時は教団共々蹴散らしちまえばいい」

「僕のことも気にしないで。僕の旅の目的は、君の御主人様を助け出すことだから。これ以上戦わずに君が御主人様に会える方法があるなら、それが一番だよ」

ピリポはディーナに向かつて微笑む。

「お優しいあなたは今まで苦しんできただことでしょう。もうあなたの主人や仲間の命を危険に晒し、尊い人命を奪わなくともよいのですよ」

教え諭す伝道師の風格で構えるバアルを前にして、ディーナの脳裏に刻まれた数々の死が蘇つた。

ヨハネの魔法を受け、泥のように身体が崩れていったゴルゴダの牢獄の看守達。自分

が初めて振るつた剣に切り裂かれたユダ。闘技場でその生首を宙に躍らせた剣闘士。マモン邸の庭園で積み上げられた死体の山と、とめどなく石畳を流れた血の河。戦うことから逃げたくないと誓つた。だが、敵と剣を交えその命を奪い取るたび、気持ちは底知れぬ淵へ傾いでいった。

「…会談を実現させたいです。あなたと協力して、アンゲルス教団と和平を結びたい」ディーナはバアルを見据え、答えを出した。

「よかろう。黒き羽と白き羽が平等に暮らす社会…。そのような奇論を持ち出す黒き羽を、わしは初めて見た。バアル殿よ。わしも会談の場に赴き、お主のお手並み拝見といくぞ」

「それならば私も御一緒しますわ。この身が果てる日まで、私はお師匠様と共にいます」「よくぞ御決断いただきました!!」

ヨハネとルピルピがディーナに追従し、バアルが喜色を浮かべたその時。

「お前は腹を据えたんじやない。こいつに言いくるめられて楽な方に流れただけだ」

ガイウスの一言に、ディーナは胸を刺された。

彼女を睨むガイウスの瞳には明らかな侮蔑の念が宿り、更にその奥に微かな失望が潜んでいるようだつた。

「お前ら揃いも揃つて頭が腐つてやがる。こんな胡散臭い奴の話を真に受けるなんて

な。正義なんて言葉を簡単に振りかざすような奴を、俺は信じない」

悪罵を吐き捨てガイウスは椅子から立ち上がった。

「どう転んでも、鎧を着てねえ俺は部外者だろ？ 俺は抜けるぜ。お前らは聰明な領主閣下と、好きなだけ馴れ合うがいいさ」

「ガイさん!!」

「よせ、ピリポ!!」

広間を出ていくガイウスを追い掛けようとしたピリポを、レブロブスが制した。

「ガイの言うことも間違つちやいねえ。俺達の勝手にあいつを付き合わせる謂れはねえんだ」

「でも、ここまでずつと一緒に戦ってきたのに…。こんな形でお別れだなんて、何だか寂しいよ……」

俯くピリポの言葉と共に広間の扉が音を立てて閉まった。

「彼が私の理想について賛同していただけないのも、仕方がありませんね。彼は法に基づかず私的制裁によつて、二百人もの黒き羽を殺害したというではありませんか。所詮は野蛮な快楽殺人者。血に飢えた獸と、会話が成立するはずないので」

「ガイウスさんは、黒い羽の人達から奪つた金品を貧しい人達へ分け与えていたと聞いています。人を殺すことを楽しんでいた訳ではありません」

ディーナはガイウスを貶された怒りに表情を強張らせてバアルへ言つた。同時に、その冷笑的な発言から彼の一貫性が失われたような違和感を覚えた。

「まあ、去つた者のことをとやかく言うのは止めましょう。それでは皆様。準備が整うまでどうぞゆっくりおくつろぎください」

ディーナが見ていたバアルの笑顔が突如として二重になり、霞んでいった。すぐに部屋の景色全体が霧のようなものに覆われ、猛烈な目眩に襲われた。他の仲間達も同じようで、椅子に座つたまま不自然に身体を揺らしている。しまつた、と思つた時には身体の自由が利かなくなり、食卓に突つ伏すと意識を失つた。

五

屋敷の玄関ホールへ向かうためガイウスが廊下を歩いている。

「くそつ、どいつもこいつも……」

彼はいつになく冷静さを欠いていた。込み上げる苛立ちは、バアルの提案を無計画に受け入れたディーナ達の迂闊さからくるものであるはずだつた。しかしガイウスは抱えている怒りに本当の理由があることを本心では知つていた。

その理由が結局は欠陥だらけの独善であるため、彼の尊大なプライドがそれを表に出すことを許さなかつた。

ふと立ち止まると、屋敷の奥に迷い込んでいることに気が付いた。どんなに入り組んだ道であつても、一度歩けば普段の彼ならば間違えることはない。

注意が散漫になつてゐる今の自分に余計腹が立ち、舌打ちをしながら来た道を引き返そうとした。

「人殺し!! 娘を返せ!!」

静まり返つていた廊下に、耳を覆いたくなる程悲痛な男の叫びが響いた。その叫びはガイウスを少なからず動搖させたのに留まらず、彼が記憶の奥底に仕舞い込んでいた忌まわしい一場面を振り起こした。

「聞き捨てなりませんなあ。我が主バアル様は、他の街から脱走してきたあなた方親子を、寛大な心でこの館に雇い入れたのですよ？」

叫んだ男に対して突き放した様子で取り合つてゐる別の男の声が聞こえてきた。ガイウスは居ても立つても居られず、声のする方へ歩き出す。

「む、娘があんな殺され方をすると知つていたら、あの領主を頼ろうとはしなかつた!! 見知らぬ土地にでも売り飛ばされた方がまだマシだつたんだ!! 生きて…生き延びてさえくれば、どこかに救いがあつたかもしれないのにつ!!」

「救い？ そんなものあるはずないでしよう。創世記戦争以前、我々黒き羽を誑かしていた汚らわしい白き羽の悪魔共は、我々に生涯その身を捧げることで罪を償い続ける定めを背負っている。その中でも、あなたの娘はバアル様の血肉となる最高の栄誉を授けられたというのに。その不遜な態度、目に余る!!」

ぎやつ、という男の短い叫び声と物音がした後、廊下には再び静寂が訪れた。

男達の声を頼りに着いた突き当たりに、戸が半開きになつていて部屋があつた。室内の明かりが漏れて、薄暗い廊下を照らしている。

ガイウスは足音を立てずにその部屋へ近づき、戸の隙間から中を覗いた。部屋の光景に彼は目を見開き、思わず後ずさつた。

そこでは彼が知る限り最悪の狂氣と残酷が大鍋の中で煮込まれ、まな板の上で細切れにされ、それらがかつて味わつたであろう恨みと苦痛がおぞましい悪臭となつて部屋に充満している。

そして部屋の床に仰向けて倒れている白き羽の男と目が合つた。男は殺氣立つた形相でガイウスに自らの無念と絶望を訴えている。胸には包丁が深々と突き刺さり、既に息絶えていた。

「あああああッ!! なんつということでしょう!!」

死体の側に立っている黒い羽を生やした小太りの男が絶叫した。白いコックコート

とコツク帽子を血で汚しているその男は死体から包丁を引き抜き、部屋の外に立つガイウスに向こう直った。

「私としたことが、生ごみの処理に手間取つて客人を空腹のまま待たせてしまった!! コツク長失格だ!! さぞ不愉快な思いをされたでしよう? 堪りかねて厨房まで足をお運びになる程なのですから!!」

「厨房?!? 厨房だと!? この人間の解体現場のことを言つてゐるのか!?

「大丈夫、すぐ食べられますよ!! どんな料理がお好みですかあつ!?

コツク長は鋭い牛刀包丁を逆手持ちした腕を振り上げてガイウスに突進した。

ガイウスはその片腕を掴みコツク長の関節を極めると、彼をうつ伏せの状態で床に叩き付けた。

「これがお前達が裏で重ねていた所業か!! 今までに何人殺りやがつた!?

コツク長を拘束しながらガイウスが声を荒げる。

動きを封じられてもなお、コツク長は活力に溢れた奇妙な笑顔を浮かべていた。

「今日は新鮮なレタスがたくさん入つたんですよ!! よく塩で揉んで置いたので、取り合わせてサラダにいたしますか!? それともフライにして差し上げましょか!?

「貴様、いい加減にしろ!!」

人の気配を感じたガイウスが顔を上げると、気付けば数名の黒羽のコツク達が彼を取

り囲んでいる。

ナイフをしている彼らは一斉にガイウスへ襲い掛かつた。

コツク長とコツク達の屍の上に、ガイウスは息を切らして立っていた。その手には血に塗れた包丁が握られている。佩帯している槍だけでは狭い廊下での接近戦は不利だと判断し、コツク長から奪つた牛刀包丁一本で彼らを殲滅したのだつた。

「くそお、くそつ、くそつ!!」

投げ捨てた包丁は壁にぶつかつた後行く当てもなく床を滑り、血溜まりの中止まつた。

「どいつもこいつも俺の期待を裏切りやがつて!!」

吐き出された強い感情は過去にもガイウスを打ちのめしたものだつた。均衡を保てなくなつた心に、幼き日々の幻影が忍び寄る。

六

白い羽の少年は毎日決まつた時刻に母親の墓前を訪れる。水汲み、洗濯と家畜の世話、夕餉の材料の下ごしらえと、日課を済ませてから父親が仕事から帰つてくるまでの

間である。

小高い丘に建てられた木の十字架の下に母親は眠っていた。少年が丘に辿り着いた時、太陽はちょうど墓の真後ろの地平線へと沈みかけており、十字架を中心には黄金の光が放射状に延びていた。実年齢にそぐわない凜々しさを備えているその少年は死者の魂や神について既に懷疑的であつたが、その厳かな景色を眺めている時だけは母親の存在を近くに感じた。

少年は墓前に跪くと、摘んだばかりの花を供えてから瞳を閉じて祈りを捧げ始めた。

その日少年は家畜小屋からいなくなつた一匹の豚を朝から探し回つて疲れ果てていた。挙げ句豚は見つからなかつた。父親は豚がいなくなつたことについて自分を責めるだらうと思つたが、搜索を諦めて母親の許へと向かつた。

物心が付く前に病死した母親との思い出はないに等しい。だが、その姿を頭の中で思い描こうとするだけで少年は満ち足りた気持ちになつた。墓前での祈りの時間は、少年にとつて唯一安らぎを得られる時間だつた。

その平穏は突然頭上から身体に降りかかつた生臭い液体によつて破られた。

目を開けると全身を赤い粘液が伝つており、それは母親の墓にも跳ね返つていた。液体から放たれる鏽のような臭いが吐き気を催す。

「よお、ガイ！　お前も親父と一緒に血が大好物なんだろ？　だから御馳走してやつた

んだぜ、残さず綺麗に舐めろ!!

「豚には豚の血がお似合いだ!!」

血だらけのガイウスは立ち上がり、振り返った。

そこには彼と同じ年頃の白い羽の少年が二人立っている。その二人はガイウス一家の近所に住む黒き羽に仕える奴隸の兄弟だ。兄弟はヒステリックな笑い声を上げており、兄の方が手に持っていた空の桶を放り投げた。

ガイウスは家畜小屋からいなくなつた豚の哀れな末路を悟つた。

赤に染まつた顔の中で見開かれた白い目だけが浮かび上がり、兄弟を睨み付けている。

「特権階級の奴らはいいよなあ。死んだらこんな立派な墓まで建ててもらえてよ! 俺達の両親はお前のクソ親父に首を刎ねられて野晒しにされたまま、野犬と鳥の餌になつたんだ!!」

そう言つて兄が墓前の花を踏み潰したのと、ガイウスの拳骨が兄の頬に命中したのはほとんど同時だつた。

「父さんを愚弄するな!! 父さんは捷に従つて公平に罪人を裁いてるんだ!!」

憤りに震える声は思春期の変化を迎えておらず高く澄んでいた。

「デタラメ言いやがつて!!」

すかさず弟がガイウスに掴み掛かる。

「お前の親父が斬り落としてるのは白き羽の首だけだ!! お前の親父は黒き羽と取り引きして、罪を犯した白き羽を慘たらしく処刑する見返りに、自分達一家を奴隸の身分から解放させたんだ!! 裏切り者!!」

「違う、父さんは剣の腕を買われてこの国の秩序を守る執行官に選ばれたんだ!! そんな卑怯なことはしてない!!」

「縛られてる死刑囚を殺すのに、強さなんか関係あるもんか!!」

怯んでいた兄も取つ組み合いに加わり、ガイウスと兄弟は泥臭い喧嘩になつた。

「俺達の両親は…大人が働く時間を増やす代わりに俺達の負担を減らしてくれと主人に願い出た…!! それが偽善の罪になつたんだ。畜生…同じ七つの大罪なら子供の俺を…弱者の俺を殺せばよかつたじやねえか…!!」

拳を振り上げる兄は涙を滲ませている。

「父ちゃんと母ちゃんを返せ!! 返せよ!!」

血を吸つたような夕暮れの空に兄弟の号哭が虚しく響いていた。

厨房と呼ばれていた場所を後にしたガイウスは屋敷の広間へ再び乗り込んだ。

食卓にはバアルだけが座つており、執事に酒を注がせている。

「おやおや！ 今頃戻つても、あなたにふるまう食事は残つていませんよ」

バアルは何食わぬ様子で酒の入つたグラスを口に運ぶ。

「他の奴らをどこにやつた!?」

「皆様はお腹がいっぱいになつたようなので、別室でお休みになられています。彼らの眠りを妨げないよう、どうか御静粛に」

ガイウスは顔色を変えながら槍を構え、バアルに対峙した。

「何が正義だ…何が理性だ…！ イカれた人食い野郎!! お前が解放したと言つていた

奴隸達も全員、料理の材料にしちまつてゐるんだろう!？」

「何をそんなに御立腹なさつてゐるのです？ あなたの真の仲間である私の、何がお気に召さないのでですか？」

立ち上がつたバアルは愉快げに目を細めてガイウスに近づく。

「この世界には二種類の人間しかいない。強い力を持つ者と持たない者。殺す者と殺される者。命を支配し破壊する力を得ることで、人は圧倒的な高みに立てる。多くの黒き羽を望んで抹殺したあなたは、私と同じ全能者ではないですか！ ああ、なんと芳しい血の匂い！」

「貴様と俺を一緒にするな!!」

憤怒の直中につつても、ガイウスは背後に回り込んだ執事の不審な動きを見逃さなかつた。

執事が懐から彼に向かつて投げた数本のナイフを薙ぎ払うと、手斧を取り出し斬り掛けってきたバアルを間合いに入られる前に槍で突き通す。崩れ落ちるバアルから奪つた斧を即座に振りかぶり力を込めて投擲すると、放たれた高速回転の斧は執事の脳天を直撃し薪の如く割つた。

ガイウスは足元に倒れているバアルへ視線を戻す。彼を突いた時の感触が、羽毛の枕を突き刺したかのようでも余りにも手応えがなく不可解だつた。

「あの奸賊共は皆…バアル様の養分となる……」

ガイウスを見上げるバアルの口から弱々しい笑い声が漏れた。

「そして更なる力を得たバアル様は…より多くの弱者や白き羽の悪魔共を殺し、浄化された世界をお造りになられるのだ！　私の命も、その輝かしき楽園のための礎…。偉大なる死よ、万歳……!!」

事切れたバアルの全身が黒く変色すると、拳大程の塊になつて分裂した。その一つ一つの正体は黒い羽を生やした生物の死骸だつた。
 （コウモリ!?　こいつは替え玉だったのか…本物のバアルはどこにいやがる!??）

ガイウスは屋敷内を歩いていた時の周囲の様子を思い浮かべる。重厚な紫檀の床材やシルクの絨毯が一面に広がる洋館の片隅に、地下へと続く石造りの階段があった。秘匿された凶悪を見抜く野生的な勘だけが、彼の足を動かした。

八

「もうこれ以上俺達の犠牲にならなくていいんだ！ こんな所、抜け出そう……！」

暗闇の中で耳にした声を、ディーナが聞き間違えるはずはなかつた。

「俺達のことを誰も知らない土地で、二人だけで暮らすのもそう悪くはない。俺は見てのとおりの世間知らずだから、楽させてやれる自信はねえけど……。お前に教わりながら少しづつ覚えていくよ。俺達なら何とかできそうな気がしないか？」

懐かしいゼロの声に心が震えたが、その言葉は聞き覚えのないものだつた。

「あなたのお陰で一瞬でも……美しい夢を見ることができました」

それに答えるディーナ自身の声はゼロへの感謝と敬意を含んだ前向きな感情が変わらずあるものの、他人行儀でどこか厭世的ですらある。

「ですが、あなたと私を繋ぎ止めていたのはこの首輪だけ。主人と奴隸の関係を越えて私達が生きていくける場所など、どこにもないのです。どうか私のことは忘れてください

い

「ディーナ!!」

「私は……を……捨てる……ことが……」

二人の会話はどんどん遠ざかる。状況は理解できぬまま、胸にどうにもならない悲しみが広がっていく。

目を覚ましたディーナが跳ね起きると、彼女の顔を覗き込んでいたピリポと頭同士が衝突した。

「ピリポ君!! 大丈夫!?

ディーナの石頭をぶつけられたピリポはしばらく身悶えした後、目に涙を浮かべながら彼女に向き直った。

「元気そうでよかつた…。君だけ目を覚まさないでひどくうなされてたから、心配してたんだ」

「ここは…?」

辺りを見回すと、他の仲間達の姿と自分達を捕らえている鉄格子が目に入つた。

「ざまあねえな…また牢屋にぶち込まれるとはよ!」

石の床に座り込むレブロブスが歯がみしている。

ヨハネは大きな溜め息を吐いた。

「してやられたわい。恐らく会食の場に催眠効果のあるガスでも撒かれたのであろう」「私達を眠らせてわざわざ牢屋に運んだりしてるんだから、あの嘘吐き領主はすぐに私達を殺すつもりじやないみたいね。隙を見て脱出しなくつちや！」

ルピルピの言葉に領き、ディーナが立ち上がる。

「鎧の力で鉄格子が壊せないか、やってみる」

「それならとつぐに試してやるぜ」

レブロブスが冷めた目で言つた後、ディーナは意識を集中させても大邪神の鎧が出現しないことに困惑した。

「理由はわからないけど、ここでは鎧の力もヨハネさんの魔法も使えないんだ。眠つてる間に、武器も取り上げられちゃつたし…」

ピリポが落胆しながら言つた。

「そんな…！」

ディーナは鉄格子の側まで近付き、牢屋の外の様子を見た。

先程までバアルと話していた煌びやかな広間とかけ離れた、日の光の届かない寒々しい洞穴のような地下空間である。

床に散在する血の染みは古いものもまだ新しいものもある。さらにはおどろおどろ

しい突起の付いた棍棒や槍等の武器が転がり、磔台や拘束具付きの針だらけの椅子、ギロチンがいくつも置かれていた。

「ここは、拷問部屋？ あそこにあるのは…大邪神の鎧…!?」

拷問部屋が醸す邪気を払うかのような清浄な白い光が部屋の中央に浮かんでいる。光を放つのは、台座に設置されている一領の鎧だった。太陽の神殿でも目にしたように、頑丈に鎖が巻き付けられている。

「いい眺めでしよう？ ここは自慢のコレクションルームですよ！」

地上へと繋がる扉が開き、黒い羽の男が白い羽のメイドを引き連れ現れた。男は牢屋に向かう階段を降りながら眼下のディーナ達を嘲笑う。

「やつてくれるじやねえか!! って、誰だお前？ …その声、まさか：バアルの野郎なのか!?」

レブロブスは口を開けたまま啞然としている。

牢屋の前に立つのは、声こそ同じであるものの、広間にいた細身のバアルとは似ても似つかない肥満の大男であつた。

「食堂であなたの方の相手をしていたのは、私が作つた只の影ですよ。私は大事なお昼休み中だつたのでね」

すると、階段の上にいたメイドがよろめき階段を転がり落ちた。

「バアルの足元で止まり倒れたまま微動だにしないメイドを見たルピルピが悲鳴を上げる。

「どうなつてゐるの!! あのメイド…干からびたミイラみたいだわ!!」
土氣色になつてゐるメイドの全身は萎び、歯や爪は剥がれ落ち、眼窩から今にも目玉が飛び出しそうになつていた。

「面倒な奴に捕まつた。バアルの正体は、人間を餌とするヴァンパイアじやヨハネが渋面を浮かべる。

「生き血を啜つた人間を同じ吸血鬼へと変貌させ、面妖な術を操ると言われておる。わしらの力が封じられたのも奴の術のせいであろう」

「御賢察のとおり。皆様には特別に、偉大な私の力の一端を教えて差し上げましょう」
バアルは勝ち誇つた顔で話し続ける。

「私は創世記戦争で神々が使用していいたといふ兵器に興味を持つていました。そして苦心の末、その技術の一つを復活させることに成功したのです！」

そして興奮状態のまま視線を上に向けた。

「これは私の魔力と生贊達の血によつて作り上げた結晶！ 結晶が生み出す結界はあなた方がいる牢屋を囲んでおり、その中ではいかなる呪力も無効化される！ これで私は安心してあなた方をじっくり料理することができるのですよ！」

高い天井から真紅の結晶体が照明のように鎖によつて吊り下げられ、妖しい光を放つている。

締まりのない肥大した腹を揺すりながら、バアルがげらげらと笑つた。

「あなた方、」と大邪神の鎧を取り込めば、私の魔力はさらに強大なものとなる…アンゲルス教団の教皇すら及ばなくなるだろう！　私は不死者の王としてこの世界に君臨するのだ!!」

「そ、それって僕達を食べちゃうつてこと？　僕は痩せつぽちだから食べてもそんなに美味しくないよ…」

ピリポが恐ろしさに震え上がつていたその時。

「そうはさせるか!!」

義憤に駆られた男の叫びがバアルの高笑いを遮つた。

ディーナは驚き、階段の上に現れた男を鉄格子の間から見上げる。

「ガイウスさん……！」

「バアル！！　貴様は…貴様だけは、刺し違えてでもこの手で殺す!!」

「あなたも愚かな人ですねえ。あのままこの屋敷を出て行けばよかつたものを」

振り向いたバアルは憫笑しながらガイウスを見ていた。

「ここに来るまで見張りの兵士達を全て倒した向こう見ずな勢いには、敬意を表します

がね。なんとまあ、お可哀想に！ そんなボロ雑巾のようになつてしまつては、せつか
くの色男が台無しじゃないですか!!」

ガイウスの頬や腕には切り傷と裂傷が走り、切れ目の入つた服の端々は赤く染まつて
いる。

しかし彼の瞳の光は薄らぐことなく、バアルを討ち果たすという使命に燃えていた。
「私と戦いたいと言うならば受けて立ちましょう。ですがその前に、忠実で勇敢な私の
下部達があなたに挑むようですよ!!」

バアルがそう言つた後に部屋の暗がりから現れガイウスを取り囮んだのは、兵士では
なく食堂で接客をしていた数人のメイド達である。

怯えた様子で鞭を握りしめている彼女達を前に、ガイウスは狼狽した。

「許して！ あなたを殺さないと、私の子供が…バアル様に食べられてしまう…!!」

最初に口を開いたのは、屋敷で働くことに何の不満もないと笑顔でガイウスに答えた
メイドだった。

「私も家族を人質にとられているんです！ お願ひです、私のために死んでください!!
「まだ死にたくない…。離れ離れにされたお父さんに会いたい…!!」

他のメイド達も挙つて胸の内を吐露する。

鞭を手にしてガイウスに立ち向かうメイド達に、彼は父親の姿を見た。処刑台で剣を

振り上げていた父親の姿を。

彼の中で燃え上がつていた憎しみと怒りが、静かな悲しみへと翻つた。

ガイウスは槍を構えていた手を下ろし、俯く。

メイドの一人がガイウスに鞭を打つた。素人の鞭を避けられないはずはないが、彼はそれをしなかつた。

間髪を入れずに何本もの鞭がガイウスを襲う。それでも彼はその場から動かずに歯を食いしばつてただ、耐えていた。

「何してんだ、ガイ!! 戦わねえならとつとと逃げろ!! こんな所で無駄死にする気か!?」

「そうよ!! こんなの…見てられないわ……!!」

レブロブスとルピルピが叫ぶ。

「どうしたんです？ 急に大人しくなつてしましましたね。そんな小娘共を捻り潰すことなど、あなたなら造作もないでしょう？ いつものように殺しの支配を楽しめばいいじゃないですか!!」

メイド達の血が流れるることを待ち望んでいるかのように、バアルは歓喜の表情を漲らせていてた。

「認めよう、バアル。俺は貴様と同じ、薄汚れた人殺しだ……！」

痛みに顔を歪めてガイウスは膝を突いた。

彼の無残な姿をして非情になりきれないメイド達は、鞭を打つ手を止めて立ち竦んでいる。

「白き羽を虫ケラのように扱っていた、傲慢な黒き羽を殺し続けたのは…単なる復讐だつた。奪われたものを奪い返そうと…奴らをいくら殺しても、俺が望んだものは決して手に入らなかつた」

やり場のない思いを抱えながら、ガイウスは小さく息を吐いた。

「そしてこれは…俺のくだらない自己満足さ。大切な者のために命を懸けるお前達を、俺は傷付けたくない」

メイド達を見つめるガイウスの言葉に偽りはなかつた。

「殺すなら殺せ。お前達が一日でも長く生きられるならば、それでいい」

その眼差しは彼女達の命を慈しみ、強く抱擁していた。

「できな…」

そう呟く母親のメイドの頬を涙が伝う。

「私達は間違つてるわ！　この人を殺しては駄目！」

鞭を投げ捨て、メイドはガイウスを庇うように他のメイド達の前に立ち塞がつた。

「こんなにむごい仕打ちを受けてもこの人は…私達の身を案じている。この人は私達を

バアル様から解放してくれる、唯一の希望よ!!』

ガイウスは呆然と彼女の背中を見上げている。

やがて他のメイド達も握っていた鞭を落とし、さめざめと泣き始めた。

「見苦しい傷の舐め合いは、そこまでにしていただきましょう」

興醒めと言わんばかりに、バアルが鼻を鳴らす。

「過ちを犯すはずもない。お前達は既に、意志など失った私の人形なのだから!!」

そして彼は瞳を閉じて詠唱を始めた。

「美しき恐怖を伴い、冥界の血河を渡りて、大神サタンに捧げし暗黒のその命、真紅の死者となりて今こそ、その黄泉の力を示せ!!」

メイド達は金切り声を上げて苦しみ出す。

「どうした!?」

ガイウスは足に力を込めやつとの思いで立ち上がった。

目の前に立つメイドの背中からめきめきと骨が軋むような音が聞こえると、白い鳥類の羽が瞬時に黒いコウモリの羽へと生え変わった。

ゆつくりと振り返つたメイドの顔は土のようになに変色し、白目を剥いて、開かれた口からは鋭い歯が覗いている。

「やはりあの娘達もバアルに血を吸われ、吸血鬼と化しておつたか…」

ヨハネがメイド達を見ながら口惜しそうに言つた。

「聞くのだ、ガイよ！ 彼女らは二度と元の人間には戻れん！ 懐れと思うならば、今すぐに殺してやるのじや！」

「そうだ、殺せ。私は若い女が臓物をぶち撒けて死ぬのを見るのが大好きなんだ！ もつと私を楽しませろ!!」

バアルは腹を揺すりながら大笑いしている。

変わり果てた姿のメイド達は、呻き声を上げながらガイウスに迫る。

「…やめろ……」

声を震わせ、ガイウスは爪が食い込む程拳を握つた。

「やめろ……！」

燻つていた信念の火種は熱情の風に煽られ、自らをも破滅させかねない火炎となつて爆ぜた。

「こいつらの命を、弄ぶな!!」

地下空間内の最奥から巻き起こつた突風が、メイド達を薙ぎ倒していく。

ガイウスが風が吹いた方向を階段の上から覗き込むと、大邪神の鎧が放つていた光が輝きを増し、地下全体を照らしていた。

「大邪神の鎧がガイの思いに呼応しておる…！ あやつも鎧の適合者なのか!?」

鎧の光に目を眩ませながらヨハネが叫ぶ。

ガイウスだけがまじろぎもせず鎧を凝視していた。その表情には一切の迷いも恐怖もない。

「彼女らを救うことができるなら…呪われた鎧だろうが何だろうが着てやる……！」

ガイウスは背中の羽を力強く掴む。

「だから早く、俺に力をよこせ!!」

白い羽が背中から引き剥がされると同時に、鎧を封印していた鎖がひとりでに千切れた。

そして光が収まるごとに、台座に置かれていた鎧は余すところなくガイウスの身に装着されていた。

見る者の心を吸い込むような深い夜空を思わせる濃紺の装甲とマントに、白銀の肩当や鉄靴を格調高くかつ機能的に設えているその鎧を纏つた彼の姿は崇高そのものだつた。それは峻烈と美を併せ持つ戦士だつた。

ガイウスは立つていた階段の最上段から天馬の如く飛躍する。彼が目指した先は、常人では届くはずがない高さに吊るされている真紅の結晶体である。天井と結晶体を繋いでいた鎖を槍の一振りで断ち切り、そのままディーナ達がいる牢屋の前へ苦もなく静かに着地した。

結晶体が地面へ落下し粉々に砕け散ると牢屋内で爆発が起り、鉄格子が吹き飛んだ。

「よっしゃあ！ こつから巻き返すぜ!! 料理されるのはてめえだ、バアル!!」「すごいや、ガイさん！ 助けてくれてありがとう!!」

土煙の中から、鎧に身を包んだレブロブスとピリポが現れる。結界の力が失われ、ヨハネの魔法によつて鉄格子を破壊した彼らは無事に牢屋から脱出できたのだつた。

「私の!! 私の魔力結晶がつ!! あ、ありえない……!! なぜ貴様がミカエルの鎧を着ているのだ!!」

取り乱しているバアルはすぐに彼らに背を向けて逃げるよう走り出した。

「あいつらを生きたまま食つてやりたかつたが、仕方ない……!! お前達、出てこい!! あの邪教徒共を片付けろ!!」

地下室の暗闇に潜んでいた黒い羽の兵士と魔術師達が、バアルと入れ替わりに一行の前に立ちはだかる。

「くつ……！」

ガイウスは先程までの傷が癒えておらず体勢を崩した。その隙を突いて兵士が斬り掛かる。

だが、刃が届く前に鎧を着たディーナが兵士を殴り飛ばした。手には拷問用の棍棒が

握られている。

「余計な真似を……」

ディーナを睨み、ガイウスが呻くように言つた。

「助けはいらねえ。お前らが捕まつたままだとやりにくいから結界を壊したんだ。腰抜け共は引っ込んでろ」

「引っ込まない」

ガイウスをまっすぐに見つめ、ディーナが首を横に振る。

彼女の顔と純白の鎧には、返り血が薔薇の花弁のように広がつていた。

「私は大切な選択を間違えた。失敗した分を取り返さなきやいけない。だから、これ以上みんなに怪我をさせずにあの人を倒す。ゼロの居場所も聞き出す」

ガイウスはしばらく彼女と視線を交わした後、敵兵達の後ろに身を隠しながら立つているバアルを見据えた。

「：俺の邪魔だけはするな」

彼の瞳に再び戦意が満ちる。

戦う力を取り戻した一行の快進撃は目覚ましかつた。

倒した敵から奪つた剣を手に、ディーナとレブロブスが次々と兵士達を斬り伏せる。

ヨハネが呼び寄せた毒の霧に退路を断たれた魔術師達は、ピリボが放つ矢の格好の的

となつた。

「こんなはずでは……!!」

自軍の敗色が濃くなると、バアルは出口の扉に向かつて階段を駆け上がつた。跳躍したガイウスは戦場の兵士達の頭上を飛び越え、扉の前へと降り立つ。

「自分の言葉には責任を持った方がいいぜ、バアルさんよ。俺との勝負を受けて立つてもらおうか」

「黙れえっ!! 低劣な白き羽が、私を見下ろすな!!」

階段の途中で立ち往生しているバアルは、怒りに身体を震わせ、顔を火照らせながら怒鳴つた。

「お前達は世の中の道理というものをまるで理解していない!! 詰まるところ正しさとは、世論なのだ!! この街の住民は皆、私が与える食事に満足しながら生活している。私を受け入れ、私を賞賛している!! その私を倒せばこの街がどれだけ大きな損害を被ることになるか、なぜわからない!?」

「真実を隠され、判断力を奪われた民の声に正しさなどない!! お前が死ねばこの街の奴らも少しは目が覚めるだろう!!」

バアルが放つ魔法の光弾を躊しながら、ガイウスは彼との距離を詰めていく。

「お前には本当に生きている人間に向き合うだけの器量がないのさ!! 批難されること

を恐れているから、力と恐怖で他人を押さえ付けようとする!! お前が築いた街は虚栄心とナルシシズムの塊だ!!」

「ごちやごちやと口先だけの正義を並べ立ておつて!! 大邪神の鎧を着て、自ら神にでもなつたつもりか!?」

「正義を語るつもりも、神になつたつもりもない。白き羽を虐げ殺すことが優越性の証明だと考へてお前のやり方が気に入らねえ!! それだけだ!!」

バアルの手前でガイウスの槍の穂先が雷光のように閃いたかと思うと、次の瞬間にバ

アルは胸を貫かれていた。

槍を胸に受けたまま巨体は宙を舞い、階段の下へ転落した。

「またもや奇跡が起こりおつた!! わしらの旅路は、大邪神達の魂に導かれておるかのようじゃ……」

バアルを討つたガイウスの姿を見上げ、ヨハネがしんみりと呟いた。

九

「おい、しつかりしろ!!」

残りの兵士達を掃討した後、ガイウスは倒れているメイドの一人を抱き抱えた。

ガイウスが大邪神の鎧を着た後、光を浴びたメイド達の背中の羽は再び白い鳥類のものへと変化し、肌は血色のよさを取り戻し、顔貌もすっかり元通りになつてゐる。

「大丈夫、気を失つてるだけよ」

二人の側に駆け寄り、身を屈めたルピルピがメイドの様子を見て言つた。

「ガイ……この前はひどいことを言つてごめんなさい」

俯ぐルピルピは表情を曇らせ言葉を続ける。

「私だつて、あなたのことを何もわかつてなかつた。あなたがこんな……温かい心を持つてゐなんて氣付かなかつた」

「俺も言い過ぎた。だからチャラでいいだろ」

「私ね、日記に毎日みんなのことを書いてるの。ガイのこともいっぱい書いてるわ」

「何が書かれてるか堪つたもんじやねえな」

ガイウスは苦笑し、ルピルピも微笑む。

「でも、今まで書いてたことは自分の思い込みばっかりだつたつてわかつた。私もつともつとみんなのことを知りたい」

顔を上げたルピルピは、ガイウスを包み込むような柔らかい笑顔を見せた。

「残された時間を、あなたのためにも使いたい」

彼は何も言わずその命の輝きを見つめていた。

「私が…負ける……？ この野蛮な邪教徒共に……！」

地面に横たわるバアルはうわ言のように自問を繰り返している。

「バアルよ。お主は不確実で未知の可能性を秘めている人間の生に恐怖しているのであらう。だから生を破壊する力を渴望し、死という確実性に心を奪われた。その結果、街の住民達をゾンビのように、屋敷のメイド達を吸血鬼に変えて支配した」

バアルの傍らに立つヨハネが厳かな表情で言つた。

「ガイは違う。こやつは血を流し続けた腕でそれでも弱者を抱き締めることができたのだ。見返りを求めぬガイの信念には生命への讃歌があつた。お主はその光に敗れたのじゃ」

「信念？ そんなものは…お為ごかしだ！ 殺戮を続けるために、自分達を正当化して
いるだけだ……！」

血を吐くバアルの不気味な笑い声が地下空間内に響く。

「しかし、見れば見る程哀れだ…大邪神の鎧を着る娘よ……。お前がどんなに命懸けで
教団と戦おうとも、愛する御主人様とやらに会うことは…できないのだからな……！」
「それはどういうこと!?」

ディーナが顔を引き攣らせて叫んだ。

「お前達が探し求めている我らが総本山は、この地上のどこにも存在しない！ 絶望の

中でもがき苦しみ、死ぬがいい……!!

一行を嘲笑う声は尻窄まりになり、バアルは息絶えた。

「元気を出して。今のは、僕達を困らせるための嘘かもしれないから……」
バアルの死体の横で立ち尽くすディーナに、ピリポがそつと声を掛けた。
彼女は弱々しく頷く。

「主人探しの方は振り出しに戻ってしまった。気を取り直して次の街に行くしかあるまい。ここからとなると……ベギルドじやな。そこでも領主に当たれば、何かしら情報を得られるはずじゃ」

ヨハネの提案に反対する者はいなかつた。

「それならさつさとここを出よう。俺は一秒でも長くこの街の空氣を吸いたくねえんだ」

「なあ、ガイ！　さつき言つてた、お前が望んだものつてのはよ——」
レブロブスが言い終わらぬうちにガイウスは地下室を出ていた。

十

ディーナ達がカナンの街を出立したその日の夜。

ガイウスは野営地から離れた平原にある切り株に一人腰掛け、夜風に当たっていた。背中の羽を失った身体は軽く感じられる。だが、胸の中には未だに整理できない感情が重く沈んでいた。

「得意のお人好しを発揮しに来たのか？」

ガイウスは振り向かずに背後に立つ人物へ言つた。それは紙袋を抱えたディーナだつた。

ディーナはガイウスの隣まで歩き、恐る恐る口を開いた。

「カナンの街では結局何も食べられなかつたから、お腹が空いてるんじやないかと思つて……。ガイウスさんが加工されたものは食べちや駄目だつて言つてたから、出発する前にこれを買つたの」

そして紙袋の中身を取り出し、ガイウスに差し出した。

「ゴルゴダの牢獄で初めて会つた時、林檎をくれたよね。そんなに昔のことじやないのに、何だか懐かしくなつちゃつた」

受け取つた林檎をしばらく黙つて見ていると、ガイウスは唐突に言つた。

「力なき正義は無効であり、正義なき力は圧制である」

「え？」

「俺の親父が死ぬ直前に言い残した言葉だ。死刑執行人の親父は何人も罪人を殺した

が、その全てが白き羽だつた」

ガイウスが浮かべる切なさに引き寄せられるように、デイーナは彼の隣にある切り株に座つた。

「親父が白き羽の処刑を任せさせていたのは、支配される者同士の結束を防ぎ、矛先が支配者に向かないようにするための黒き羽の巧妙なやり口だつたのさ。子供の頃の俺は気付けなかつた。周りの白き羽が俺達家族を裏切り者と罵つても、親父は何も言い返さなかつた。俺はそれが悔しくてしようがなかつた」

「お父さんは正しいことをしていると、信じてたんだよね」

「親父は処刑する相手が死ぬべき人間ではないとわかつっていた。それでも処刑を続けたのは、断れば自分でなく俺の命が危うくなつたからだろう。正義なき刃を振り続けた親父は苦しんでいた。そして、死んで樂になることを選んじまつた」

手にした林檎を上に放りながら、ガイウスはいつもと同じ冷静さで話し続ける。

「ある朝、親父はおふくろの墓前で死んでいた。顔もわからなくなるくらいメチャクチヤに殴られてな。墓参りに来たところを、処刑した白き羽の遺族に襲われたんだ。剣の達人だつた親父がそいつらを退けられない訳なかつたが、剣を抜いた形跡はなかつた。親父は抵抗せず、遺族の憎しみを受け止めて死んだ。親父の亡骸を埋めながらその時の俺は誓つた。自分の正しさを主張することから逃げ出した親父の代わりに、俺が絶

対の正義を見つけてやると

高く放った林檎を掴んだ手に力がこもる。

「太陽の神殿で大邪神の鎧を着たお前の姿は、俺にとつて完璧だつた。悪を断罪する力を持つた穢れなき正義……お前に付いて行けば俺の望みも叶う気がしたんだ。だからバアルのような奴の申し出を飲んだお前を許せなかつた」

「私は、そんなすごいもののじやないよ。間違えてばかり……今日だつて、ガイウスさんが助けて来てくれたから取り返しのつかないことになつてた」

「そう、お前も俺と同じ人間だ。俺が勝手に理想を押し付けて、勝手に幻滅したんだ。いい迷惑だよな」

自嘲するように薄く笑つた後、ガイウスは表情を引き締めた。

「絶対的正義、生まれつきの悪……そんなもんはねえ。俺達の前には岐路が続くだけだ。それは常に、俺達の行動が理性や尊厳に反してはいなかと問いかけてくる。過ちに気付き自分の力で流れを変えることができる奴もいる。だが、誤った選択を続ければ大抵そいつの心は頑なになる。そこに至るまで費やしたエネルギーと時間を無駄にした事実を認められなくなる。そしてより正しい選択をする力を失っていく」

「じゃあ、白い羽を支配している黒い羽の人達は、分かれ道を間違え続けた結果なのかな」

「奴らは既に行動を選ぶ努力も自由も手放してゐる。眞偽の定かでない神話によつてこの現実が裏打ちされていると思ひ込み、客觀性と合理的判断が欠如した不当な力を使はてるのさ」

「でも…絶対の悪もないならば、私達はやり直すことができるはずだよね。白い羽と黒い羽も共存できるつて信じたい。ゼロやヨハネさんのように、白い羽を差別しないで手を差し伸べてくれる黒い羽の人もいるから」

「あのじいさんは本心じや何を考えてるか全くわからんがな」

ガイウスの瞳の中には新たな決意が生まれていた。

「決めたぜ。俺は教皇にこの歪んだ世界を善しとしている真意を問い合わせに行く。それまで生き延びるために、これからもお前達の力を利用させてもらう」

「よかつた。ガイウスさんと旅を続けることができて嬉しい」

安心して微笑むディーナを一瞥し、ガイウスは呆れたように言つた。

「やっぱりお前は気に障る奴だな」

「えつ」

「どこまでも甘くて、愚直で、口を開けば虫唾が走る綺麗事ばかりだ」

手厳しい言葉の弾雨に、ディーナは身を縮める。

「だが――」

わずかの間彼女が目にしたのは、今までの何よりも気さくで魅力的なガイウスの笑みだつた。

「お前の誠意は俺の信頼に値する」

ディーナが驚嘆を隠せず瞬きをしていた頃には、ガイウスは元の調子で林檎を齧つていた。

こそばゆい気持ちと共に紙袋から取り出した林檎を思い切り頬張つたディーナは、夜空に散りばめられている星々の光を見上げた。